JICA中部
2021年度

開発教育指導者研修（実践編）報告書

独立行政法人国際協力機構 中部センター（JICA 中部）

目 次

巻頭グラフ

Ⅰ　開発教育指導者研修（実践編）の概要 ---------- 1

1　● 目的
1　● 内容

Ⅱ　開発教育指導者研修（実践編）第１回 ---------- 3

3　● 開催概要、第１回のねらい
3　● プログラムの内容

Ⅲ　開発教育指導者研修（実践編）第２回 ---------- 14

14　● 開催概要、第２回のねらい
14　● プログラムの内容

Ⅳ　開発教育指導者研修（実践編）第３回 ---------- 25

25　● 開催概要、第３回のねらい
25　● プログラムの内容

Ⅴ　中間会合 ---------- 33

33　● 開催概要、ねらい
33　● プログラムの内容

Ⅵ　実践報告シート ---------- 35

35　● 実践報告シート一覧
36　● 実践報告シート

Ⅶ　開発教育指導者研修（実践編）第４回 ---------- 70

70　● 開催概要、第４回のねらい
70　● プログラムの内容

Ⅷ　開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム２０２２ ---------- 74

74　● 開催概要、ねらい
74　● プログラムの内容
76　● 実践体験ワークショップの内容
84　● ふりかえりシート

Ⅸ　研修全体のふりかえり・評価 ---------- 86

86　● 研修の期待と満足度について
86　● 研修を受けた自分自身の意識の変化について
87　● 開発教育・国際理解教育の実践について
90　● 学習者の変化や周りへの波及効果ついて
92　● 全体を通して

- MEMO -

研修の様子～第1回 開発教育指導者研修（実践編）＜6月＞

▲全体アイスブレーキング「グローバル・ビンゴ」

▲「素敵なハート」でグループ分け

▲「お弁当屋さんゲーム」を通して考えるグローバル化

▲「持続可能で豊かな社会」とは？

研修の様子～第2回 開発教育指導者研修（実践編）＜7月＞

▲SDGs17 のゴールを分類してみよう

▲貧困の原因や背景を資料から読み解く

▲貧困の悪循環を断ち切るために必要なもの役立つこと

▲「平和を阻んでいるもの」と「平和構築に役立つこと」

研修の様子～第3回 開発教育指導者研修（実践編）＜8月＞

▲対立のメリット・デメリット

▲対立シミュレーション「みんなでバカンス」

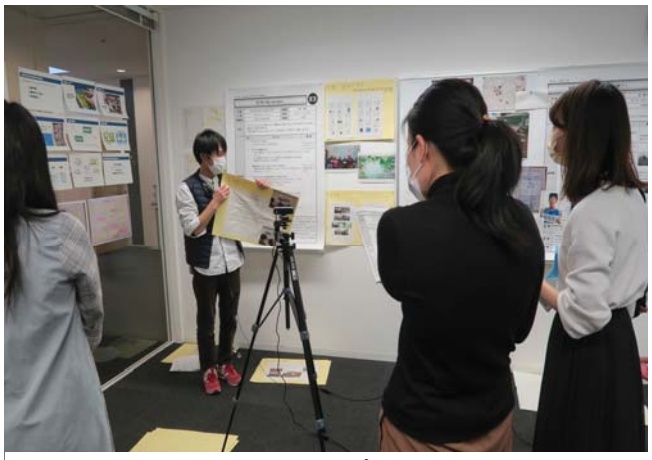
▲参加型プログラムを作ろう

▲プログラム発表、ファシリテーション実践

研修の様子～第4回 開発教育指導者研修（実践編）／実践報告フォーラム2022 ＜2月＞

▲第4回研修：受講者実践の共有

▲開発教育・国際理解教育の可能性



▲実践報告フォーラム：実践報告ポスターセッション

▲実践報告フォーラム：実践体験ワークショップ

Ⅰ　開発教育指導者研修（実践編）の概要

■ 目的

本研修は、持続可能な未来を築くために、人権・環境・共生といった人類共通の課題を理解し、自ら考え、行動する主体を育む場と方法を提供することができる、持続的かつ効果的な開発教育・国際理解教育を実践する中核的な指導者の育成をめざす。また、指導者同士の連携が強化され、ネットワークが形成されることにより、地域における開発教育・国際理解教育が充実することを期待している。

■ 内容

(1) 研修のねらい

4回の研修と実践報告フォーラムを通して、受講者自らが体験的に開発教育・国際理解教育の学び方を学び、この教育の目的、扱う内容、参加型手法についての理解を深め、実践者としてのスキルアップを図る。

(2) 研修日程・内容

回	日時	内容
第1回	6月19日(土) 13:00~17:00 6月20日(日) 10:00~15:00	**開発教育・国際理解教育の概論** **ー何のために何を誰とどう学ぶかー** ・当該教育の目的・内容・進め方を体験的に学ぶ ・私たちの社会の現状課題を確認し、未来への希望を語り合う
第2回	7月17日(土) 13:00~17:00 7月18日(日) 10:00~15:00	**社会課題と社会参画** **ーテーマについて学ぶ・テーマのために学ぶー** ・人類共通の課題（各テーマ）の解決に向けた学び方を学ぶ ・流れのある参加型プログラムを体験する
第3回	8月28日(土) 13:00~17:00 8月29日(日) 10:00~17:00	**自分が変わる・社会が変わる参加型のデザイン** **ー流れのあるプログラムの作り方ー** ・気づきを行動につなぐ参加型学習の実践に向けて学ぶ ・多様な切り口からの学習者主体のプログラムを作る
9月～2月：各自、学校の授業などで実践！ 11月13日（土）、1月22日（土）13:00~17:00 実践のフォローアップ会（自由参加）、 フォーラムでのワークショップ提供チームの検討会（有志）		
第4回	2月26日(土) 10:00~16:00	**開発教育・国際理解教育の可能性** **ーここからつながる持続可能な未来ー** ・当該教育の可能性　ー学びの好循環を作るー ・実践の成果と課題の共有（教師国内研修受講者を含む）
実践報告フォーラム	2月27日(日) 10:00~17:00	・実践の報告、実践体験ワークショップの提供（有志）

(3) **場　所**　JICA 中部 なごや地球ひろば2階セミナールーム

(4) **対　象**

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等の教師、教育委員会の指導主事、地域国際化協会職員、NGO／NPO スタッフ、JICA 海外協力隊経験者などで、開発教育・国際理解教育を実践する場があり現在実践されている方

(5) **参加条件**

① 原則、全研修日程に参加可能な方

② 所属校や地域において実践を行い、実践報告シート（A4 版 1 枚）を 2 月中旬までに提出すること、実践報告フォーラムで発表すること、報告書冊子や JICA ウェブサイト等で学校名、氏名とともに公開されることに同意できる方

③ 本研修に関わる連絡・情報共有のため、E メールアドレスでの連絡が可能な方

(6) **ファシリテーター**

（特活）NIED・国際理解教育センター　代表　伊沢令子

ERIC 国際理解教育センターでの研修を経て、1998 年に名古屋で NIED・国際理解教育センターを設立。現在は、自治体、教育委員会、国際関係団体、大学・学校、NPO/NGO などの依頼により、年間 100 回以上の参加型ワークショップを実施している。当該研修は 10 年以上ファシリテーターを務めている。

◇ NPO 法人 NIED・国際理解教育センター　代表理事

◇ オルタナティブ・スクールあいち惟の森　テーマ・スキル学習コーディネーター

◇ 中京大学「国際理解教育論」、愛知学院大学「ファシリテーション」非常勤講師

(7) **受講者数**

31 名　　所属内訳…小学校教員 16 名、中学校教員 6 名、高等学校教員 4 名、インターナショナルスクール教員 1 名、学生 1 名、NPO 職員 3 名

地域内訳…愛知県 26 名、岐阜県 0 名、三重県 1 名、静岡県 4 名

再受講者…7 名

※第 4 回研修、実践報告フォーラムには、教師国内研修のみ受講していた 5 名が加わった。

Ⅱ　開発教育指導者研修（実践編）第１回

■ 開催概要

◆ 日 時:2021 年 6 月 19 日（土）13:00~17:15、20 日（日） 10:00~15:20
◆ 場 所: JICA 中部なごや地球ひろば 2 階 セミナールームA
◆ 参加者数:
［1 日目］一般受講者 31 名、NIED スタッフ 5 名、JICA スタッフ 3 名 合計 39 名
［2 日目］一般受講者 31 名、NIED スタッフ 5 名、JICA スタッフ 2 名 合計 38 名
◆ ファシリテーター:（特活）NIED・国際理解教育センター 伊沢令子

■ 第１回のねらい

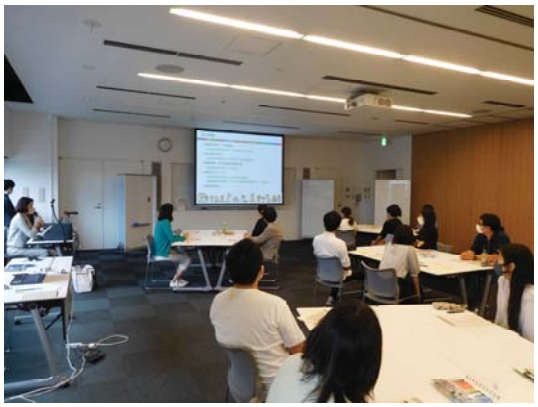
① 研修の全体像と目的を確認し、集まった参加者同士多様な視点から知り合う。
② 何について学ぶのか、何のために学ぶのか、アクティビティを通して開発教育の目的と内容を理解する。
③ 社会の推移や現状を把握し、よりより未来への展望を持ち、その間をつなぐ教育の使命を確認共有する。

■ プログラムの内容

● **セッション１ 「研修オリエンテーションとアイスブレーキング」** 6/19 13:00–15:00

1. 主催者挨拶／本研修の目的および趣旨説明／スタッフの紹介 13:00–[15]

◇ JICA 中部 江口職員が、開会を宣言し、主催者として研修を通じて受講者に期待することを伝えた。
◇ JICA 中部スタッフ、NIED スタッフが挨拶を行った。
◇ JICA 中部 秋山職員が、JICA 事業および本研修の目的・趣旨を説明した。



2. 本研修のポイントと第１回のねらいの確認 13:15–[10]

◇ ファシリテーターが、研修の本旨である開発教育・国際理解教育の概念、参加型での進め方、第１回のねらいについて、レジュメを基に説明した。

3. 全体アイスブレーキング 13:25–[33]

◇ 受講者同士が知り合うことを目的に、次の3つのアイスブレーキングを行った。
①4つのコーナー（参加者アンケート）
・会場に4つのコーナーを作り、ファシリテーターが出す　質問に対して当てはまるところに移動する。

<ファシリテーターが出した質問と4つのコーナー>
好きな季節…春、夏、秋、冬
どこから来たか…愛知県、岐阜県、三重県、静岡県
年代・・・20代、30代、40代、そのほか
好きな麺類…うどん、そば、パスタ、ラーメン

②グローバル・ビンゴ

・会場を自由に動き回ってペアを作り、資料2（「グローバル・ビンゴ」シート）を基に質問をし合う。1人に1つずつ質問して、ペアを変えて繰り返し行う。2列のビンゴができた人から席に着く。

③「素敵なハート」でグループ分け

・1枚ずつ配られたカードを持って会場を自由に歩き回りカードを合わせると1つのハート型になるような仲間を集めてグループに分かれる。

4. グループでアイスブレーキング　13:58–[35]

◇ グループごとに、次の2つのアイスブレーキングを行った。

①3つのキーワードで自己紹介

・個人で A4用紙に、「自分を紹介するための3つのキーワード」を書き出し、グループ内で紹介し合う。

②モノローグで自己紹介&他己紹介

・個人で A4用紙に、「自分の好きなモノ・大切にしているモノ10コ」を書き出し、その中から自分を紹介するために3つ選ぶ。

・まずは、グループ内でペアを作り、紹介し合う。その後、グループ内で他己紹介をする。

◇ ファシリテーターコメント…世界に関心を持ち理解したいなら、身近な他者を理解することが大切。まずは自分に対する関心がなければ、他者への興味関心に向かわないと教育心理学では言われている。自己紹介は自己理解を促すものでもある。自分、他者、社会の理解を行ったり来たりしながら、国際理解教育への理解を深めていく。

5.「参加のルール」づくりー豊かに気持ちよく学び合うためにー　14:33–[27]

◇ ファシリテーターから、参加型ワークショップの3つの前提を伝えた。

<参加型の3つの前提>
協力…協力なしでは参加型は進まない。1人ひとりの積極的な参加が大切。
尊重…開発教育・国際理解教育に関心のある人が集まっているが、価値観は多様。異なる考えを尊重しよう。
守秘…安心して自己開示ができるように、この場で語られた個人的なことはこの場だけで留めておこう。

◇ 「豊かに気持ちよく学び合う私たちの約束」をグループで話し合い、3つのキーワードにまとめた。

【「豊かに気持ちよく学び合う私たちの約束」の成果 】

1. 楽しく笑顔でね
2. 名前を呼び合おう
3. みんなが話せるようにパスを回そう
4. 誰かが話しているときには、リアクションしよう
5. 小さな変化に気づこう
6. コミュニケーションのキャッチボールをしよう
7. 余白の時間を大切にしよう
8. 体調を整えよう
9. 最後の打ち上げを楽しみにガンバロウ!
10. アウトプットを大切に
11. 意見と共に、理由背景を伝えよう
12. ノンアルコールでも交流
13. 失敗してもいいよね、大丈夫!
14. ポジティブな言葉で楽しい雰囲気づくり
15. 考えすぎず、思いつきでも発言しよう
16. ほめて認め合っていこう

◇ ファシリテーターコメント…「ルール」というと誰かが作り、守らなければいけないものというニュアンスがあるが、主体的に自分たちで作った約束は、自分たちが必要だと考えたことなので大切にしていこうという意識が生まれる。

- 休 憩 -　15:00–[10]

● セッション2 「私たちと世界のつながり」 6/19 15:10−17:15

1. グループ替え～自己紹介 15:10−[15]

◇ ジャンケンをして、勝った人と負けた人がグループを移動してグループ替えをした。

◇ 「自分のウリ（いいところ、得意なこと）」をお題に一言自己紹介をした。

2. 見つけよう外国から来たモノ 15:25−[10]

◇ 参加型手法「ブレインストーミング」を用いて、「外国から来たモノ/世界とつながりのあるモノ」をグループで書き出した。

◇ ファシリテーターコメント…参加型学習の「参加型」というのは、単に多様な人が参加するからと言うだけではなく、テーマについて考えやすくするための考え方の枠組み（＝参加型手法）を多用すること。

【 「外国から来たモノ／世界とのつながりのあるモノ」の成果例 】

服、時計、スマートフォン、紙、文房具、インク、ドリンク、消毒液、靴、コーヒー、マスク、タオル、眼鏡、蛍光灯、帽子、鞄、傘、漢字、雨、空、時間、パソコン、エアコン、名札、机、椅子、コスメ、アクセサリー、ノート、キャラクター　など

3. 「お弁当屋さんゲーム」を通して考えるグローバリゼーション 15:35−[89]

◇ 資料 4（お弁当屋さんゲーム ルール説明書）を各自で読んで、ルールを確認した後、シミュレーションゲームを行った。

<進め方>

・各グループは家族経営の弁当店となり、米・肉・魚・野菜の4種類それぞれの食材を国内産・国内産有機・外国産の中から選んで仕入れ、弁当を販売する。

・仕入れと販売を3ラウンド繰り返し、最終的な所持金額が一番大きなグループが勝ち。

・ラウンド毎に、食材の仕入れ価格に関するニュース（A~C）が発せられ、仕入れ価格に変動が起こる。

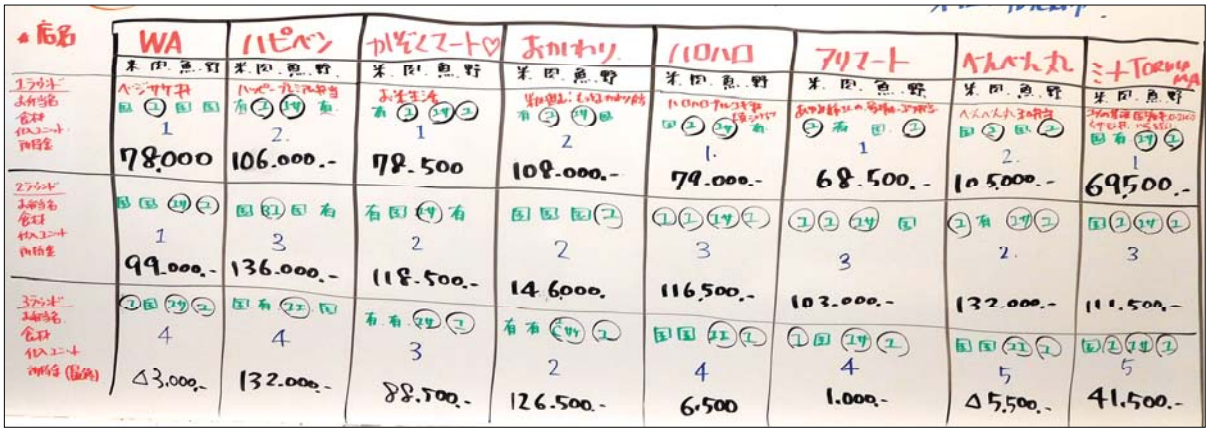
<ニュースとそれに伴う影響>

	ニュース	影響
A	①バイオ・エタノール生産が急増 ②野菜の輸入が急増	①輸入飼料が高騰 ②輸入野菜に対して政府がセーフガードを発動
B	①タイで大洪水、中国で大干ばつ、日本は冷夏だった ②北米大陸と欧州で BSE（通称：狂牛病）が蔓延、B 国産輸入牛は草と穀物しか食べていない	①日本の輸入米買い占めでサハラ以南地域で飢餓発生 ②B 国産輸入牛への需要が高まる
C	①中国で飼料穀物の輸入が、ロシアで牛肉の輸入が急増 ②人気テレビ番組で食品の安全性が取り上げられた	①輸入飼料と輸入牛肉の価格が高騰 ②農薬の問題が取り上げられ、有機無農薬野菜に人気集中、その他は売れ残った

◇ グループで感想を話し合い、全体で発表した。

◇ ファシリテーターが、世界人口の2%である日本が、世界中で輸入される肉の１/4、魚の１/5 を輸入する輸入大国であり、食料自給率も40%に留まる状況について説明した。

【「お弁当屋さんゲーム」の結果 】



【「お弁当屋さんゲームの感想、気づいたこと」例 】

・「食」は世界とつながっている　・途中から売り上げ目的になってしまった　・情報におどらされてしまった
・安さを追い求めてしまい、失敗した　・遠い国の出来事が私たちの生活に大きく影響を与えることもある
・限られた資源を分け合っているから、輸入品の価格はいろいろなことに左右される

4. 開発教育・国際理解教育の目的と明日の予告 16:59–[03]

◇ ファシリテーターから、開発教育・国際理解教育の目的をレクチャーした。

<開発教育・国際理解教育の目的>
人権、環境、平和など、人類共通の課題は何かを理解し、課題を解決しながら、持続可能なよりよい未来を築くために必要な知識と力を育む。

<開発教育・国際理解教育で育てたい3つの力>
①わたし＝自己に関わる力…自己理解、自己肯定感、自己尊重
②あなた＝他者に関わる力…他者理解、他者尊重、コミュニケーション力
③みんな＝社会に関わる力…参加協力、対立解決、合意形成、アドボカシー（社会的提言）

◇ ファシリテーターコメント…この教育では「わたし・あなた・みんな」に関わる力（スキル）を育んでいくことから、講義形式ではなく、参加型で進められる。協力し、話し合い、関わることを繰り返し、3つの力を育んでいく。

5. 1日目のふりかえり 17:02–[08]

◇ 本日の感想、気づいたことをグループ内で伝え合い、数人が全体で発表した。

6. 事務連絡 17:10–[05]

◇ 事務局より、2日目の昼食について、連絡方法としてメーリングリストに加え補助的に LINE も活用することについて連絡を行った。

★ 17:15 **1日目終了**

● セッション３「私たちの社会の現状とビジョン」　6/20 10:00−12:10

1. アイスブレイク 10:00−[26]

◇ 次の4つのアイスブレーキングを行った。

① 動:ストレッチリーダー

・リーダーに倣い、ストレッチをする。

② 静:60秒メッセージと受け入れる樹

・ペアになって、60秒で気持ちを自由に話す。聞き手は傾聴で相手の言葉に耳を傾ける。

③ 静:60秒のカームダウン

・60秒間、誰も話さずに静かに過ごしてみる。

④一言自己紹介

・「今の気分は何色?」をお題に、一言自己紹介をする。

◇ ファシリテーターコメント…この研修ではいろいろな視点から一言自己紹介を繰り返して、自己理解と他者理解を深めていく。開発教育・国際理解教育といった参加型の教育は気づきの教育とも言われる。教えるのではなく、気づいてもらう、気づきを引き出す問いかけを考えることが大切。

2. グローバル化した世界の困り事!? 10: 26−[102]

2−1. グローバル化した世界が抱える地球規模の問題と国内問題 10:26−[71]

◇ 参加型手法「ブレインストーミング」を用いて、「グローバル化の恩恵」をグループで書き出し、ポップコーン方式で全体共有した。

◇ 各自で付箋紙に「グローバル化した世界の困り事」を考えて書き出した。

◇ 参加型手法「カード式分類法（KJ 法）」と「対比表」を用いて、「グローバル化した世界の困り事」を整理分類した。

◇ グループで成果物を見ながら、「この作業を通して分かったこと・気づいたこと3つ」を書き出した。

◇ 成果物を回し読みし、自分のグループでは出なかった意見で共感をもったものには、各自で★印をつけた。

◇ ここまでの作業をしてみて気づいたことや感想を、全体で数人が発表した。

◇ ファシリテーターコメント…成果物を共有する際に、共感したアイデアに★印をつける作業を加えるだけで、関心を持って他者の意見を見ることができる。また、個人ではなく多数で学ぶ参加型は、意見交換や体験を繰り返していくことで、情報を共有し、学びを分有していこうという学び方。

【「グローバル化の恩恵」成果例 】

・衣料 ・何でも手に入る ・金属が手に入る ・インバウンド ・言語 ・クラスに外国籍の子が増える（楽しい）
・ワクチン ・職が豊かになる ・移住しやすくなる ・新しい文化になる ・スポーツ ・最新のものが手に入る
・世界が身近になる ・海外の人と簡単につながれる ・情報が増える ・エネルギーが手に入る ・海外ドラマ
・飛行機代が安くなる ・選択できる価値観が知れる ・物が安くなる ・海外の人と友達になれる ・ビットコイン
・Amazon ・旅行に行ける ・海外進出しやすくなる ・多様な音楽が手に入る ・労働力確保

【「グローバル化した世界の困り事」キーワード成果例 】

日本　・輸出入 ・労働 ・多様性 ・搾取 ・言語 ・日本に暮らす外国人の問題 ・健康問題

世界　・格差 ・武器 ・人権 ・環境 ・情報過多 ・食料問題 ・国のエゴ ・多様性

【「この作業を通して分かったこと・気づいたこと3つ」成果例 】

・格差や差別は全員が書き出していて、大きな問題だと思っている ・良いことと悪いことは紙一重
・日本と世界の問題は共通している ・それぞれの問題がすべて繋がっている ・大国の経済が世界全体に影響
・格差や差別の原因にはいろいろな繋がりがあり、根本原因が分からない ・日本はグローバルイシューに疎い
・多面的な解決策を考える必要がある ・目に見えない問題が多い ・グローバル化で格差が広がる
・豊かな国の考え方がいろいろな問題を生む ・日本の課題の繋がりが見えづらい

2−2. データで確認する現状課題 11:37−[31]

◇ 資料7（世界を変えるための17の目標 SDGs 世界・日本の現状）と資料8（IPCC『1.5℃特別報告書』（2018）の概要）をグループで分担し読み解いた。

◇ 担当した資料から、次の3点をグループで共有した。
①何について書かれていたか ②分かったことは何か ③最も印象に残ったことは何か

◇ グループ内で午前の感想、気づいたことを伝え合った。

◇ ファシリテーターコメント…世界で共通の認識をもって、多様な人々が参加して定めた目標が SDGs。この2030 年の目標は、続かない社会を続く社会にしていくための一時的な通過点に過ぎず、その先にある、誰もが豊かさを享受し、環境にも配慮した持続可能でよりよい社会のビジョンを描き、目指していくことが大切。

- **休 憩** - 12:08−[52]

3. 2050年の持続可能な社会のビジョンー2030年は通過点！ー 13:00−[88]

3−1.「豊かな社会にとって大切なこと」ランキング 13:00−[38]

◇ ファシリテーターが番号を順番に振って、グループ替えをした。

◇ 各グループで、ジャンケンをして勝った人が自由にお題を決めて、一言自己紹介を行った。

◇ 個人で、資料9−1（カード「豊かな社会にとって大切なこと」）に書き出された25項目から、私にとって大切なことを9項目選び、さらにその中から5つ選び、最も大切なこと1つに印をつけた。

◇ グループで、各自で選んだ5つと、最も大切なこと1つの理由を紹介し合った後、数グループがその傾向を全体で発表した。

◇ 次に、個人で「日本の子どもたちにとって大切なこと」という視点で、資料9-2（こども編）から3項目を選び、グループで共有しながら共通点や傾向について話し合った。

◇ 最後に、個人で「社会的に不利益を被ることが多い人にとって大切なこと」という視点で3項目を選んだ。

【「豊かな社会にとって大切なこと」ランキングで選んだ項目の傾向や共通点例 】

「わたしにとって大切」という視点の場合

・11（性別、人種、考え方、行動や生活様式などの「違い」を理由に攻撃されたり排除されたりする心配がない）と、21（いざというときに頼ることができる人がいる）という2つがグループの全員に共通していた。最も大切なことについては、全員が違っていた。

・全員が選び、そのうち3人が最も大切なものとして、2（誰もが尊厳を持って、仕事の量や内容に見合った対価を得ながら働くことができる）を選んでいた。

・全員が11を選び、2も多くの人が選んでいた。

「日本の子どもたちにとって大切」という視点の場合

・全員に共通して教育に関わる項目を選んでいた。14（だれでも家庭の事情に左右されず、自分の夢や希望を実現するために、学校や家庭で必要な教育を受けることができる）と15（通った学校や受けた教育の種類を理由に、将来の進路が制限されない）

・共通して選んだ項目は4つ。10（暴力やいじめに怯えないでくらすことができる）、14、17（性別、生まれた国、容姿、考え方、行動、障害、病気など、何かしらの「違い」を理由に差別されたり、いじめられたりする心配がない）、20（安心して一緒にいられる友だちがいる）

・「違い」はそれぞれがもっているものなので、それは受け入れて安心して暮らせることが大切という17を、全員が選んでいた。

3−2. よりよい未来のビジョン 13:38−[50]

◇ 参加型手法「派生図」を用いて、SDGsの3要素「自然・環境」「社会」「経済」と「意思決定」という4つの視点から、「持続可能で豊かな社会」とはどのような社会かを派生させて考えた。

◇ 4つの視点とは別の視点からキーワードを追加した後、各自で「わたしにとって大切な要素」を3つ選び、印をつけた。

◇ ギャラリー方式で他のグループの成果物を個人で見て回り、共感するアイデアに★印を付け、自分のグループではなかった意見で大切だと思うものはメモを取った。

◇ グループで、派生図を基に具体的な文章で「持続可能で豊かな社会の7ヵ条」をまとめた。

◇ 全体で、グループごとにまとめた「持続可能で豊かな社会の7ヵ条」を読み上げて共有した。

◇ ファシリテーターコメント…目標は具体的であるほど行動に結びつきやすい。そして、問題を自分事として身近に引き寄せて考えてもらう様々な工夫をする必要がある。「知る・考える・気づく」と「気づく・考える・行動する」を繋げていくのが開発教育・国際理解教育。

【 派生図「持続可能で豊かな社会」の成果例 】

【 「持続可能で豊かな社会の7ヵ条」の成果例 】

①だれもが教育を受ける権利を得られる社会
②子どもや社会的弱者の意見も採用される社会
③食・エネルギーが時給でき、環境を守れる社会
④働き方改革による、職場環境の整備充実
⑤大人も学びの継続ができる社会
⑥自然に強い社会（環境も保障も）
⑦動物も住みやすい社会

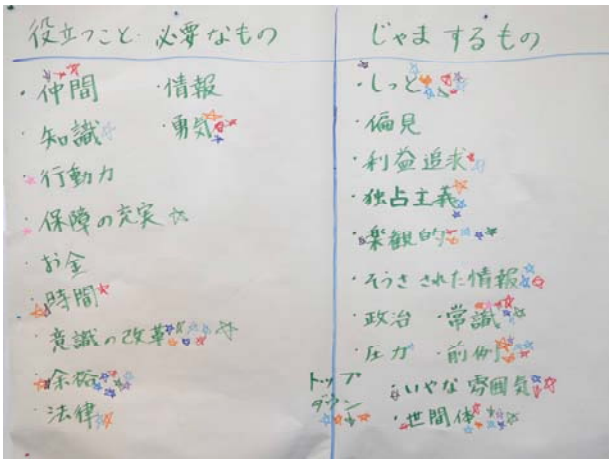
①失敗してもOK!な社会
②プライベートな時間を大切にできる社会
③誰にとっても居心地のよい社会
④リーダーが育つ社会
⑤物価にあった賃金がもらえる社会
⑥まじめな人が報われる社会
⑦必要なものを必要なだけつくる社会

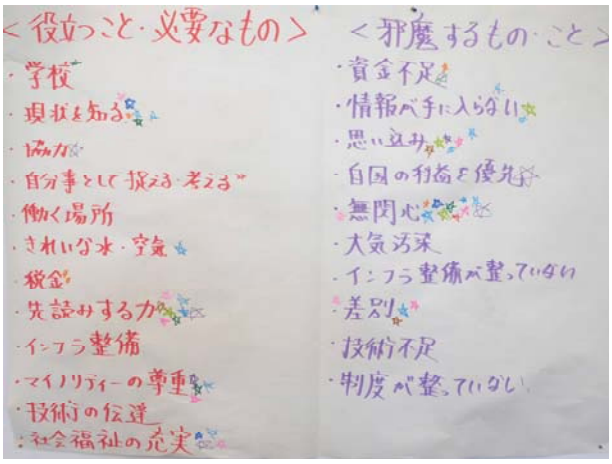
● セッション4 「課題を超えビジョンへとつなぐ教育の使命」　6/20 14:28−15:12

Ⅰ. 課題を超えてよりよい未来を築くために　14:28−[28]

◇ 多様さを意識しつつ、この2日間あまり一緒になっていない受講者同士で自由にグループを作った。
◇ グループで「わたしのオススメ」をお題に一言自己紹介を行った。
◇ 参加型手法「対比表」を用いて、課題を超えて「よりよい未来を創る」ために役立つこと・必要なものと邪魔することを書き出した。
◇ 模造紙を回して成果物を共有し、自分のグループでは出なかった意見で共感するものに、各自で★印をつけた。
◇ ファシリテーターコメント…「もう１つアイデアを追加してみて」と声を掛けたら、どのグループも追加することができた。参加型ファシリテーターにとって大切な3つのことは、①参加者は力を持っていると信じること、②参加型の手法の力を信じること、③自分自身を信じること。

【 「よりよい未来を創るために役立つこと・必要なもの／邪魔すること」の成果例 】





役立つこと・必要なもの

・教育 ・知識 ・子育て ・制度 ・楽しいことや遊び ・ゆとり ・時間 ・少数意見も尊重される ・豊かな自然
・おいしいごはん ・睡眠 ・仲間 ・クリーンなエネルギー ・他者理解 ・共生 ・優しい心 ・思いやり ・広い視野
・自国のことを知る ・共感してくれる人 ・背中をおしてくれる人 ・コミュニケーション ・想像力 ・イノベーション
・ポジティブ発言 ・自分事につなげていく ・学ぶ場 ・よりよい世界になるという希望をもつ力 ・エシカル行動
・自分の影響力を知る ・自己肯定感を高める ・正しい情報の共有 ・循環型のしくみを整えている企業や団体
・知識、能力、財産等の再分配 ・新しい科学技術 ・勇気 ・行動力 ・保障の充実 ・お金 ・法律 ・トップダウン

邪魔すること

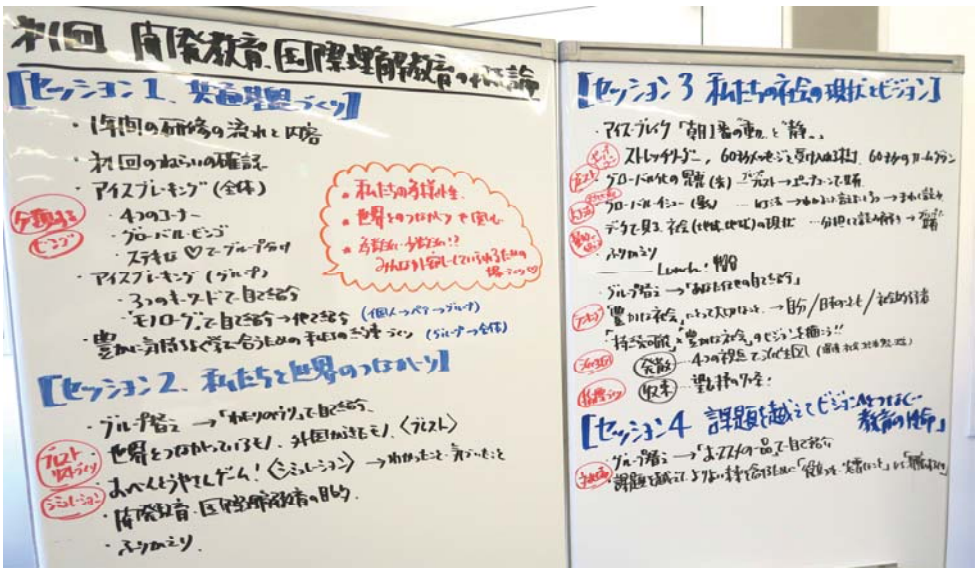
・子どもの労働 ・学ぶ機会の制限 ・貧困 ・忖度 ・時間外労働 ・古い考えを持った人たち ・自国第一主義
・過度な開発 ・物価の上昇 ・名もなき家事 ・差別 ・火力、ダム、原子力、風力発電 ・無知 ・欲、エゴ
・固定概念 ・想像力の欠如 ・資本主義 ・利益第一主義 ・情報や思想操作 ・無関心 ・ネガティブ発言
・「意識高い系」という偏見 ・多忙 ・自分を過小評価する ・環境に悪影響を与える体制 ・思考の停止
・あきらめ ・嫉妬 ・楽観的 ・常識 ・前例 ・圧力 ・嫌な雰囲気 ・トップダウン ・世間体

2. 開発教育・国際理解教育の背景、目的、内容と教育に関わる国際的合意 14:56–[06]

◇ ファシリテーターが2日間の研修内容をふりかえりつつ、開発教育・国際理解教育の背景、目的、内容について説明し、詳細は資料10（「国際理解教育、開発教育、SDGs」）を確認するように伝えた。

3. ふりかえり 15:02–[10]

◇ 個人で2日間をふりかえり、①気づいたこと・わかったこと、②嬉しかったこと、③大切だと思ったことで、教育者として実行しようと思ったことの3つをA4用紙に書き出した。
◇ 書き出したことの中から1つ選んで、グループで紹介し合った。
◇ 全体で、数人が感想を発表した。



4. 事務連絡 15:12–[08]

◇ 事務局から今後の連絡方法ついて確認し、過去の研修の報告書冊子を配付した。また、20年度に作成した「教師海外研修ガイドブック」はJICAウェブページに公開されていることを伝えた。
◇ 江口職員が終わりのあいさつを行い、研修を終了した。

★ 15:20 **2日目終了**

― 第１回研修の振り返り ―

1. 2日間で分かったこと・気づいたこと

◇ある判断が、他に与える影響について考えたり、知ったりする視点を持つこと
◇豊かな社会にするために、世界全体でジブンゴトに!!
◇国際理解教育のもつ可能性と大切さ、そしてやはり、この地球は危ない!!
◇国際問題・国内の問題を自分事として自覚することの大切さ
◇自分の考えをアウトプットし、他の人から意見をもらいインプットすることで、新たな気づきがあったこと
◇国際理解教育は「人権」「環境」から問題を見つめると捉えやすくなる
◇自分以外の立場の人のことを考える（想像する）ことの大切さと難しさ
◇世界には多くの課題があるが、日本国内にも大きな課題がある。そんなことを一緒に考えられる人たちがいること
◇世界のことを考える前に、日本のことを全然理解していないことに気づいた
◇自分には、まだ知らないことが多すぎるということに改めて気づけた
◇自分は知らないことが多いということ。仲間たちから学ぶことがこんなにも楽しいなんて知らなかった
◇一人だけだと思いもつかない考えが知れた。みんなで学ぶって大切
◇豊かな社会は様々な視点で考えられることがわかった。自分のこととして考えるのが大切!
◇知ることの大切さ、人と関わることのたのしさ。改めて地球温暖化の危機!
◇意見を出す、共有する、まとめる、発表する様々な方法を学ぶことができた
◇一人で考えるよりも、みんなで考えるとたくさんの意見が出る
◇誰にとって豊かか?で大切だと思うことが違ったこと
◇１日目と2日目で参加者が打ち解けていたこと
◇日本の課題について自分自身もっと知らなきゃ!
◇話し合うことで考えがふくらむ
◇お金がからむと自分本位になる。気をつけよう!
◇SDGs を全世界に早く周知しないとかなりヤバイぞ!
◇１つ１つの手法、やり方に意味があること
◇知らなきゃ始まらない!
◇まだまだ狭い視野、視点でしか物事を捉えられていない。
◇一人よりみんな
◇自分事にする大切さ

2. 嬉しかったこと

◇学校では中々話せないので、たくさん世界について広い視野をもって考え、話すことができたこと
◇視野、考え方がとっても広がった!!もっともっと知的好奇心が刺激された!
◇自分の意見に共感してもらえた。また、一人では思いつかないような考え方、価値観を学べた
◇意見を述べたら「あ～!」と言ってくれたこと。自分の意見に☆がついていたこと
◇若い人がたくさん参加されており、日本もまだまだ捨てたもんじゃない。次の世代につなげていく
◇自分と同じ考え、自分とは異なる考えにふれることができた
◇なにか話したことにリアクションしてもらえること。同じことを学んで楽しいと思えていること
◇いろいろな人の意見が聞けた。自分の意見に☆がたくさんついて返ってくるとうれしい
◇学校現場の方々の声が聞けたこと
◇参加者の皆さんのポジティブな雰囲気
◇自分の意見に「それいいね!」と言ってもらえたこと
◇自分の意見をうなずいて聞いてもらえてうれしい!
◇対面でできた!様々な意見にふれることができた
◇考えたこともない意見と出会えた
◇知らないことをたくさん聞けた。刺激をたくさんもらえた!
◇自分、グループで考えたものに☆がもらえたこと
◇たくさんの人の話や意見を聞くことができた
◇うなずいて自分の話を聞いてもらえた
◇リアクションが可視化されたこと
◇仲間との出逢い、意見の共有!!
◇新しい学びが広がってきた!!
◇自分の意見に共感してもらえた時
◇自分の意見に☆がついていたこと
◇自分の意見が尊重されたこと
◇自分にない新しい考えを知れた
◇たくさんの知識をもらえたこと
◇「あるねー」と認めてもらったこと

3. 教育者として実行しようと思ったこと

◇聴くこと、受け入れること
◇伝えつづける
◇ルール作り
◇WS の際の丁寧な声かけ
◇「食」は全世界とつながっている
◇低学年でも参加型授業

◇場の設定と指示すること　◇自分の生活を見直す　◇子どもの“参加者の力を信じる”
◇ジブンゴトプログラムで、みんなで豊かに！　◇子どもたちが安心して発言できる雰囲気作り
◇傾聴の姿勢（うなずき、反応）、話しやすい雰囲気づくり　◇意識改革が大事。小学生にも日頃から伝えていこう！
◇他者との交流、自分の意見を整理→共有　◇子どもたちを信じて、授業（安全策ばかり×）
◇学んだことを、他人（次の世代）に伝えて一緒に考え、行動する！
◇なぜそのアクティビティをするのか、アクティビティのルールを伝えること
◇発散からの収束。いつも収束を教員がこじつけるようにやっていた。子どもに収束させたい。
◇グループワークではルールをしっかり明示する、丁寧に説明する
◇自ら参加しようという意思。普段の授業でも、参加型の方法を取り入れられるところがないか考え、実践する
◇「自分だけ、今だけ良ければいい」という考えに疑問を持たせたい
◇「学び合うための約束」を、この場だけでなく日常生活でも応用＆考えてみる！
◇わかった、気づいたけど、やらなきゃ意味がない！！まず2日間で行ったアクティビティを１つでも授業でやること！！
◇派生図、B 紙に意見まとめ、よかった意見に☆、「あ～いいね」というリアクション
◇自分の考えを受け入れてもらえる環境を作ること。教室を安心できる場にする！！
◇ポップコーン方式、KJ 法、派生図、弁当ゲーム、☆をつけるなど、すべての方法を試したい。
◇つねに広い視野をもち、声を掛けられる人でありたい。またレイチェルさんのようなすてきなファシリテーターを目指します！

― 研修で使用した教材の出典等一覧 ―

・セッション1-3.「グローバル・ビンゴシート」…認定 NPO 法人 開発教育協会（DEAR）『基本アクティビティ集１』
・セッション2-3.「お弁当屋さんゲーム」…認定NPO法人 開発教育協会（DEAR）『ワークショップで学ぶこれからの食育お弁当屋さんゲーム-食のグローバリゼーションを考える-』
・セッション3-2.「世界を変えるための17の目標 SDGs 世界・日本の現状」…認定 NPO 法人 国際協力 NGO センター（JANIC）ウェブページ https://www.janic.org/world/about/
・セッション3-2.「IPCC『1.5℃特別報告書』の概要」…環境省（2018）
・セッション3-3.「豊かな社会にとって大切なこと」…認定 NPO 法人 開発教育協会（DEAR）『豊かさと開発－Development for the Future』

Ⅲ　開発教育指導者研修（実践編）第2回

■ 開催概要

◆ 日 時:2021 年 7 月 17 日（土）13:00~17:25、18 日（日） 10:00~15:20
◆ 場 所: JICA 中部なごや地球ひろば 2 階 セミナールームA
◆ 参加者数:
　［1 日目］ 一般受講者 26、NIED スタッフ 5 名、JICA スタッフ 2 名 合計 33 名
　［2 日目］ 一般受講者 28 名、NIED スタッフ 5 名、JICA スタッフ 1 名 合計 34 名
◆ ファシリテーター:（特活）NIED・国際理解教育センター 伊沢令子

■ 第２回のねらい

① 開発教育と SDGs の中心的テーマである人権や環境について、参加型で学ぶ流れを体験する。
② 社会をよりよく変えていくためには、「知り、気づき、行動する」ことをつなぐ教育が必要であることを共有する。
③ 「学んだ側の態度と行動が変わる」という開発教育の最終目標を確認し、人の行動変容を支える参加型の方法論を学ぶ。

■ プログラムの内容

● **セッション I 「共通基盤づくり」** 7/17 13:00−15:00

I. 主催者挨拶／第2回のねらいの確認 13:00−[10]

◇ JICA 中部 江口職員が、開会を宣言した。
◇ ファシリテーターが、本研修全体の流れとねらい、第 I 回のねらいについて、レジュメを基に説明した。また、並行して行われている「教師国内研修」について情報提供した。

2. アイスブレーキング 4つのわたし I つはウソ 13:10−[20]

◇ 個人でA4用紙に4つの自己紹介を書き、そのうち I つはウソを書いた。
◇ グループで、順番に自己紹介をして、ウソを当て合った。
◇ ファシリテーターコメント…見ているだけでは人のことは分からない。I つウソがあることで、興味関心をもつための仕掛けになっている。国際理解は、身近な他者に対する関心をもち、理解することから始まる。さらには、自分自身に対する理解や共感がその基盤になる。

3. 第 I 回のふりかえりと第2回の自分目標 13:30−[30]

◇ 個人で、印象に残ったところ3つに下線を引きながら第 I 回の記録を読んだ。
◇ 下線を引いたところとその理由を、グループで紹介し合った。
◇ 個人で、この2日間の「自分目標」を考え、グループで紹介し合った。
◇ ファシリテーターコメント…参加型学習は積み上げていく学習。体験したことなので、記録を見れば思い出すことができる。また、言葉にしたり伝えたりすることで、意識化でき、行動に繋がる。

4. SDGsについての理解を深めよう 14:00–[52]

◇ SDGs カードを使って、SDGs についての理解を深めるグループ作業を行った。

①気になるカード

・気になったカード1枚を選び、そのカードを選んだ理由とカード裏面に書かれたゴールの内容を要約してグループ内で紹介し合った。同様に、3ラウンド行った。

・選ばれなかった残りの5枚について、カード表面のゴールの簡易説明を読み合わせた。

②17ゴールを分類してみよう!

・17のカードを分類整理し、グループ毎にカテゴリーにタイトルをつけた。

・ギャラリー方式で、他のグループの分類の仕方を見て回った。

・ファシリテーターが、1つの分類の仕方として「5つの P」を紹介した。

③途上国と日本の優先課題トップトップ3?!

・途上国と日本、それぞれにとって大切なゴールトップ3を、グループで話し合って選んだ。

④「持続可能なよりよい未来のビジョン」と SDGs の関わり

・第1回の記録「持続可能で豊かな社会の7箇条」の項目が、SDGs ゴールのどれに関係するか、グループで話し合った。

◇ ファシリテーターコメント…SDGs を自分事として理解するために、いろいろな手法を使って視点を変えながらみてみる作業を繰り返した。SDGs は最終ゴールではなく、持続可能なよりよい未来に向けた中間点であり、よりよい未来を実現するためにはこれらのクリアは不可欠。

【「17ゴールの分類」の成果例 】

【「途上国と日本の優先課題トップ3」例 】

途上国	・貧困（Goal1）・飢餓（2）・水（6）・教育（4）
日本	・ジェンダー（5）・つくる責任つかう責任（12）・パートナーシップ（17）・健康と福祉（3） ・産業と技術革新（9）・働きがい（8）・住み続けられるまち（11）・エネルギー（7）

－ **休 憩** － 14:52–[08]

● セッション2「SDGs ゴール１　重大な人権侵害である貧困をなくす！」 7/17 15:00–17:15

1. 貧困とは ー世界に住む10人に1人が「貧困ライン」ー 15:00–[27]

◇ ジャンケンをして、勝った人と負けた人がグループを移動してグループ替えをした。

◇ 「最近うれしかったこと」をお題に一言自己紹介をした。

◇ 「世界で最も貧しい生活とは」をお題に、思いつくことをグループで書き出した。

◇ ポップコーン方式で全体共有した。

◇ ファシリテーターが、貧困の様々な定義についてミニレクチャーした。

＜様々な貧困の定義＞

①絶対的貧困

・世界銀行が定める「国際貧困ライン」。1日1.9ドル（200 円=どのような物価の国であっても、衣食住最低限の暮らしをしていくために必要な額）以下の生活

・世界で10人に1人がこの状況にあり、南アジアやサハラ以南アフリカという地域、特に女性と子ども、社会的に脆弱な人に多い

・10年くらい前までは、1.25ドル以下という基準だった

②相対的貧困

・その地域の平均的な収入の半分以下の収入しかない状況

・目には見えづらい貧困で、日本でも７人に１人がこの状況にある

③多次元貧困

・国連が複数の指標（例えば「保険・教育・所得」）を使って、それぞれの指標が世界レベルでどの程度得られているか調べているもの（人間開発指数）

◇ ファシリテーターが資料4（「年収 450 ドル以下の暮らし」）を読み上げて、「絶対的貧困」に置かれた状況を想像した。

【「世界で最も貧しい生活とは」の成果例 】

・家族がいない ・学べない ・水がない ・未来に希望がもてない ・家がない ・信じるものがない

・選択肢がない ・楽しくない ・病院に行けない ・食べ物がない ・自分は貧しい人間だとおもっている

・仕事がない ・相手のことを思いやれない ・自分の意見を聞いてもらえない ・子どもが働く ・子どもが兵士

2. 貧困の原因や背景 15:27–[27]

◇ グループに配られた５枚の写真から１枚ずつ担当し、まずは写真に写っている人物がどうして貧困になったのか想像した。その後、裏面に書かれた解説を読み解いた。

◇ グループで、それぞれが担当した写真について、想像した貧困の理由と解説を紹介し合った。

◇ 次に、参加型手法「対比表」を用いて、途上国と日本の貧困の原因を話し合いながら書き出した。

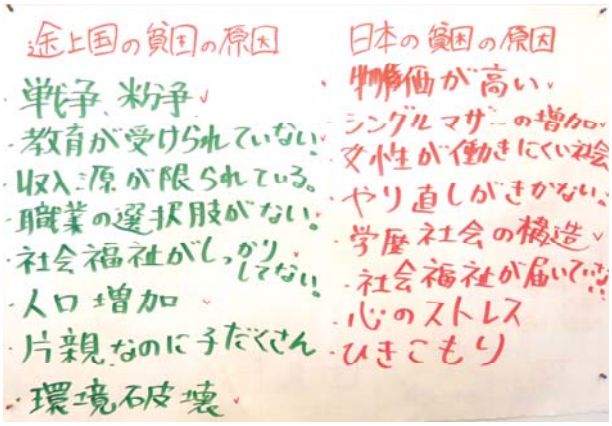
◇ 途上国／日本の貧困の原因をグループ毎に2つずつ発表し、全体で共有した。

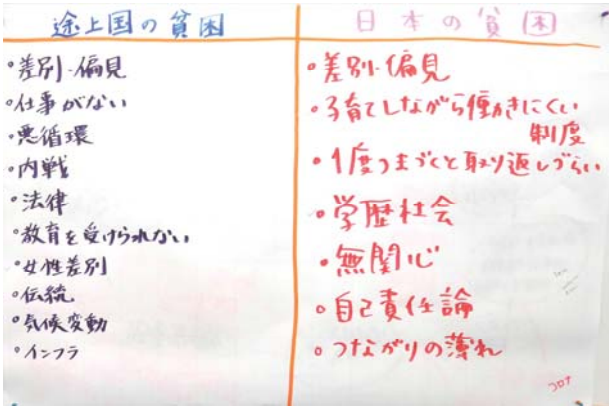
◇ ファシリテーターコメント…貧困を学ぶ目的は、貧困解決のために何ができるのかを考え、実行すること。課題解決の方法を考えるためには、その課題の原因を理解していることが大切。

【「途上国／日本の貧困の原因」の成果例 】

途上国の貧困の原因
・男女差別 ・内戦 ・仕事の選択肢が少ない ・社会福祉が充実していない ・教育不足 ・気候変動 ・早婚
・法律 ・治安が悪い ・人口増加 ・アンフェアな貿易 ・低収入 ・マイノリティーの排除 ・障がい者差別

日本の貧困の原因
・収入格差 ・学歴社会 ・物価高 ・女性が働きにくい社会 ・自己責任論 ・つまずくと取り返せない ・教育格差
・シングルマザー ・資源がない ・学費が高い ・税金高い ・賃金があがらない ・非正規労働者の増加





3.「構造的貧困」と「力の剥奪としての貧困」 15:57–[10]

◇ 資料6（「おいしいコーヒーの真実」「モノが作られ届けられるプロセスと消費者」）を各自で読んだ。

◇ グループが１つの「経済至上主義／自社中心主義／自国中心主義の会社」だとしたら、「自社が最も儲けるためには、どのような貿易や手立てを講じるか」（=20 世紀型の開発）、話し合った。

【「経済至上主義の自社が最も儲けるためには、どのような貿易や手立てを講じるか」例 】

・子どもに働かせる ・休ませずに働かせる ・取引相手を脅す ・専属契約を結んで労働者を囲う
・価格競争をさせる ・安く買いたたいて高く売る ・付加価値をうたい商品価格を引き上げる

4. 貧困（力の剥奪）と豊かさ（力を得ていくこと）をフリードマン・モデルで可視化 16:07–[40]

◇ 資料7-１（「フリードマンとセンの豊かさと貧困と開発の定義」）を各自で読んだ。

◇ 資料8（フリードマンモデル可視化①～④）を、１ 枚ずつ担当して読み解き、それぞれ担当した資料の人物の「豊かさ」について、資料7-2（フリードマンによる「豊かさ」の8つの指標レーダーチャート）にプロットした。

◇ 同様に、自分自身の「豊かさ」についても考えて、資料7-2のレーダーチャートに書き加えた。

◇ グループで担当した資料の人物と、その人の「豊かさ」について紹介しあった。

◇ やってみて分かったこと・気づいたことをグループで話し合い、３ つの文章にまとめた。

◇ ファシリテーターコメント…貧困の構造を変えていくためには、私たち自身の「豊かさ」の概念をシフトしていく必要がある。最悪の帰結が死である貧困は、重大な人権侵害であり、この状況を見過ごしていくことは、自分の死にもつながることだと理解することが必要。

【「レーダーチャートをつけてみて分かったこと、気づいたこと」例 】

・ネットワークが乏しいという共通点があった　・あきらめがあり、自分で意思決定していない
・奪われているものが3つぐらいあるとレーダーチャートの面積がゼロに近くなる
・ゆとりがなく何かに追われているという共通点があった
・所得や賃金がほかの指標に与える影響は大きい

5. 貧困から抜け出す道、悪循環を断ち切るために必要なもの役立つこと 16:47–[30]

◇ グループ替えをし、「幸せを感じるとき」をお題に一言自己紹介をした。

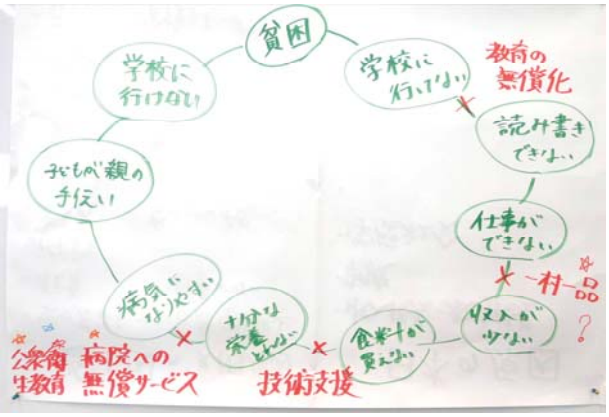
◇ 資料9（JICA 教材　貧困の悪循環カード）を使い、貧困の連鎖について考え、模造紙に貧困の悪循環の輪を書き出した。

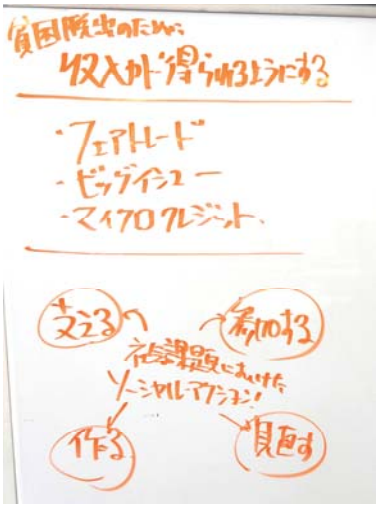
◇ 貧困の悪循環を断ち切るために必要なこと・役立つことを書き出した。

◇ 模造紙を回して成果物を共有した。

◇ ファシリテーターが、「貧困解決のためにわたしにできること」を考えるための情報として、資料10（貧困解決のための多様な手立て①～③）を基に、既存の支援についてと、「4つのソーシャルアクション」について情報提供した。

【「貧困の悪循環」と「断ち切るために必要なこと・役立つこと」の成果例 】





6. 1日目のふりかえり 17:17–[04]

◇ 本日の感想、気づいたことをグループ内で伝え合った。

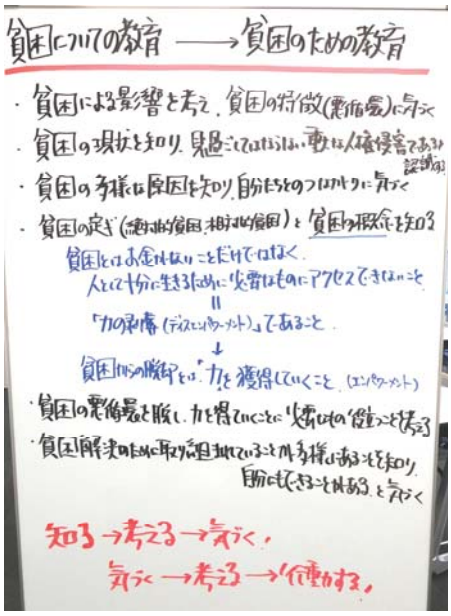
7. 事務連絡 17:21–[04]

◇ JICA 江口職員から、教員を対象とした講座などについてお知らせした。

★ 17:25 **1日目終了**

● セッション３「SDGs13 生命の危機である気候変動に具体的な対策を！」 7/18 10:00–12:01

1. オープニング 10:00–[23]



◇ ファシリテーターが、1日目の内容をふりかえりつつ、「貧困についての教育→貧困のための教育」についてレクチャーした。

◇ 動画「その子」を視聴した。

◇ グループ内でジャンケンに勝った人がお題を自由に決めて、一言自己紹介をした。

◇ ファシリテーターコメント…子ども向けに作られた教材やプログラムも多くある。低学年なら「知る・考える・気づく」に、高学年であれば「気づく・考える・行動する」にと、学齢期によってフォーカスする部分を変えていくことで、子どもであっても貧困というテーマも扱える。

2. 気候変動クイズと用語解説 10: 23–[17]

◇ グループで協力して、資料11（「気候変動クイズ」）のクイズを解いた。

◇ 各自で資料12（「気候変動クイズの答え・解説」「気候変動に関するコラム」）を読んだ。

◇ ファシリテーターが、気候変動に関わるキーワードを解説した。

◇ ファシリテーターコメント…ファシリテーターは、テーマについての専門家ではないし、参加者よりも多くの情報をもっている必要はない。それでも、ワークショップを作り、提供する上で、すべてを説明したり提供したりするわけではないが、テーマについて大まかな基本情報はもっておいた方がいい。

3. 気候変動の影響と私たちとのつながり 10: 40–[45]

◇ グループで役割を分担し、各自で資料13（「気候変動の影響を受けている人　エピソードシート」①～⑤）を読み解いた。

◇ 担当した役割になりきって、どのように暮らしているのか、直面している困難と不安なこと、未来に対する想いや願いについて、伝え合った。

◇ 参加型手法「派生図」を用いて、気候変動の影響を派生的に書き出した。また、立場（子ども、高齢者、障害のある人など）やテーマ（福祉、教育、など）を変えて考えて、付け足した。

◇ 各自で、自分自身にも影響があるとおもうものに★印をつけた。

◇ 回し読みで成果物を共有し、自分自身にも影響があるとおもうものに★印を書き加えた。

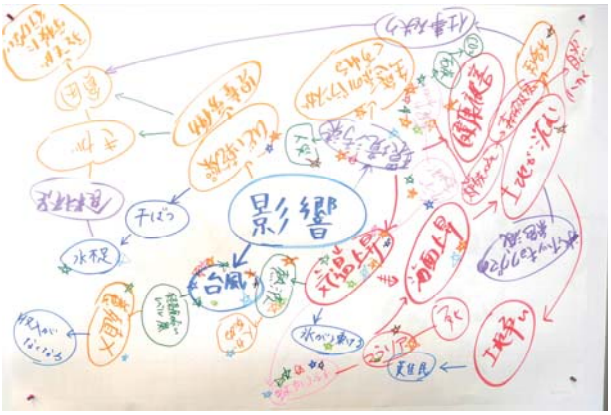
◇ 参加型手法「因果関係図」を用いて、気候変動の原因を掘り下げて考えた。

◇ 各自で、自分自身も関わっているとおもう原因に★印をつけた。

◇ ギャラリー方式で他のグループの成果物を見て回り、自分自身も関わっているとおもう原因に★印を書き加えた。

◇ ファシリテーターコメント…課題解決のためのシステム思考（現状把握、影響予測、原因究明、課題解決）を参加型ワークショップではよく取り入れている。現状把握、影響予測、原因究明はどのような順番で提供してもよいが、それらを踏まえて課題解決の方法を考えることが思考の流れとしては自然。

【「気候変動の影響」成果例 】



【「気候変動の原因」成果例 】

4. 気候変動に対して私たちができること 11:25–[27]

◇ 各自で、資料14（「気候変動の影響も？世界の主な異常気象」「気候変動はだれが起こしたの？」）を読んだ。

◇ グループで記録者を決めて、「気候変動を脱するために必要なもの・役立つもの」をたくさん書き出した。

◇ 一番多く書き出したグループが発表し、他のグループが重複を避けて追加して発表した。

◇ 各自で、資料15（気候変動をめぐる問題解決のために大切なことランキングシート）に書かれた行動を、次の4つの視点からランキングした。

①大切だ！トップ3 ②実行してみたいこと！トップ3 ③効果的！トップ3 ④すぐにできること！トップ3

◇ グループで、それぞれが選んだトップ1を紹介し合った。

◇ ファシリテーターコメント…解決方法を考える際に、「●●する」という肯定的な文章で書き出すことで、具体的にイメージでき、行動に繋がりやすくなる。

【「気候変動を脱するために必要なもの・役立つもの」成果例 】

・危機を知らせる ・電気を点けっぱなしにしない ・車に乗らない ・技術を共有する ・使い捨てを減らす
・再生可能エネルギーを増やす ・輸入品の購入を減らす ・ホッキョクグマの気持ちになる ・車をシェアする
・夜遅くまで働かない ・リサイクル ・マイバッグ、マイ箸、マイボトル ・雨水を溜める ・サマータイムを導入
・地産地消を心がける ・植林をする ・ちょっと我慢する

5. 合わせて考えよう！「SDGs5つくる責任・つかう責任」を果たすには～午前中のふりかえり 11:52–[11]

◇ ファシリテーターが、資料16（「2012年リオ+20国際会議におけるムヒカ大統領のスピーチ」）を読み上げた。

◇ 午前中をふりかえり、グループ内で一言ずつ感想を共有した。数人が全体で発表した。

－ **休 憩** － 12:03–[47]

● セッション4 「SDGs16 平和と公正をすべての人に！」 7/18 12:50–15:12

1. 平和とは？ 12:50–[42]

◇ ファシリテーターが、番号をふってグループを変えた。

◇ ファシリテーターの問いかけに対して、自分の意見に1番近い回答（はい、どちらかと言えばはい、どちらかと言えばいいえ、いいえ）の場所に移動した。数人が理由を発表し、人の意見を聞いて意見が変わった人は移動した。

<ファシリテーターの問いかけ>

①世界は平和だと思う。②日本は平和だと思う。

③10年後の世界は今よりも平和になっていると思う。

◇ 個人で、「平和だとおもう状況」を5つ、付せん紙に書き出した。

◇ ファシリテーターが、「3つの平和」と「3つの暴力」についてレクチャーし、資料17（ヨハン・ガルトゥング「3つの平和の概念」と「3つの暴力」）を読んだ。

◇ 参加型手法「カード式整理法（KJ 法）」を用いて、書き出した付せん紙を①消極的平和、②積極的平和、③文化的平和に分類整理した。

◇ ここまでの作業を通してグループとして「わかったこと、言えること」3つを文章化した。

【 「平和だとおもう状況」の消極的平和／積極的平和／文化的平和の分類例 】

消極的平和

・命の心配をしなくていい ・武器を持たない ・健康だ ・きれいな住むところがある ・毎日十分な食事が摂れる
・安心して寝ることができる ・衣食住が満たされている

積極的平和

・誰もが学びたいときに学べる ・資源や富の偏りがない ・生物の多様性が守られている ・自由がある
・シェアし合える ・言論の自由が保障されている ・選択できる ・差別がない ・災害がない ・旅行ができる
・夢や希望がもてる

文化的平和

・安心できる人、場所がある ・時間と空間に十分なゆとりがもてる ・助け合いができる ・人とのつながりがある
・のんびり散歩ができる ・楽しいときに笑い、悲しいときに泣くことができる ・愛を感じる ・一人じゃない
・四季を感じる

【 「この作業を通して分かったこと、言えること」例 】

・「平和」は漠然としている ・「平和」にも度合いがある
・積極的平和の具体的なものが出なかった。平和だから。
・命に直接関わることだけではなく、自由や余裕がないと平和でない。
・積極的平和がたくさん出た。最低限の生活が保障されることが平和につながる。

3. 戦争の原因と紛争解決 13:32–[69]

3–1. 平和を阻んでいるものはなにか？ 13:32–[38]

◇ 資料18（世界の紛争①～⑥）を分担して各自で読み解いた後、グループで資料の内容を伝え合った。
◇ 資料19（世界の様々な紛争とその要因）を各自で読んだ。
◇ 記録者を決め、「平和を阻んでいるもの」をグループで協力してリストアップした。
◇ 回し読みで成果物を共有し、自分たちのグループでは出なかった意見で共感したものに★印をつけた。

【「平和を阻んでいるもの」成果例 】

・過去 ・他国の介入 ・印象操作 ・責任の押し付け合い ・技術の発展 ・平和ボケ ・多数派少数派 ・経済格差
・ウイルス ・政治の不安定、独裁 ・貧困の再生産 ・情報不足 ・貿易の不均衡 ・想像力の欠如 ・武器商売
・無知 ・人の移動 ・精神的な余裕 ・思いやりの不足 ・違いを受け入れられない ・他人事という意識 ・多忙
・対立解決スキルの欠如 ・言語の壁 ・「戦争やめようぜ」と言う人がいない ・正当化する洗脳教育
・情報リテラシーが低い ・競争社会 ・宗教間の対立 ・国境、領土問題 ・国連 ・植民地

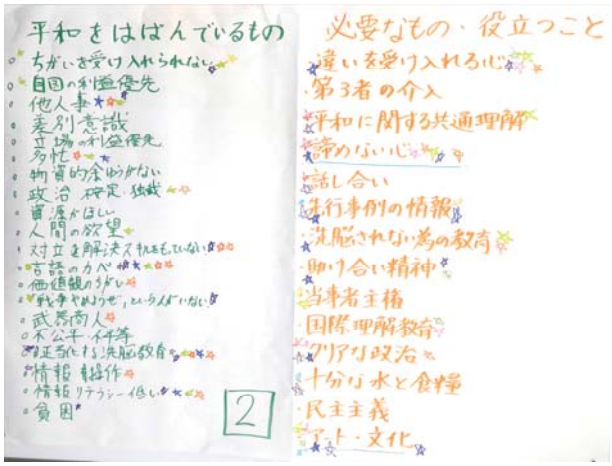
3–2. 紛争解決・平和構築に役立つことは何だろう？ 14:10–[31]

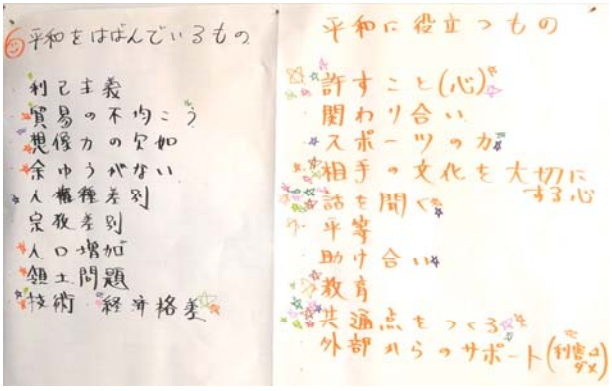
◇ グループ替えを行い、「白いご飯に１番合うとおもうもの」をお題に一言自己紹介をした。
◇ 資料20（平和のための取り組み①～④）分担して各自で読み解いた後、グループで資料の内容を伝え合った。
◇ 記録者を決め、「平和構築に役立つこと」をグループで協力してリストアップした。
◇ 回し読みで成果物を共有し、自分たちのグループでは出なかった意見で共感したものに各自で★印をつけた。

【「平和構築に役立つこと」成果例 】

・違いを受け入れる心 ・平和に関する共通理解 ・諦めない心 ・先行事例の情報 ・洗脳されないための教育
・当事者主権 ・国際理解教育 ・クリアな政治 ・十分な水と食糧 ・アートや文化 ・妥協 ・自分のよさを知る
・小さな声に耳を傾ける教育や政治 ・現状を知る ・教育者の育成 ・過去を引きずらない ・トライ&エラー ・教育
・過ちを受け入れる ・相手の文化を大切にする心 ・話を聞く ・共通点をつくる ・ゆとりをもつ ・安定した衣食住
・自分事としてとらえる ・指導者の強い信念 ・みんな違ってみんないい ・違う意見を発言できる ・言語の尊重
・情報の正しさを見極める力 ・民族多様性の尊重 ・違いをリソースに ・共同作業 ・許すこと ・第三者の介入
・内発的発展、開発、自立 ・多様な視点が取り入れられた憲法 ・優劣をつけない ・異文化理解
・利益を求めすぎない ・自国の文化に誇りをもつ ・外部からの介入を受け入れる柔軟性

【「平和を阻んでいるもの」「平和構築に役立つこと」成果例 】





4. 平和のための教育ー平和を創るスキルを身につけようー 14:41−[21]

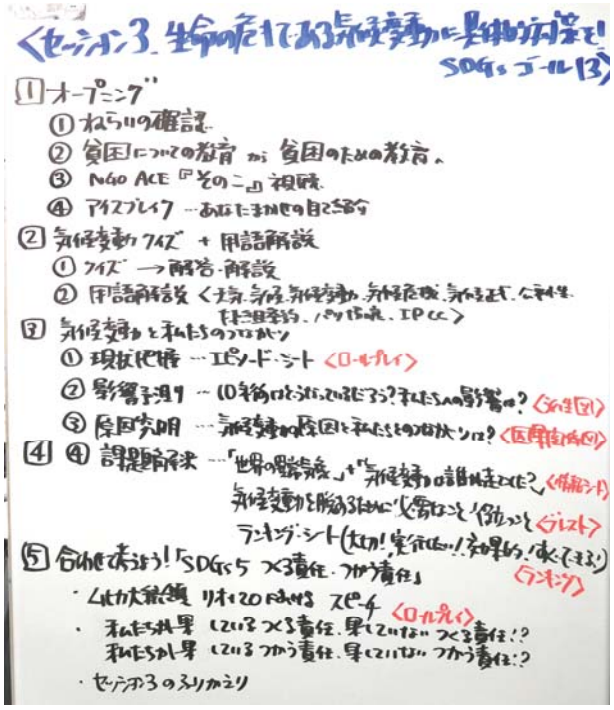
◇ ファシリテーターが、資料21（対立から対話へ）を基に対立解決に関わるスキルトレーニングについてレクチャーした。
◇ 動画「鬼退治したくない桃太郎」を視聴した。

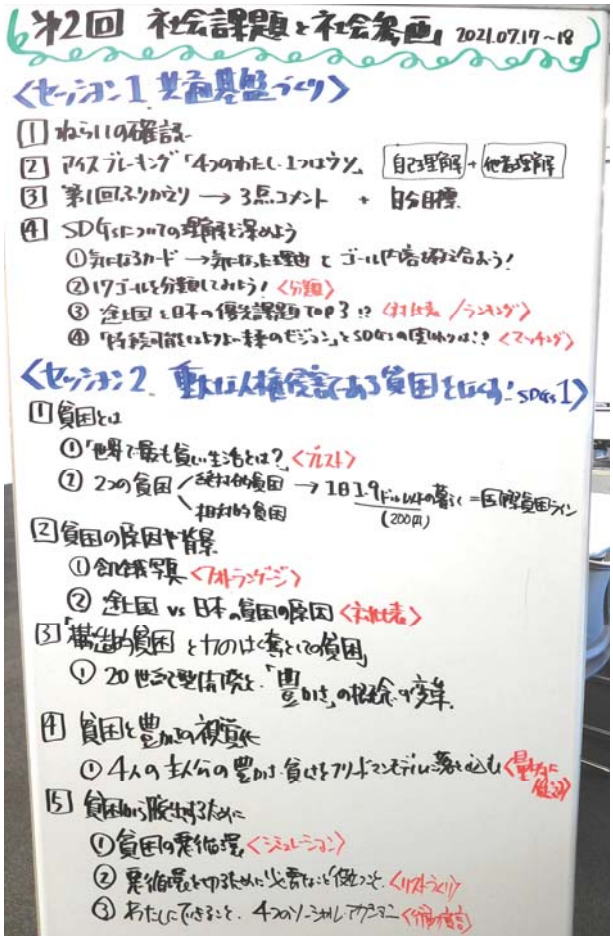
5. 全体ふりかえり／社会課題と社会参画と国際理解教育 15:02−[09]

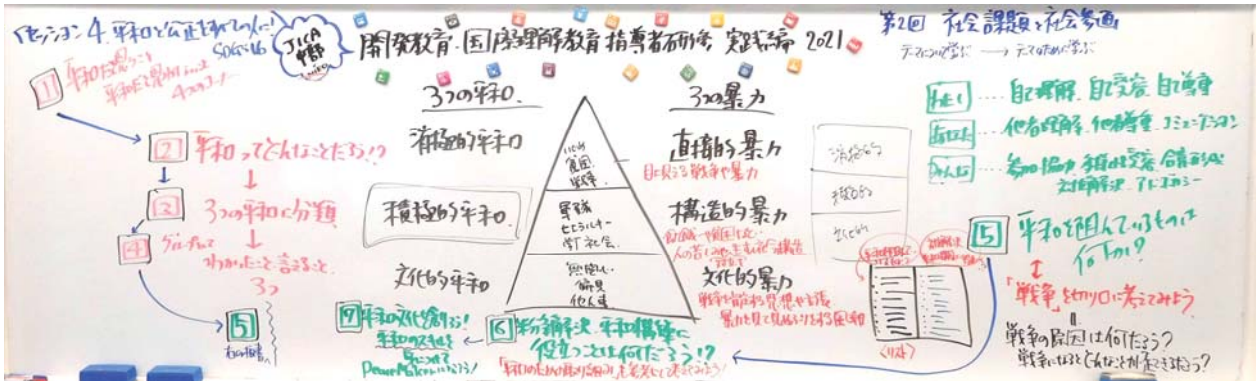
◇ 2日間をふりかえり、分かったこと、大切だとおもったこと、実行しようとおもったことをグループで紹介し合った。
◇ ファシリテーターコメント…人々の行動変容を支える3要素は、「知識（情報）」「気づき」「スキルトレーニング」。“知っている、分かっている、だから行動する” そのような人を育むのが国際理解教育。私たちは人を変えることはできないけど、人が変わることの手助けはできる。

6. 事務連絡 15:11−[09]

◇ 事務局が、次回第3回の2日目は17:00終了であることを確認した。
◇ 参加者から SDGs の取り組みの１つとして昆虫食に関する取り組みを紹介があった。







★ 15:20 **2日目終了**

ー 研修で使用した教材の出典等一覧 ー

・セッション1-4.「SDGs カード」…公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン ウェブページ
https://www.savechildren.or.jp/lp/sdgs/
・セッション2-1.「1日1.25ドル、年収450ドル以下＝絶対的貧困という暮らし」…パメラ・バッサマン、アンドレア・ドイル共著／ERIC訳『地球のみかたー地球について学ぶカリキュラム』、世界銀行 PovcalNet（原典）、イエズス会社会司牧センターウェブページ http://www.jesuitsocialcenter-tokyo.com/?page_id=5552
・セッション2-2.「飢餓写真と解説」…WORLD VISON AUSTRALIA『 PROFILES OF HUNGER 』（1995）
・セッション2-3.「モノが作られ届けられるプロセスと消費者」…特定非営利活動法人ACE『ワークショップ教材「チョコっと世界をのぞいてみよう！」』（2014）
・セッション2-3.「おいしいコーヒー真実」…映画『おいしいコーヒーの真実』ウェブページ
https://www.uplink.co.jp/oishiicoffee/about_04.php
・セッション2-3.「フリードマンとセンの豊かさと貧困と開発の定義」「フリードマンによる『豊かさ』の8つの指標レーダーチャート」…特定非営利活動法人開発教育協会（DEAR）『貧困と開発ー豊かさへのエンパワーメント』（2005）
・セッション2-4.「フリードマン・モデルの可視化」…認定 NPO 法人開発教育協会（DEAR）『開発教育教材 豊かさと開発』（2016）
・セッション2-5.「貧困の悪循環カード」…JICA 教材「国際理解教育実践資料集」
・セッション2-5.「貧困解決のための多様な手立て①フェアトレード」…名古屋市ウェブページ
https://www.city.nagoya.jp/kankyo/page/0000067374.html
・セッション2-5.「貧困解決のための多様な手立て②ビッグイシュー」…ビッグイシュー日本版ウェブページ
https://www.bigissue.jp/
・セッション2-5.「貧困解決のための多様な手立て③マイクロクレジット」…ムハマド・ユヌス他『ムハマド・ユヌス自伝―貧困なき世界をめざす銀行家』（1998）
・セッション3-1. 動画「その子」…特定非営利活動法人ACE ウェブページ
https://acejapan.org/childlabour/movie
・セッション3-2.「気候変動クイズ／答え・解説」、「気候変動に関するコラム」
セッション3-3.「気候変動の影響を受けている人エピソードシート」、「気候変動の影響も？世界の主な異常気象」、「気候変動はだれが起こしたの？」
セッション3-4.「気候変動をめぐる問題解決のために大切なこと ランキングシート」
…認定 NPO 法人 開発教育協会（DEAR）『気候変動ー開発教育アクティビティ集3』（2020）
・セッション3-5.「2012年リオ+20国際会議におけるムヒカ大統領のスピーチ」…打村明訳
（http://hana.bi/2012/07/mujica-speech-nihongo/）
・セッション4-2.「ヨハン・ガルトゥングによる『3つの平和の概念』と『3つの暴力』」…ヨハン・ガルトゥング『ガルトゥング平和学入門』（2003）
・セッション4-3.「世界の紛争」、「平和のための取り組み」…（公財）愛知県国際交流協会『世界の国を知る・世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来 活用マニュアル Ver2』
・セッション4-4.「対立から対話へ」、動画「鬼退治したくない桃太郎」…平和教育アニメーションプロジェクト『みんなが Happy になる方法ー関係をよくする3つの理論』（2012）

Ⅳ　開発教育指導者研修（実践編）第3回

■ 開催概要

◆ 日 時：2021 年 8 月 28 日（土）13:00～17:09、29 日（日） 10:00～17:28
◆ 場 所：JICA 中部なごや地球ひろば 2 階 セミナールームA
◆ 参加者数：
　［1 日目］一般受講者 26 名（6 名は ZOOM）、NIED スタッフ 5 名、JICA スタッフ 3 名 合計 34 名
　［2 日目］一般受講者 28 名（7 名は ZOOM）、NIED スタッフ 5 名、JICA スタッフ 3 名 合計 36 名
◆ ファシリテーター：（特活）NIED・国際理解教育センター 伊沢令子

■ 第３回のねらい

① ねらいの達成に向け、学習者の意識の流れに沿った参加型プログラムの作り方を学ぶ。
② 実際にテーマを設定し各自プログラムを作ることを通して、アクティビティとプログラムの関係を整理する。
③ 開発教育の実践や様々な場で参加型を活用するためのイメージを持ち、次回までに必要な準備を確認する。

■ プログラムの内容

● **セッションⅠ 「共通基盤づくり」** 8/28 13:00–15:00

1. 主催者挨拶／第3回のねらいの確認 13:00–[10]

◇ JICA 中部 江口職員が、感染症対策について案内し、開会を宣言した。
◇ ファシリテーターが、本研修全体の流れとねらい、第3回のねらいについて、レジュメを基に説明した。

2. アイスブレーキング 人生の樹 13:10–[26]

◇ 個人でA4用紙に、自分の人生をふりかえりながら生まれてから今日までの自分の人生を「樹」に例えて描いた。
◇ 次に個人で、描いてみてわかったことや気づいたことを3つの文章にして書き出した。
◇ グループで、他の受講者に伝えられる範囲内でわかったことを発表し、共有した。

3. 第2回のふりかえりと第3回の自分目標 13:36–[37]

◇ 個人で、印象に残ったところ3つに下線を引きながら第2回の記録を読んだ。
◇ 下線を引いたところとその理由を、グループで紹介し合った。
◇ 第Ⅰ回で作成した「豊かに気持ちよく学び合うための約束」の中から、この2日間の「自分目標」を考え、グループで紹介し合った。
◇ ファシリテーターコメント…参加型の教育は、知ったことを日常に生かせる、行動できる人を育みたいと考えている。そのために、「知識（情報）」、「気づき」、「意識化とスキル（ドゥハウ）」この3つのプロセスを提供していく。

● セッション2 「参加型にまつわる多様な類型と流れのあるプログラム体験」 14:13–17:00

1. 3つの類型のアクティビティ、2つのアプローチ法、3種類のファシリテーター 14:13–[27]

◇ ファシリテーターが、資料 4（ファシリテーションとファシリテーター）を基に、ファシリテーションとファシリテーターの役割についてミニレクチャーした。

〈「ファシリテーターの4つの役割」〉

①場づくり…安心感と楽しさの中で互いに学び合えるような場と流れをデザインする。
②関係づくり…自己理解、他者理解、相互理解が進み自由に語り合えるよう、参加と対話を促進する。
③構造化…ねらい達成のために、意見の発散と収束を重ね、整理し、プロセスと論点を視覚化する。
④合意形成…二項対立を超えた新しい合意や創造に向けて、肯定的な熟議と分かち合いを支援する。

◇ グループで分担して資料4の「ファシリテーターが理解しておくと役立つこと3つ」を音読した。

◇ ファシリテーターが、「教育系プログラム3つの類型（気づき・築き・スキルトレーニング）と2つのアプローチ」についてミニレクチャーした。

〈「ギャップアプローチ」と「ポジティブアプローチ」〉

・「ギャップアプローチ」…理想と現実の間を課題として、その解決を図る「課題解決型」
課題解決の4ステップ（システム思考）＝現状把握 → 影響予測 → 原因探求 → 手立て検討

・「ポジティブアプローチ」…ビジョン実現に向け、自分や組織の強みに光を当て活かす「ビジョン達成型」
人には“強み”と“弱み”があり、自分でも得意なところと苦手なところがわかっている。自分のできていないところに目を向け克服を試みるのではなく、組織やメンバーの価値や強みに焦点を当ててそれを高め、それらの組み合わせで目標達成に向けたパフォーマンスを高める。

◇ 個人で、資料3（第1回研修、第2回研修で取り組んだアクティビティ）を読み、グループで感想を伝え合った。

◇ ファシリテーターコメント…既存の大型のアクティビティを知らなくても、アクティビティの成り立ち（3 つの要素「ねらい」「内容」「手法」）を理解しておくことで、アクティビティは自分で作ることができ、参加型プログラムが容易に、フレキシブルに作り出すことができる。

－**休 憩**－ 14:40–[10]

2.「対立・対立解決」をテーマとした流れのあるプログラム体験 14:50–[130]

2–1. 流れのあるプログラム体験① 14:50–[78]

◇ グループ替えをし、「この2日間の自分目標」をお題に一言自己紹介をした。

◇ ファシリテーターが、対立の定義と対立を学ぶ前提を説明した。

◇ グループで、対立のメリット・デメリットを対比表に書き出した。

◇ 模造紙を回して共有し、自分のグループでは出ていなかったアイデアで共感するものに★印をつけた。

◇ グループで、「対立が激化する状況」の小芝居（ロールプレイ）を考え、全体で披露した。

◇ グループで、自分たちで考えた小芝居の場面で、対立の緩和に役立つことは何か話し合い、全体で発表した。

◇ ファシリテーターが、資料5（対立は悪くない！対立から学び対立を越えよう）を基に、対立の扱い方や対立解決についてミニレクチャーした。

【「対立のメリット／デメリット」の成果例】

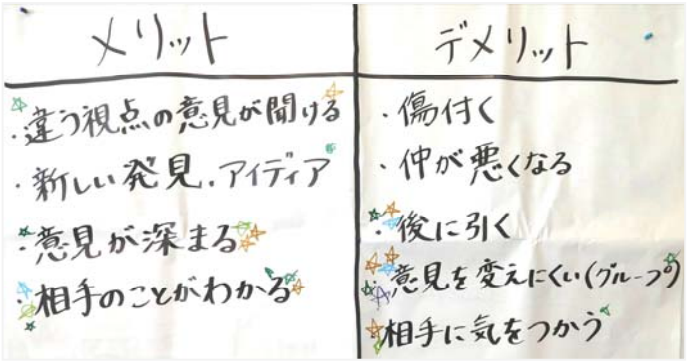
メリット

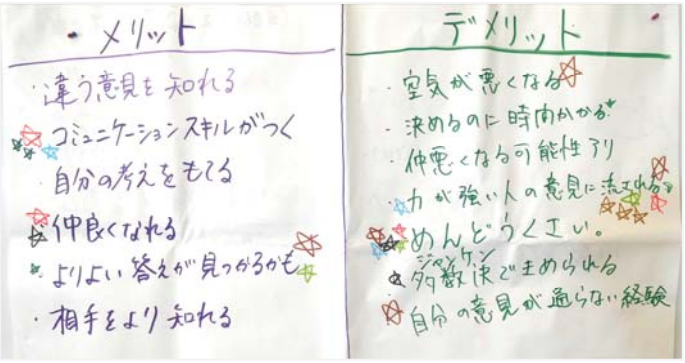
・コミュニケーションスキルが身につく ・仲良くなれる ・よりよい答えが見つかるかも ・新しいものが生まれる
・客観的に捉えられる ・自分の意見を言う環境がある ・乗り越えられたら深い絆 ・自分の思い込みに気づける
・多様性につながる ・違う視点の意見が聞ける ・意見が深まる ・相手のことがわかる ・問題点が明らかになる

デメリット

・力が強い人の意見に流される ・面倒くさい ・妥協してしまう ・意見がまとまりにくい ・否定されるといやな気持
・時間がかかる ・疲れる ・人間関係が崩れる ・スキルが必要 ・意見を変えにくい ・相手に気を遣う
・イライラする ・気まずくなる ・関心を失うこともある ・多数（強者）に偏りがち ・さらに対立が生まれる

【「対立のメリット／デメリット」の成果例】





【「対立を激化させる要素」「対立の緩和に役立つこと」の成果例】

対立を激化させる要素

・否定 ・持論の繰り返し ・人を巻き込み、味方にする ・投げやり ・キツイ語尾 ・黙る ・押し切る ・他人事
・決めつけ ・人任せ ・フェアでない交渉 ・どっちの味方か迫る ・相手の言い分を聞かない ・オマエ呼ばわり
・無視 ・舌打ち ・人のせいにする ・役割分担を押し付ける ・過去のことをもち出す ・いつも●●だ、と一般化する
・人の「非」をもち出す ・自分の考えが当たり前とおもっている ・不安をあおる ・理論武装 ・おどし

対立の緩和に役立つこと

・相手の意見の背景や理由を確認する ・時間を置く ・相手の気持ちをまず受け止める ・相手への信頼
・話題を変えない、広げない ・多様な提案 ・選択肢を提示 ・仲介者 ・前のことを持ち出さない ・決めつけない
・相手を否定から入らない ・新しいルール、第3案の提案 ・譲り合い、歩み寄り ・相手の気持ちに寄り添う
・需要と承認から ・別案、妥協案 ・冷静になる ・（子どもにとってどうか?など）共通のベースをもつ
・今ある案以外はないか一緒に考える ・適当な態度でなく真剣に向き合う ・相手の気持ちへの同調、受け入れ
・もめたときのルールを事前に決めておく ・意見の理由を知ろうとする、聞こうとする、説明する

2－Ⅰ. 流れのあるプログラム体験② 16:08–[52]

◇「対立緩和に役立つスキル」についてのアクティビティ２つを体験した。

1）「わたしメッセージ」

・ファシリテーターが、資料5を基に「わたしメッセージ」について説明した後、デモンストレーションした。

・個人で資料6（身につけよう!☆「わたしメッセージ」）の「あなたメッセージ」を、「わたしメッセージ」に言い換えて記入し、グループで発表して共有した。

2）「みんなでバカンス」

・個人で、「１週間旅行に行けるとしたら、どこに行きたいか」を A4用紙に書き出し、グループで共有した。

・グループで、隣に座っている受講者の行きたい場所について否定してみて、対立が続いていく状況を体験した。

・個人で、自分の行きたい場所について、行きたい理由（本心）を掘り下げて考え、因果関係図に書き出した。

・行きたい場所の理由（本心）を伝え合った後、グループでの行き先を話し合った。

・行き先が決まったグループは、行き先とどのような話し合いがされたかを発表し、共有した。

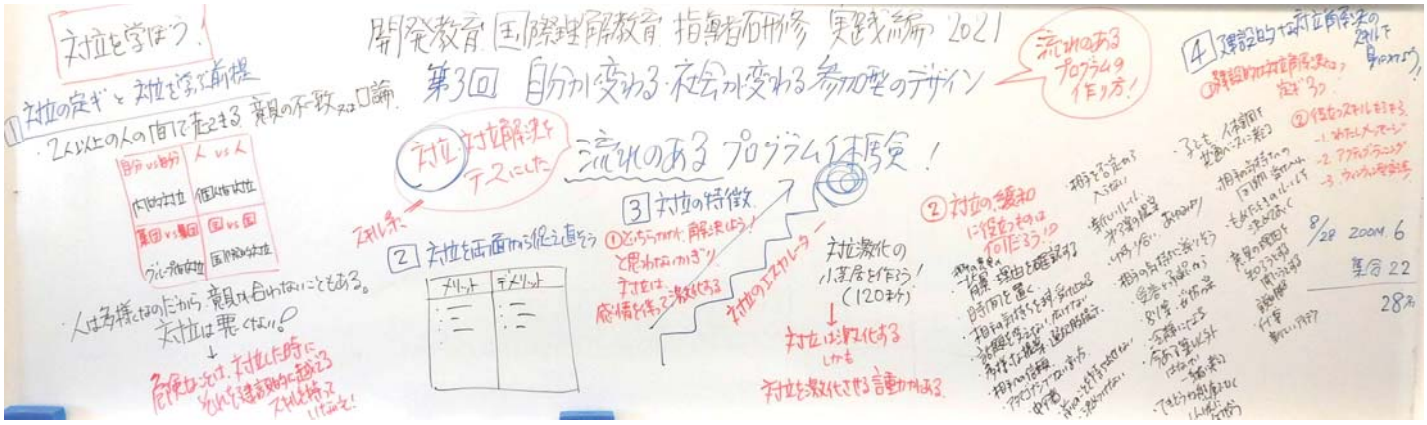
・ファシリテーターが、対立解決の交渉についてミニレクチャーした。

3. 1日目のふりかえり 17:00–[05]

◇ 本日の感想、気づいたことをグループ内で伝え合った。

4. 事務連絡 17:05–[04]

◇ 事務局から２日目の研修は17時までになることなど伝えた。



★ 17:09 **1日目終了**

● セッション３「参加型手法を使って参加者を主人公に！「場」をアクティブに！」 8/29 10:00–12:01

1. オープニング＋アイスブレーキング 10:00–[40]

◇ ファシリテーターが、本日の研修のねらいを確認した。

◇ 全体で「清正ジャンケン」を行った。

◇ グループで、右隣に座っている人のことを「たぶんあなたはこんな人」と想像して、4つのお題について他己紹介をした。

①小さい頃ハマっていた遊び ②青春時代にもえていたこと ③好きな色 ④未来の野望

◇ 次に、同じ4つのお題で、「実はわたしはこんな人」と自己紹介をし合った。

2. 参加型手法を使う目的と手法の種類、手法の習熟 10:40–[60]

◇ ファシリテーターが、板書を基に1日目の研修の内容をふりかえり、説明した。

◇ ファシリテーターが、資料8（参加型学習・研修のファシリテートのポイントと手法）を基に参加型手法についてミニレクチャーした。

◇ グループで、参加型手法「力の分析」を用いて、「現状参加型ではない場で、参加型を導入すること」をお題に話し合い、手法を体験した。

◇ 模造紙を回して、成果物を共有した。

◇ 資料8に掲載された参加型手法を各自2つずつ担当し、その手法を用いて考えるテーマを手法１つにつき2つずつ考えた。

◇ 担当した手法について考えたテーマと、その手法を用いることでどんなことが見えてくるとおもうのかをそれぞれ発表して共有した。

◇ ファシリテーターが、参加型手法を使う理由について説明した。

〈参加型手法を使う理由〉

・より多様な視点からクリエイティブに話し合うことが可能になる。
・多様な視点や考え方がある人どうしが、共通の枠組みで話し合うことができる。
・１つのテーマについてある枠組みに当てはめて分析することで、発見者同士共通理解を得られる。
・話し合いの内容が可視化され、共有しやすくなる。
・個人が考え、さらにグループで共に考えたプロセスが視覚的に残り、参加の満足感や達成感を得られる。
→“参加者が主人公になる”ということも、参加型手法を使うポイントである。

3. プログラムを作る5ステップの実践（個人作業）－ プログラム作りはストーリー作り － 11:40–[80]

◇ ファシリテーターが、資料7（参加型プログラムの作り方5ステップ）を基に参加型プログラムの作り方を説明した。

◇ プログラムの作り方5ステップに沿って、個人でプログラム作りを行った。

1）ステップ0：テーマを決める

2）ステップ1：テーマを理解する

・参加型手法「ブレインストーミング」を用いて、テーマからイメージすること、テーマに含まれること、テーマから広がることを書き出した。

3）ステップ2：自分の「ねがい」を見極める

・参加型手法「対比表」を用いて、参加者に「知ってほしいこと・気づいてほしいこと／考えてほしいこと・どうなってほしいのか（行動）」を書き出した。

4）ステップ3：「ねらい」を定める

・これから作るプログラムの目標、プログラムを通して参加者に提供したいことを明確にし、文章化した。

（例1）①＿＿＿＿＿について知り、＿＿＿＿＿に気づく。
②＿＿＿＿＿＿について考え、大切なことは何か共に確認する。

（例2）①まちの課題を出し合い、問題の原因を探る。
②望む町の姿を共有し、実現のための手立てを考える。

5）ステップ4：ストーリーラインを作る

・ステップ2で作った対比表に書き出されたものに、参加者の意識の流れに沿う（考えやすい）ように、順番に番号を振った。

・資料7p.3「4行詩」の例を参考にしながら、番号に従い、プログラムのねらい達成に向けた、起承転結（１文ずつ）のストーリーを作った。

6）ステップ5：起承転結（4行詩）にアクティビティを当てはめる

・ステップ４で考えたストーリーライン１文に１つずつ、アクティビティを当てはめて、プログラムを考えた。

・プログラム詳細を考え、ワークシートに記入した。

－**休 憩**－ 12:10–[50]

● セッション4 「参加型プログラムのブラッシュアップ」 13:50–16:53

1. グループで代表プログラムをブラッシュアップ 13:50–[80]

◇ ファシリテーターが、1～7までの番号を振って、グループ替えをし、「この2日間の自分目標」をお題に一言自己紹介をした。

◇ グループで、自作プログラムをそれぞれプレゼンした後、グループで協力してブラッシュアップするプログラムを選んだ。

◇ グループで協力して、選んだ1つのプログラムをブラッシュアップして模造紙に書き出した。

【 プログラムのねらいと展開 】

1. みんなが生きやすい社会をつくろう～目の不自由な方々～

ねらい	・目の不自由な方々について知り、どんなことに困っているのか気づく ・目の不自由な方々も生きやすい社会はどんな社会化を考え、自分にできることを考える	展開	1）目の不自由な方々はどんな生活を送っているのかを知る 2）困っていることを考え、知る 3）困っている原因を考える 4）原因を取り除くために、自分たちにできることを考える

2. 私達の未来のために

ねらい	・今、自分たちがおかれている状況を知り、自分たちの行動次第で未来がかわることに気づく ・よりよい未来のために自分たちに何ができるのか考え、行動にうつす	展開	1）2030年にどんな社会になっていたいか考える 2）今の社会は持続可能ではないことを知る 3）自分たちがどうしていくべきか、消費活動に着目して考える 4）自分たちの行動が自分たちの未来をつくることに気付き、具体的な行動目標を考える

3. みんな違ってみんな Happy（平和・共生）

ねらい	・「平和」とは何かを知り、達成を阻む原因を考える ・グローバル化に伴い多文化共生していくために、誰もが安心して暮らしていける社会にするにはどうしたらいいかを考える	展開	1）身近にある平和とそうでない部分に気づく 2）現在の身近なところ、世界にある課題に気づく 3）課題の原因を元に必要となるコトを考える 4）様々な立場の人々が共生する「まち」について考える

4. 買い物は投票することだ

ねらい	・身近な食と世界とのつながりに気付く ・世界の課題を自分事として捉え、行動を変えようとする	進行	1）アイスブレーキング 2）おいしい食べ物の真実<ロールプレイ> 3）消費者にも責任がある！買い物は投票だ！ 4）みんなが気持ちよく生活するために行動計画を立てる 5）学んだことを個人でふり返る

5. のぞいてみよう！ダニエリちゃんの一日

ねらい	・役割を果たしながら、夢をもつ子に肯定的に出会う ・夢をもつことの大切さに気づき、自分ができることを考える	展開	1）水くみをしている子どもたちを知る 2）水を運んでみよう！ 3）動画の主人公の夢を知る 4）行動宣言を考える

6. どうなる地球！？どうする君たち！？

ねらい	・世界にある問題について知り、自分にもかかわりがあることに気づくことができる ・SDGs に関する取り組みについて考え、自分事としてとらえることができる	展開	1）世界にある問題を知る 2）SDGs について理解する 3）よりよい未来のために、自分が大切にしたい SDGs を考える 4）よりよい未来のために、自分ができることを考える

7. わたしの幸せとプラネタリーヘルス

ねらい	・プラネタリーヘルスを知り、自分本位のウェルビーイングから、地球視点のウェルビーイングへ	進行	1）アイスブレーキング 2）自分の幸せのために今したいこと、これからやってみたいこと<ブレスト→派生図> 3）地球環境にとって不健康なことは？ 4）プラネタリーヘルスの紹介 5）プラネタリーヘルスを踏まえて、2）を再度考え直す

2. 10分プレゼン～よかったところ／よりよくするための提案の確認 15:10–[103]

◇ グループごとに、プログラム概要を発表し、一部を実際にデモンストレーションした。

◇ グループごとの発表を受けて、よかったところ3点とよりよくするための提案3点をグループで書き出した。

◇ ほかのグループから受け取った、よかったところと提案を確認した。

〈参加型プログラムの評価の指標〉

・ねらいは達成できるか
・新たな情報や発見、気づきはあるか
・楽しさ、満足感はあるか
・時間配分は適当か
・参加者の意識の流れに沿ったストーリーラインか
・参加者同士が肯定的に出会い、学びあえるか
・参加型手法は適当か（作業規模… 1人？ペア？グループ？全体？）
・もっとやってみたい！もっと知りたい！次につながるか
・参加者が主役になれるか＝効力感、達成感を得られるか
・難しすぎず、簡単すぎず、対象にあった内容か（対象の少し先を行く）
・インプット、考える、アウトプットのバランスはとれているか

● セッション5 「実践報告フォーラムに向けた確認・準備」 16:53–17:28

1. 第3回から第4回＋フォーラムまでの説明 16:53–[10]

◇ 事務局から、この先の研修と実践報告フォーラムの内容と、その準備について資料を基に説明した。

2. フォーラムで提供する体験プログラムの選定と有志チームの結成 17:03–[17]

◇ グループごとに作成したプログラムのうち、フォーラムで提供するといいとおもうプログラムに投票した。

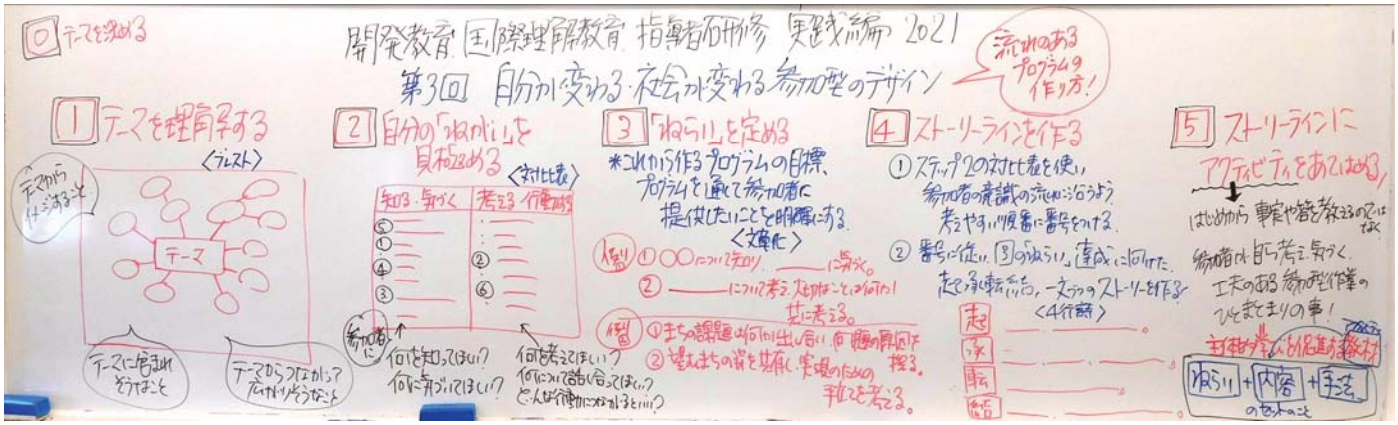
◇ 選出されたプログラムをフォーラムで提供する有志を募った。

3. 第3回ふりかえり 17:20–[05]

◇ 2日間をふりかえり、感想をグループで紹介し合った。

4. 事務連絡 17:25–[03]

◇ JICA 江口職員と秋山職員から、イベント等について案内した。



★ 17:28 **2日目終了**

― 研修で使用した教材の出典等一覧 ―

・セッション3-2.「参加型学習・研修のファシリテートのポイントと手法」…名古屋市『環境学習実践者向け ESD ガイドブック「ESD はじめの一歩」』（2015）※NIED・国際理解教育センター伊沢令子執筆箇所

V 中間会合

■ 開催概要

◆ 日 時：第 1 回 2021 年 11 月 13 日（土）／第 2 回 2022 年 1 月 22 日（土）
　　実践体験ワークショップ検討会 13:00～15:30、実践フォローアップ 15:30～17:00
◆ 場 所：JICA 中部 なごや地球ひろば2階 セミナールームA
◆ 参加者数：実践体験ワークショップ検討会
　　［第 1 回］受講者 17 名、JICA 1 名、NIED 3 名 合計 21 名
　　［第 2 回］受講者 15 名、JICA 1 名、NIED 4 名 合計 20 名
　　実践フォローアップ
　　［第 1 回］受講者 7 名、JICA 1 名、NIED 3 名 合計 11 名
　　［第 2 回］受講者 1 名、JICA 1 名、NIED 4 名 合計 6 名
◆ ファシリテーター：（特活）NIED・国際理解教育センター伊沢令子

■ ねらい

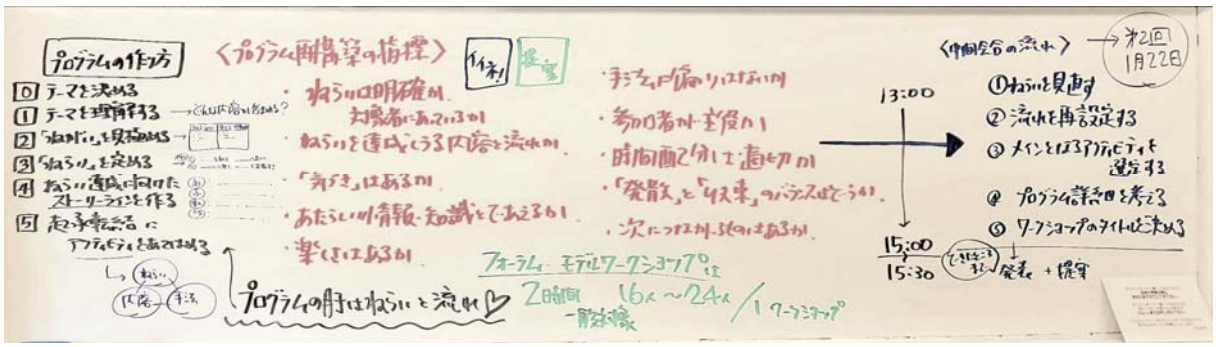
① 実践報告フォーラム 2022 における受講者有志による実践体験ワークショップの実施が円滑に進むようプログラム作成支援、当日の準備支援を行う。
② 受講者の各現場での実践状況を共有し、助言する。

■ プログラムの内容

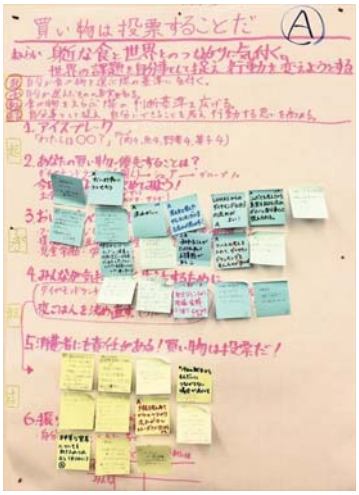
● 「実践体験ワークショップ検討会」

1. 第1回 11/13 13:00–15:30

◇ アイスブレークとして、会場を立ち歩き、最近起きた「Good News&Fun」を紹介しあった。
◇ 板書を基に、プログラムの作り方、プログラム再構築の指標、中間会合のスケジュール、ワークショップの対象者について、ファシリテーターが説明したり、再確認したりした。



◇ 第３回研修で作成したプログラムを確認し、それに対する他グループからの提案を参考にしながら、実践報告フォーラムの実践体験ワークショップで提供するプログラムを各グループで検討し、模造紙に書き出し、全体で発表した。



◇ 他のグループメンバーと NIED スタッフが、実践体験ワークショップで提供するプログラム案に対して、良いと思うところ、より良くするための提案を付せん紙に書き出した。

◇ より良くするための提案を受けて、各グループにおいて時間まで、再度プログラムを見直した。

◇ 第 2 回中間会合までの日程として、以下のことを伝えて、終了した。

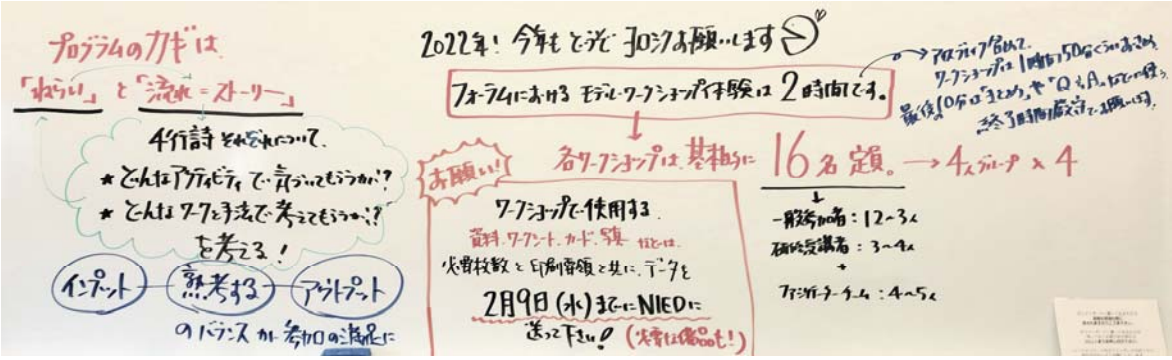
11/13（本日）	第 3 回研修時のプログラムをブラッシュアップし、第 2 案作成←仲間からの評価と提案
12 月末まで	NIED からの追加提案（メール送付）
1/22（第 2 回）	完成版を作り上げ、必要な備品、資料を確定させる。

2. 第2回　1/22 13:00−15:30

◇ アイスブレークとして、会場を立ち歩き、以下のことを自分たちのグループメンバー以外の4人と共有した。

① 今年の漢字 1 文字と理由　② 私の実践･･･こんな実践したよ、やってみてこんなことを感じたよ！

◇ 板書を基に、プログラム作成のカギ、実践報告フォーラムの実践体験ワークショップのポイントについて、ファシリテーターが説明した。



◇ プログラムのカギを意識しながら、実践体験ワークショップのプログラムをさらにブラッシュアップし、全体で発表・共有した。

◇ 2/9（水）までに、所定の様式で、最終プログラム案と使用する教材、備品を記したシートを提出する旨、確認し終了した。

◇ 15:30 後、グループによっては、17:00 までさらに検討を行った。

● **「実践フォローアップ」**　15:30−17:00

◇ 個人の実践について、フォローアップを希望する受講者に対して、NIED スタッフが個別に相談を行った。

Ⅵ 実践報告シート

■ 実践報告シート一覧 （五十音順）

No.	名前	対 象	時間数	タイトル
01	伊藤正浩	小学校6年生（36名）	12	私は、ぼくは、世界の子どもたちの中の一人
02	稲垣裕子 T	中学校1 年生（30 名X4 クラス）	2	外国からやってきた転校生のW くん
03	大島俊介 T	小学校5年生（91 名）	8	わたしたちの『幸せ』を見つけよう～多文化共生編～
04	岡田陽菜乃	小学校1年生（33名）	4	動物たちと一緒に 地球の未来を考えよう！
05	沖久美子 T	特別支援学級1、3、4年生（6名）	2	ミッション、言葉の壁をこえろ！
06	加藤奏太 T	小学校2,3,4 年生（17 名）	3	聞いてほしい私の国のこと ～日本語でゆっくり伝えます～
07	加藤里英	小学校1年生（27 名）	9	知ろう！考えよう！やってみよう！ぼくらのスクール革命
08	神谷樹 T	ブラジル人学校中高生クラス（5 名）	8	かんがえよう！「幸せな生活」に必要なこと
09	狩山智美	小学校1年生（47名）	5	白くまさんをすくえ！
10	菊地純奈	小学校5年生（35名）	7	このままで大丈夫?! 私たちの生活
11	木下美保	大学2 年生（17 人） 高校2, 3 年生（23 人）	3 2	お弁当から考えよう、地球のミライ ～食品ロスと世界の問題
12	久米達哉 T	中学校3年生（76 名）	4	World smile Project
13	髙口涼	小学校3年生（28 名）	4	SDGs入門ーはじめてのSDGsー
14	小林翼	高校2年生（21 名）	2	あなたが着ている服の本当の価値は…？～ファストファッションの裏側～
15	近藤可菜	小学校2年生（32名）	9	世界で起きている問題について（仮）
16	近藤幸実	小学校6年生（67 名）	18	世界はひとつ ～世界をひろげるSDGs～
17	坂口ひとみ	中学校3年生（73名）	5	伝えよう！私たちのSDGs
18	柴田英子 T	小学校5年生（78名）	6	Live Together
19	鈴木崇夫	大学生（15 名）	18	「違い」ー思いがけないメッセージ
20	寺田早希	中学校2年生（182名）	4	Beautiful World ～ちがいが美しくあるために～
21	戸田和佳代	高校生（10 名）	15	私たちの未来を守るお買い物を提案しよう
22	長瀬智寛	小学校1 ～3 年生（8 名）	3	日本の常識は、フィジーの非常識
23	中田貴之	高校1年生（26 名）	9	Beyond SDGs for YOUR Olympic in 2036
24	中谷あゆみ	小学校3 年生（33 名）	17	居心地のよい学級づくり
25	野々山尚志 T	小学校6年生（79名）	6	みんなで創るHappy Town～持続可能な多文化共生のまち～
26	橋爪綾香	中学校1年生（273 人）	4	SDGs 未来のために、私たちができること
27	濱田蒼太	中学校1年生（35名）	10	Ｉいつも Ｃちょっと Ｔ使って × SDGs
28	平手良樹	小学校3 年生（33 名）	7	「SDGs」って何だろう？
29	堀葉月	小学校2年生（24名）	9	世界を知ろう！～これって当たり前？～
30	松田翔伍 T	小学校5年生（93名）	9	YES WE CAN～今日から私は～
31	松田レイナ	中・高・大学生、教育関係者、一般（ 17 名）	3.5	発見！体験！地球市民キャンパス「水」から世界を覗いてみよう！
32	道越彩花	北中学校 PTA（11名）	1	食べ物と世界のつながりについて考えよう！
33	山本孝次 T	中学・高校教員（8名）	2	お悩み解決します！ ～その時、相談員は動いた～
34	吉村典子	高校1年生（25名）	9	Bosai 自分たちは何ができるか

凡例：「T」…教師国内研修受講者（多文化共生）

私は、ぼくは、世界の子どもたちの中の一人

01

所 属	愛知県大治町立大治南小学校	実践者	伊藤 正浩
対 象	小学校６年生（３６名）	実践日	2021 年 ６月～2022 年 ２月
実践教科	総合的な学習の時間・国語	時間数	１２時間
ねらい	・SDGsについて深く知る。 ・世界について興味・関心をもち、課題を見つける。 ・世界の課題を自分事として捉え、解決のために何ができるかを考える。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	**1. 世界の実情を知ろう** ・JICAの講師の方による講座 ・世界の水・食料・ごみなどに関する課題は？	・SDGsと関連付けたクイズ形式
2～5	**2. 世界はどうなってしまうのかを考えよう** ・グループによる派生図の作成 「もし、きれいな水が確保できなかったら？」 「もし、食料がなかったら？」 「もし、ごみがあふれていたら？」など	・世界の水・食料・ごみなどに関する動画
6～7	**3. 自然環境を大切にしよう** ・校区内の町の公園の花壇への植栽	・町の職員の方との交流
8	**4. 「エコライフ」を考えよう** ・中部電力の講師の方による講座 ・自分たちができる、かしこく使う「エコ」とは？	・地球温暖化に関する動画
9～10	**5. 私たちにできることを提案しよう** ・JICAの講座と関連付けた復習 （学校生活の中での水・食料・ごみなどに関する課題は？） ・学校全体で取り組めるであろう内容の提案文の作成	・国語と総合的な学習の時間を関連付けた横断的な学習
11	**6. 外国の方々と交流しよう** ・マレーシアの方々とリモートでの食育交流 ・クローバーテレビからのインタビュー	・JICAの方々の協力のもと
12	**7. まとめ学習をしよう** ・自分が興味のあるSDGsの目標1つに関するパンフレットの作成	・タブレット使用

成 果	・児童と外部講師が出会う出前授業の設定をすることで、今まで知らなかった日本とは異なる世界の実情や、世界が抱える課題を見つけられるよいきっかけとなった。また、SDGsと関連付けた学習や活動を行うことで、それぞれの目標に関する内容を幅広く知ることができた。
課 題	・やはり、「今の私たちは恵まれている」「日本は平和である」という考えをもった児童がほとんどであった。そのため、世界の課題に対して、自分事として捉えられる児童が少ないと感じた。世界や地域社会の課題を見つめ直し、世界の子どもたちの中の一人であることに気付かせていく必要がある。
備 考	・グループによる派生図の作成活動は、全員が積極的に取り組んでいる様子だったので、有効的である。 ・マレーシアの方々との食育交流では、自分にとっても児童にとっても本当に貴重な経験だった。

外国からやってきた転校生のＷくん

02

所 属	三重県　松阪市立鎌田中学校	実践者	稲垣　裕子
対 象	中学校１年生（30 名Ｘ4 クラス）	実践日	2022 年 1 月 14 日～21 日
実践教科	道徳科	時間数	各 50 分　×　2 回
ねらい	・外国につながりのある生徒が同じクラス、学校の中で安心して過ごせるように1人1人がどう考え、行動するかを導く。 ・日本の中の外国について知り、異文化への関心を持てるようにする。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1日目 〈起〉 導入	ミラーゲーム（アイスブレイク） 「多文化共生社会」とは？ 発問1「今、三重県や松阪市にどれくらいの外国人がすんでいるか」「どの国の人が多いか」又その国の国旗など、クイズ形式で学ぶ。 ・「日本の中の外国を知ろう」 写真を見て、日本に外国人コミュニティや多文化共生のために活動している団体のあることを知る。	・三重県内の外国人の数や割合 ・世界の国旗や国、言語の数 ・フィールドワークの写真（DIFAR、セメンチーニャ等）
〈承〉	発問2「もしクラスに外国から転校生が来たらどうする？」 ①もし、自分が海外の学校に転校したら何に困るか。②どんなサポートがあったら安心するか。 4 人グループになり、[KJ 法]で意見を出し合う。個人→グループ ギャラリー方式で、他のグループの意見を評価し合う。 ・振り返り	・KJ 法 ・ギャラリー方式 （模造紙・ペン・付箋） ・振り返りシート
2 日目 〈転〉	・夢を持って活動している、外国ルーツのある人の話を聞く。 発問3「外国から来た友達の声を聞いて、どう行動できるだろう」①「お母さん、学校にこないで」②「私、いじめられているかもしれない」 ［ロールプレイ］［KJ 法］で、感じたことや、友達としてかけてあげたい言葉を考える。→ロイロノートで全体共有 （C 組は、W くんとの対話を行う時間として設定する）	・インタビュー動画（COLORS、セメンチーニャ） ・KJ 法 ・ロイロノート
まとめ 〈結〉	発問4「国や文化、言葉を超えてつながる喜びを感じよう」多文化共生社会への各自の思いや願いを、リーフカードに書く。 ・振り返り	・模造紙、リーフカード ・振り返りシート

成 果	KJ 法では、「自分が外国に行くことになったら」と転校生の気持ちを自分のこととして考え、グループやクラスで考えを深め合うことができた。C 組では、言葉の壁を超えて子どもたち同士が対話をして、つながり合う喜びを実感した。同一性にも気付くことができた。
課 題	現地素材をもっと授業に活かし、子供たちの心に残る授業を行いたかった。また今後、言葉の壁を越えて、子供たちがどう W くんに関わって、卒業までの時間を共に生きる行動や言葉がけをしていくのか、見守りたい。学校全体のサポート体制も国際教育として必要である。
備 考	言葉の壁は、本人・教員・生徒の皆が感じている。人として同じであることを、分かり合う喜びを1人1人が意識できることが大切。対話のきっかけづくりを、今後も進めたい。

わたしたちの『幸せ』を見つけよう～多文化共生編～

03

所 属	愛知県津島市立東小学校	実践者	大島 俊介
対 象	小学校５年生（91 名）	実践日	2022 年１月～２月
実践教科	総合的な学習の時間、算数	時間数	８時間
ねらい	・日本で暮らす国籍の違う方の苦労を知り、自分たちができることを考える。 ・日本と他国の文化の違いに興味をもち、多文化共生社会の実現に向けてできることを考える。 ・日本語を話せない友達にも優しい学校になるように、案内表示をつくる。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	**「あいさつゲーム」**【アイスブレイク】 ・「こんにちは」を多言語で用意し、コミュニケーションをする。 ・1回目　世界の言語の人口比率に合わせたカード ・2回目　愛知県の外国籍の方の人口比率に合わせたカード	・あいさつカード
2	**「もしもわたしが一人で知らない国へ行くとしたら」** ・楽しみなこと・心配なこと【対比表】 ・ギャラリー方式で他グループと共有する。	・B4 用紙、ペン
3	**「これ何？これどこ？」**【クイズ】 ・研修で出会った料理や案内看板、商品などの写真と、ALT の母国料理、地域にある多国籍料理店の写真を題材にする。 ・インドカレーの手作り体験の動画を紹介。 ・多国籍料理を献立に取り入れる理由を栄養教諭にインタビューする。	・写真 ・自作動画 ・栄養教諭の動画
4	**「これは伝わらないとピンチ！学校探検」**【マッピング】 ・グループごとに多言語のサポートが必要な場所を紹介する。 ・撮影してきた写真を見ながら、案内表示の方法を相談する。	・校内地図 ・丸シール ・タブレット
5・6	**「日本語が話せない友達にやさしい学校づくり」** ・愛知県の外国籍人口別割合を紹介する。 ・グラフからわかることを考える。【ブレーンストーミング】 ・津島市では、30 人学級で約 1 人が外国籍であることを紹介する。 ・案内表示をつくる。（ポルトガル語、中国語、韓国・朝鮮語、タガログ語、ベトナム語、スペイン語の6言語について作成する）	・資料「愛知県内の市町村における外国人住民の状況」 ・模造紙、ペン ・タブレット ・八つ切り画用紙
7	**「日本語を話せない友達が安心して過ごせる学校にするために」** ・自分、学校、地域の 3 項目について【できることビンゴ】 ・韓国、中国、フィリピンの文化を児童にインタビューする。 ・外国籍の方のサポート活動をしている方にインタビュー動画を紹介。	・A4 用紙、ペン ・インタビュー動画
8	**異文化コミュニケーション体験「バーンガ」**【ゲーム】 ・自国のルールと他国のルールは異なることを理解するためのゲーム。	・トランプ ・ルールブック

成 果	課題に対して関心をもつだけでなく、自分たちにできることを意欲的に考えるようになった。本実践を行うまでに、さまざまな人権をテーマに額数してきたことにより、多文化共生社会を「おもしろうそう」と考える児童が多くいた。未来は確実に良くなっているという認識を子どもたちがもたせることができたので、「やさしい学校づくり」学習では、ハード面だけでなくソフト面のできることまで考えることのできる児童が多くいた。
課 題	言語ありきの配慮を想定した実践であったため、実際に日本語が話せない友達を受け入れたときに、現実の難しさを感じさせてしまうだろう。しかし、今後も私とあなたの幸せについて考えることを学習の軸にしていくことで、「何とかしたい」という自発的な行動をとれるような雰囲気を作り上げていきたいと考えている。
備 考	本実践までに取り上げた人権のテーマは「世界人権宣言」「他己紹介による他者理解」「女性の人権」「障害のある方への人権」「LGBTQ＋」などである。1年間の総合学習のテーマを「わたしたちの『幸せ』を見つけよう」と定め、私だけでなく周りのみんなの幸せも守っていける社会にしていくために、共に学んでいる。

テーマ ： 環境、共生

動物たちと一緒に　地球の未来を考えよう！

04

所 属	大治町立大治南小学校	実践者	岡田 陽菜乃
対 象	小学校１年生（３３名）	実践日	2021 年 10 月～11 月
実践教科	学級活動	時間数	４時間
ねらい	・絶滅危惧種ついて知り、動物たちが困っていることに気付く。 ・自分たちの生活が、動物がすむ環境につながっていることを知り、自分にできることを考える。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	◆ SDGsについて知ろう。 ① 「トーマスとなかまたち」の動画を見る。 ② 動画を見てどう思ったか、児童同士で交流する。 ③ ワークシートを使用し、どんな世界になってほしいか考えて書き、共有する。 	ワークシート 動画：「トーマスとなかまたち－SDGs出発進行」 動画：「トーマスとなかまたち－SDGs陸の豊かさも守ろう(ゴール15)」
2・3	◆ 動物たちがどうして困っているのかを知ろう。 ① 「SDGsデジタル絵本」の動画を見て、動物たちが困っていることを知る。 ② ワークシートを使い、それぞれの動物たちがどうして困っているのか、クイズをする。 ③ 写真を提示しながら答え合わせをする。 ④ 実際に動物園へ行き、動物を身近に感じる。（社会見学）	動画：「SDGsデジタル絵本」 ワークシート 困っている動物の写真
4	◆ 動物たちのために何ができるか考えよう。【できることビンゴ】 ① 今までに学んだことを振り返る。 ② 動物たちのためにできることを個人で考えてワークシートに書き、共有する。 ③ 共有して出た意見を使って、「できることビンゴ」を作る。 「今すぐできる」「がんばればできる」「大人とできる」の3つの項目を設定し、出た意見を分けて、ビンゴを作る。 ④ できあがったビンゴを共有する。 	ワークシート

成 果	・ 動物たちについて知り、実際に動物園へ行くことで、より動物を身近に感じながら課題について考えることができた。 ・ ビンゴを3項目に分けて作ることで、今自分にできることを明確にし、日常生活につなげることができた。
課 題	・ 普段、動物との接点があまりないため、動物について考えるときに、イメージが湧かない児童が多かった。より日常生活につなげられる活動を取り入れると良かった。
備 考	

ミッション、言葉の壁をこえろ！

05

所 属	愛知県弥富市立弥生小学校	実践者	沖　久美子
対 象	特別支援学級１、３、４年生（６名）	実践日	2021 年 12 月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	2 時間

ねらい

・日本にいろいろな国の人が住んでいることを知る。
・言葉の壁をこえるための方法を考える。

実践内容

回	プログラム	備 考
1	**◆国旗あてゲーム** ・国旗カードを1人1枚持つ。他の人が持っている国旗カードについて質問をして、どこの国旗カードを持っているか当てる。 **◆クイズ「どこの国のものでしょう？」** ・料理や食材、お店の写真を見て、どこの国のものかを考える。 ⇒すべて日本国内で撮影した写真であること、いろいろな国の人が日本に住んでいることを知る。 **◆ふりかえり** ・授業の感想を述べる。	・国旗カード ・フィールドワークで撮影した写真を使用。
2	**◆国旗あてゲーム** ・前時同様、国旗当てゲームをする。 ・世界地図を見て、どこにその国があるか確認する。 **◆身のまわりにある外国語表記はなぜあるの？** ・ゴミ捨て場の外国語表記の写真、ゴミ袋の外国語表記、学校で配られる外国語の配布物などを見て、なぜ外国語で書かれているか考える。 ⇒日本語を読むことができない。言葉の面で困ることがあることを知る。 **◆ミッション、「津波が来る！逃げて！」を日本語ができない人に伝えよう！** ・日本語ができない友だちに「津波が来る！逃げて！」を伝えるためにどうすればいいか考える。 ・日本語ができない人にとっても災害の情報は大切だということを知る。 **◆ふりかえり** ・授業の感想を述べる。	・国旗カード ・世界地図 ・フィールドワークで撮影した写真を使用。 ・ゴミ袋、学校の配布物。

成 果

・国旗あてゲームやどこの国のものか考えるクイズを通して、外国に興味をもつことができた。
・写真やゴミ袋、外国語の配布物を通して、身のまわりに外国語で書かれたものがあることを知ることができた。
・日本語ができない友だちに大切な情報を伝える方法を考えることができた。

課 題

・カタカナを読むことが難しい児童もいるため、クイズでもカタカナの国名を読むのが難しかった。
・2回目の授業では、自分が考えたアイディアを発表する必要があり、一部の児童には難しい内容だった。
・どこの国のものか考えるクイズでは、食べ物の写真が効果的であり、より多く使うとよいと思った。

備 考

聞いてほしい私の国のこと ～日本語でゆっくり伝えます～

06

所 属	江西国際学園　小学部	実践者	加藤　奏太
対 象	小学校 2, 3, 4 年生（17 名）	実践日	21 年 10 月～2 月
実践教科	日本語	時間数	3 時間
ねらい	・自分の国のことを伝える、および友達の国のことを知る。 ・自分の国のことを知ってもらう場を通じて、自分のアイデンティティを大切にする心を育てる。 ・表現したいことの日本語を学び、コミュニケーションとしての日本語を楽しむ。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	・好きな食べ物についての話を行う。 〇私の国の料理が好きだよ。いつも食べているご飯が好きだよ。 ➡「私の国について調べて発表しよう」 ・どんなことを調べたいか考える。 〇食べ物のこと、国の場所のこと、文化のことなどを発表したい。 ➡知ってもらいたいことについて、調べてみよう 国の場所と国の国旗を調べよう / 国の食べ物とか料理とかを紹介しよう 国の言葉を話して紹介してみよう。 / 国の問題についてはなしてみよう。	・会話練習の流れから、他の人があまり知らない食べ物を知っていることで、自分にも話ができることがあることを理解する。 ・児童には、韓国人、中国人、トルコ人、インド人、ブラジル人、アメリカ人、ロシア人が在籍している。日本人生徒に向けて発表することを確認する。
2	・日本語の伝え方を練習しよう。 ・「日本から飛行機で〇〇時間かかります。」 ・「この料理の名前は、〇〇です。おいしいです。」 ・「▲▲語でありがとうは、□□です。」 ・「〇〇の問題は、〇〇です。」　など	
3	・日本人の友達に発表をしよう。 どんな気持ちになったかな。 ➡ ・もっと自分の国のこと知ってもらいたくなったよ。 ・少し恥ずかしかったけど、聞いてもらえてうれしかったな。 ・日本語でも、ちゃんと通じて嬉しかったよ。 ・逆に日本のことも知りたくなったな。	・発表を聞く児童たちには、新しく知ることができたこと、日本語の話し方などを評価できる評価シートを書いてもらうことを伝える。

成 果	自分のことや自分の国のことを誇りに思うきっかけになったり、友達の国や思いを大切にしようと思えるきっかけづくりになったりした。
課 題	拙い日本語では、十分に様子を伝えることが難しかったり、そもそもその国のことをその子自身があまり知らず、伝えることも、伝える内容のことも、上手にできなかったりする子が少なくなかった。
備 考	この学習ののち、「言葉に特化した発信」「日本についての調べ学習」「自分の思いを日本語で伝えよう」という学びに推移していく。

テーマ ： 教育・貧困

知ろう！考えよう！やってみよう！ぼくらのスクール革命

07

所 属	愛知県津島市立東小学校	実践者	加藤 里英
対 象	小学校１年生（27 名）	実践日	2021 年 11 月～2022 年 2 月
実践教科	学級活動	時間数	9 時間
ねらい	・世界の子どもたちの生活について興味をもつ。 ・様々な原因で学校に通えない子どもたちがいることを知り、自分たちとの違いに気付く。 ・世界中の子どもたちにとっての平和な未来を想像し、自分たちができることを考える。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	**○ 学校っていいところ？うーんなところ？** ・学校に関する質問をし、自分の考えに近いものを選ぶ。【4 つのコーナー】 ・学校のいいなと思うところ、うーんと思うところを挙げ、その中から3つ選んで投票する。【ブレーンストーミング】【対比表】	・模造紙 ・丸シール
2	**○ せかいの子どもたち ウソ？ホント？** ・世界の子どもたちや学校に関するクイズから、日本との違いに気付く。 ・『世界がもし 100 人の村だったら 子ども編』を読み聞かせ、学校に行けない子どもたちがいることを知る。	・キッズ外務省 HP ・『世界がもし 100 人の村だったら 総集編』（池田香代子：著 マガジンウス：出版）
3	**○ 学校にいけないと どんなこまったことが・・・？** ・文字が読めないことによって起きる困った事を体験する。【ロールプレイ】 ・学校にいけないと起きる困った事がどのように繋がるかを考える。【派生図】	・ペットボトル ・水・薬・毒の表示（ネパール語） ・模造紙とペン
4	**○ 学校にいけないのは どうして？** ・学校に行けない原因について写真で紹介し、その原因が起きてしまった理由を考える。【ブレーンストーミング】 ・谷川俊太郎「その子」の動画を視聴し、感じたことを発表する。	・『学校に行きたい！』(jica 資料) ・save the children・World vision から引用した写真 ・模造紙とペン
5	**○ くらべてみよう！ ショリファちゃんとわたし** ・家事使用人として働く 9 歳の少女を紹介し、自分たちの生活と少女の生活を比べる。【フォトランゲージ】	・シャプラニールから引用した写真・資料 ・ワークシート
6・7	**○ せかいじゅうの子どもたちが学校に行けるようになるには？** ・今までに紹介した子どもたちが学校に行けるようになるために必要な事を考える。 ・前時までに紹介した子どもたちを救うためのひみつ道具を考える。【イメージ図】	・模造紙とペン ・ワークシート
8・9	**○ かんがえよう！やってみよう！よりよいみらいとわたしたち** ・平和な未来を想像し、そのためにできることを考える。【指標作り】【ビンゴ】	・模造紙とペン ・ビンゴシート

成 果	・初めて知る内容や自分たちとのギャップから、子どもたちの反応も新鮮で興味津々で参加していた。 ・写真や資料などによって子どもたちの興味を引くことができたとともに、比較などもしやすくなった。 ・ポップコーン方式や派生図などの手法は他の授業で練習していたため、スムーズに行うことができた。
課 題	・低学年は知識や経験が乏しく、説明や活動にも時間が掛かり 45 分で終わらいこと、共有が不十分な事があった。1時間に盛り込み過ぎないように内容を精査し、2時間に分けるなど活動に余裕をもってプログラムする必要がある。 ・第6回からの必要な事や自分にできる事を考えることは難しそうであった。子どものつぶやきなどから視点を絞り、順を追って丁寧に方向づけをしてあげる必要があると実感した。
備 考	・SDGsのゴールについても視聴教材などを使って引き続き学ばせていきたい。このプログラムで考えた内容に関係しているゴールをリンクさせるなど、実践後も活動を続けていきたい。

テーマ ： キャリア、コミュニケーション

かんがえよう！「幸せな生活」に必要なこと

08

所 属	エスコーラ・ネクター（ブラジル学校）	実践者	神谷　樹
対 象	中高生クラス（5 名）	実践日	2021 年 11 月～12 月
実践教科	日本語	時間数	80 分×5 コマ
ねらい	・自身考える幸せな生活像を明確にイメージし、日本語で伝え合う ・日本で生活する上で「幸せな生活」を妨げる要因なのか、身近な人へのインタビューから考える。 ・「幸せな生活」を実現するためにどんな知識や能力が必要なのか、生徒自身が考え、授業内容を提案する。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	**◇「きのう・きょう・あしたゲーム」【アイスブレイク】** 次の人を指名しながら、「おととい」、「きのう」「きょう」「あした」「あさって」の順に言葉を言っていく。	
	◇「幸せな生活」について話そう ①様々な生活場面の写真をみて、自分のイメージする「幸せな生活」に合致する順番に並び替える。【ランキング】	それぞれに配る「家族と食事」「お祭り」「旅行」などの場面の写真 8 枚
	②上位の写真のどこが「幸せな生活」だと思ったのか、日本語のキーワード（「かぞく」「にぎやか」など）を付箋に書き、写真に張る。【フォトランゲージ】	全員で一緒に見るための大き目の写真
	③各生徒の順位やキーワードの違いについて、生徒同士で話し合う。	付箋
2	**◇最近の「幸せ」を思い出そう** 自身が書いた「幸せな生活」のキーワードが含まれた体験を、最近の出来事から探す【ブレインストーミング】	白紙
3	◇インタビューしよう。日本の生活で困ったこと ①家族など身近な人が、日本で生活する中で感じた困難をインタビューし、その困難の要因について考える。	インタビューシート
	②見つけた要因が妨げてしまうかもしれない、自身の「幸せな生活」のキーワードを関連付ける。【対比表】	対比表を書くプリント
4、5	**◇考えよう、もっと幸せになるためには…** ①どうすれば困難を取り除き、「幸せな生活」を広げられるかを考える。	
	②その中から授業の中で練習したり、調べたりできることを選び、教師に提案する。	
	③教師はその内容を日本語の授業のなかに取り入れる。	

成 果	日本語の授業で態度が受け身になりがちな生徒が「日本人と仲良くなる」という目的で日本の高校を舞台にした映画から日本語を学習することを提案できた。主体的な学習態度を引き出すことができたのではないかと思う。
課 題	身近な人へのインタビューの内容から困難の要因を探すことは、教師の指示がよくなかったのか、うまくいかなかった。母語で因果関係図を書かせてもよかったのではないかと思う。
備 考	基本的にはポルトガル語を使わず、日本語で指示や説明を行った。

白くまさんをすくえ！

09

所 属	名古屋市立鳥羽見小学校	実践者	狩山 智美
対 象	小学校１年生（４７名）	実践日	2021 年 12 月～2022 年 2 月
実践教科	学級活動	時間数	5 時間
ねらい	・地球温暖化の影響で、ホッキョクグマが絶滅の危機にあることを知る。 ・人間の生活が地球温暖化と関係していることに気付く。 ・地球温暖化を止めるため、自分たちにできる事を考え、行動する。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	◆ 白くまさんのねがいとは？ ① 絵本「白くまのねがい」を読む。 ・ ホッキョクグマが北極でどのように暮らしているかを知る。 ・ 母親の愛情を受けて育ったり、きょうだいでじゃれあったりと、人間と同じであることに気付く。 ② 白くまさんからの手紙 ・ ホッキョクグマの現状を知る。【ストーリー】 ・ ホッキョクグマにはどうしようもない状況であることに気付く。 ③ 地球が熱くなっているのはなぜ？ ・ 絵本「環境破壊モンスターから地球を救おう！」に出てきたジュージュードラゴン（地球温暖化）との因果関係に気付く。 ・ 自分たちでジュージュードラゴンの力を弱め、ホッキョクグマを助けようという気持ちをもつ。	絵本 手紙 絵本
2	◆ ジュージュードラゴンをたおすには？ ① 絵本に載っているモンスターカードから、ジュージュードラゴンの弱点を見付ける。 ・ CO2 やメタンガスが原因であることを知る。 ② 力を弱める方法を考える【ブレーンストーミング】 ・ 多くの方法があることを知る。 ・ 家族や友達など一緒に取り組む仲間がいることの大切さに気付く。	ホワイトボード ペン
3～5	◆ 白くまさんをすくえ！プロジェクト ① 自分にできそうなことを考え、実行する【ビンゴ】 ・ 家族の協力やアドバイスを積極的に得、できそうなことを9つ選ぶ。 ・ 家庭や学校で実行する。 ② 振り返る。 ・ 自分たちの小さな工夫がよりよい未来につながっていくことを知り、これからも続けていこうとする気持ちをもつ。	

成 果	・ 絵本を活用したことで、低学年の児童も「地球温暖化」の意味を理解したり、自分たちの生活とのつながりに気付いたりすることができた。 ・ 白くまから自分たちに手紙が届くという設定は、児童が課題を自分事として捉え、行動しようとする意欲を高めるために有効であった。
課 題	・「こうなったのは人間のせいだ」と強く感じてしまった児童もいた。多面的に課題を捉えられるように、配慮する必要があった。
備 考	国語教科書（教育出版）より「うみへのながいたび」小原玲 絵本「シロクマのねがい」前川貴行　「環境破壊モンスターから地球を救おう！」マリー・G・ローデ

テーマ ： 環境

このままで大丈夫?! 私たちの生活

10

所 属	愛知県名古屋市立平田小学校	実践者	菊地　純奈
対 象	小学校５年生（３６名）	実践日	2021 年 10 月～2022 年 1 月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	7 時間
ねらい	・ 食料問題やプラスチック問題が自分たちの生活によって引き起こされていること、それが地球全体に影響を与えていることに気付く。 ・ どうすれば食品ロスやプラスチックを減らすことができるか考える。 ・ 自分ができることを考え、行動しようとする。		

実践内容

回	プログラム	備 考
	◆ このままで大丈夫？！私たちの食生活	
1	① 好きな食べ物で自己紹介 【リスト・ランキング】	
	② 食の不均衡について知る 【クイズ】 食料問題の現状をクイズで予測し、解説で確認する。	消費者庁、WFP、世界食糧デー、農林水産省の HP
2	③ 食品ロスと自分たちとのつながりに気付く【ロールプレイ】 食品ロスと自分たちとのつながりに気付くため、影響を受けている多様な人になりきり、それぞれ演じ合う。	日本財団、WFP、中央大学の HP
3	④ 自分ができることを考え、行動しようとする （行動計画・宣言）	
	◆ このままで大丈夫？！私たちの生活とプラスチック	
4	① プラスチックでビンゴ 【ビンゴ】 身の回りにあるプラスチックをビンゴに書き、友達と交流する中で、プラスチックが自分たちの生活にあふれていることに気付く。	
	② プラスチックの利点をまとめる 【派生図】 なぜプラスチックが身の回りにたくさんあるのか考え、プラスチックに頼っている現状を深く理解する。	
5	③ 日本のプラスチックの現状・問題点に気付く【クイズ】 プラ問題の現状をクイズで予測し、解説で確認する。	『プラスチックごみ-開発アクティビティ集4』 DEAR 2020
6	④ プラ問題と自分たちとのつながりに気付く【ロールプレイ】 プラ問題と自分たちとのつながりに気付くため、影響を受けている多様な人になりきり、それぞれ演じ合う。	
7	⑤ 自分ができることを考え、行動しようとする （行動計画・宣言）	

成 果	・ 食品ロスやプラスチックについて、自分たちの身近な問題として捉えることができる児童が増えた。 ・ クイズやロールプレイを用いることで、児童が主体的に学ぼうとする姿が見られた。 ・ 実践後、環境問題や SDGsについて、自主的に調べたり行動したりする児童がいた。
課 題	実践直後は、「自分も何か行動したい」「行動してみよう」という気持ちが高まった児童が多かったが、実際に行動できた児童はそこまで多くなかった。また、その気持ちを持続させることも難しいと感じた。継続して実践を行うことや、保護者や家庭を巻き込んだ実践ができたらいいと考えている。
備 考	

テーマ ： 食品ロス　平等

お弁当から考えよう、地球のミライ　～食品ロスと世界の問題～

11

所 属	青年海外協力隊　静岡県 OB 会	**実践者**	**木下　美保**
対 象	大学 2 年生　17 人　　高校 2，3 年生　23 人	**実践日**	2021 年 11 月 24・12 月 1 日
実践教科	大学生：ゼミの授業　　高校生：部活動(家庭部)	**時間数**	大学生 3 時間　　高校生 2 時間
ねらい	・「食」を通じて日本と世界のつながりに気づき、そこから見えてくる問題を知る。 ・その問題の 1 つ「食品ロス」を取り上げ、世界で起きている問題を自分事としてとらえる。 ・このプログラムが最終的に「自分たちができることは何か？」を考え・行動出来るような きっかけになるように。		

実践内容

回	プログラム	備 考
大学 ここま で90分	①アイスブレーキング 「他己紹介」➡世界を知るには**身近から知る** ②「お弁当のひみつ」キットを使い、グループでフェルトの食材を使い お弁当をつくる。➡他者との**協力**【シュミレーション】 ・その食材(原料・加工品)がどこから来たのか(輸入・国産)を予想し 世界地図に置いていく。➡物事に興味を持つ為の**予想** ・答え合わせをし、輸入国にその食材を置き、日本産の食材をお弁当箱に 戻す。➡日本と海外の関係の**気づき** ・アクティビティーを通じて得た「気づき・理解」の**整理➡思考の整理と共有** 【ブレーンストーミング】【KJ 法で整理・分類】【共有】	「お弁当のひみつ」 キット
	③食料生産国の様子を知る「アフリカ　マラウイからオンライン中継」【体験】 **➡百聞は一見に如かず**　マラウイの食料問題を知る ④「食品ロスが引き起こす問題」➡**問題の洗い出しと整理** 【派生図】 ・「食品ロスが引き起こす問題」が「自分にどんな影響があるか」➡ 【リスト化】して 【共有】 ・今まで出た意見をデータで再確認➡**資料の読み取り・パワポの解説**	マラウイと ZOOM (時差 7 時間)
ここま で90分 2 回で 3 時間	⑤「食品ロスをなくす為に」➡解決策を【ポップコーン方式】で出し合い 【共有】 ⑥「食品ロスをなくす為に」出来ることを考える。考え➡行動へ 「自分の行動宣言」を書き、発表。【視覚化】 ⑦ファシリテーターから受講者へ　今後の学びのために 【私メッセージ】	＜高校生＞ 家庭科の教科書 と資料集 タブレット 「ロイロノート」
高校 2 時間	A①アイスブレーキング B②シュミレーションまでは大学生と同じ。 C 「世界のニュース」クイズ D③食料生産国の様子を知る「アフリカ　マラウイからオンライン中継」 E④「食品ロスをなくす為に」出来ることを考える。考え➡行動へ 「自分の行動宣言」を書き、 ロイロノートで提出・共有	

成 果	大学生：自分の身近なことから(出来ることから) 関わり・行動していこうと今後の学びの肥やしになった。 高校生：世界の出来事に興味を持つきっかけになった。 共通：「アクティブラーニングは受け身の授業ではなく、楽しかった。自分とは異なる友達の意見も聞け『共育』の楽しさを体感した。」という意見が多かった。
課 題	外部講師として実施のため与えられた時間が短く、考察時間を長く取れない。 現在の教育カリキュラムではアクティブラーニングを実施する為の時間確保が容易ではない。
備 考	10月 27、28 日　　日本大学三島高等学校　家庭部 2、3 年生　　各日 2 時間を 2 グループに分けて 11 月 24 日、12 月 1 日　日本大学国際関係学部　冨岡ゼミ　2 年生　　ゼミ(90 分授業×2 コマ　)

テーマ ： 人権、共生

World Smile Project

12

所 属	愛知県弥富市立弥富北中学校	実践者	久米　達哉
対 象	中学校３年生（76 名）	実践日	2021 年 12 月～1 月
実践教科	英語	時間数	４時間

ねらい

・ 日本と世界の違いを知り、「日本」と「世界」のよさに気付く
・ それぞれのよさを合わせた「理想のまち」をデザインし、自分にできることを見つけ行動へつなげる

実践内容

回	プログラム	備 考
1	○アイスブレイク「4つのコーナー」（10分） 動物を飼うなら、休日に出かけるなら、ケーキを食べるなら 料理を食べるなら、旅行に行くなら ○世界を知ろうクイズ（15分） ・写真をどの国に関連することなのかを考えさせる 【マッチング】 ・写真に関連するストーリーシートを読み取る【フォトランゲージ】 ・写真の説明を1人ずつ行う ○ 日本と世界のよさに気付こう（20分） ・外国籍の方に行ったインタビューをもとに、「日本のよさ」「母国のよさ」をまとめる。【ブレスト】 ・「これ気付かなかった！」と思う箇所に付箋（オンライン上）を貼る ○まとめ（5分）	・写真 ・ストーリーカード ・インタビュー動画
2	○世界の人々が日本で生活するうえで困っていることを知ろう（15分） ・ロールプレイをもとに、外国籍の方の困りごとについて考える ・困りごとの中にある、課題に気付く ○課題を解決するために必要となるコト・モノを考える（30分） ・課題解決のために必要なモノ・コトを付箋に書き出す【ブレスト】 ・出てきたものを分類分けし、グループに前を付ける【KJ法】 ・自分たちの考えたものの中で絶対に外せないポイントをまとめる ○まとめ（5分）	・ストーリーシート
3	○理想の「まち」を創る（50分）【イメージ図】	
4	○発表を行う ○行動宣言を行う ・達成に向けて必要となる行動を考える ・個人での行動宣言を行う	

	個人	みんなで
今すぐ		
1年後		
20年後		

成 果

・ 実際にあった事例をもとに課題を知ることで、課題解決の方法を考えやすかった。
・ 課題解決の方法を、短期・中期・長期で考えることで、課題解決までの流れを実感しやすかった。
・ 3年間、SDGsを軸に学習したことの集大成となった。

課 題

・ コロナ禍による制限があり、グループワークを十分に行えず、タブレット活用による活動がメインとなった。生徒の中には自分の意見がなかなか言えないでいる者もいた。

備 考

SDGs入門ーはじめての SDGsー

13

所 属	静岡県富士立広見小学校	実践者	髙口 涼
対 象	小学校３年生（28 名）	実践日	2022 年 １月～２月
実践教科	（道徳科・学級活動）	時間数	４時間

ねらい

・SDGsについて知ろう。
・身近な生活と SDGsとの関わりについて考えよう。
・国際理解の観点から教育について考えよう。

実践内容

回	プログラム	備 考
1	・SDGsについて知ろう。 17 の目標についてみてみよう。 身近なものがあるかな。ないかな。	外務省等ＨＰより動画を使用
2	・身近な生活と SDGsについて考えよう。 17 の目標から自分たちの生活に結びつけて考えよう。 【アイスブレイク】【派生図】 ・すごろくを使って SDGsについての理解を深めよう。	1時間目が終わったら、教室掲示に SDGsの 17 の目標を掲示しておく。
3	・マララさんのノーベル賞受賞のスピーチを題材に国際理解の観点から道徳の授業を実践。 ・動画を見て自分たちとは違う国の様子について考える。 ・SDGsのどの目標に当てはまる話か考える。	動画の用意、資料の用意、世界地図の用意
4	・自分たちの考えられる SDGsについてまとめる。 【派生図】【KJ法】	

成 果

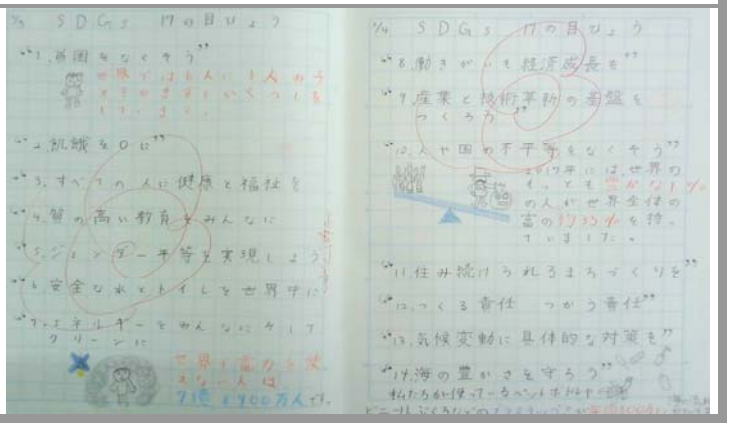
・今回は、基本の「き」を意識して取り組んだ。一から教材を作るというよりもすでにあるものを組み合わせることで4時間の授業を構想し、実践することができた。十分にねらいを達成できるものだったと考えている。
・教室掲示に SDGsの目標を掲示することで、意識して見たり、生活の中で結びつけて考えようとしたりする子供の姿が見られた。

課 題

・今回は、授業準備とねらいの達成とのパフォーマンスの兼ね合いを考えながら行ってきた。学習指導要領との兼ね合いを計画段階で丁寧におさえておく必要がある。

備 考

・毎日の自主学習で自分で SDGsについて課題を設定し取り組んだ子供がいた。 17 の目標について調べ、自分なりにまとめている様子が伺える。ねらい設定をきちんと行うことで公開されている教材から授業実践をしても十分に教育効果が得られるといえる。



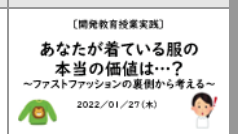
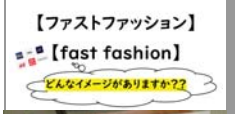
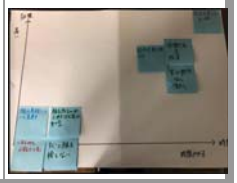
テーマ ： 人権、貧困、環境、消費社会

あなたが着ている服の本当の価値は…？ ～ファストファッションの裏側～

14

所 属	静岡県立沼津工業高等学校（定時制）	**実践者**	**小林　翼**
対 象	高校２年生（21 名）	**実践日**	2022 年　1 月 27 日
実践教科	地理歴史科　地理 A	**時間数**	２時間
ねらい	・自分が着ている服（ファストファッション）がどこで、誰に、どのように製造されているのか考え、生産の裏側の問題に気づく。 ・問題を解決するために、服を購入する側の私たちにできることは何か考え、当事者意識を持って行動できるようになる。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	【アイスブレーキング】 ひとこと自己紹介 ～最近買ったモノは？～ 4 人グループで自己紹介。 【アクティビティ①】 ファストファッションからイメージするものは？〔ブレーンストーミング〕 ① ファストファッションという言葉からイメージするものを各自で付箋に書く。 ② グループで 1 枚の A3の用紙に、一人ずつ発表しながら貼っていく。 ③ 関連するものを囲み、タイトルをつける。 ④ 良いイメージのものに「☆」、悪いイメージのものに「×」を書く。 ⑤ 気づいたことをグループで3つ挙げる。 【アクティビティ②】 なぜファストファッションは安いのか？〔因果関係図〕 ① 中心に「なぜファストファッションは安いのか？」とテーマを書く。 ② テーマから考えられる理由（なぜ安いのか？）を考え、矢印を引いて書く。 ③ さらにその原因と考えられる理由も書き足していく。 ④ 完成した因果関係図を共有する。（自由に歩いて観覧し、良い部分に☆）	 
2	【映像資料】 『ザ・トゥルー・コスト ～ファストファッション 真の代償～』 ① 紙の資料と映像資料でファストファッションの生産の裏側の問題について理解する。 ② 感じたこと、考えたことをグループで共有する。 【アクティビティ③】 私たちにできることはあるだろうか？〔二次元軸〕 ① 消費者の立場で何ができるのかを考え、思いついたことを各自普選に書く。 ② 縦軸「効果」、横軸「時間」の二次元軸が書かれた用紙に発表しながら貼る。 ③ 完成した二次元軸を参考に、今日から自分がやることを3つ決める。	 

成 果	ファストファッションという言葉そのものを知らない生徒が多い中、身近な服がどこで、誰に、どのように作られているのかという、普段考えないことを考えるきっかけを作れた点に大きな意義を感じた。また、授業前はファストファッションに対する良いイメージを持つ生徒が大半だったが、授業を通して、生産の裏側など、多様な視点を生徒に持たせることができたように感じる。
課 題	想定したよりも時間が少なく、ひとつひとつのアクティビティにゆとりを持って取り組むことができなかった。また、単に「気づく」だけに留まらず、いかに「行動に移すか」というところまでアプローチすることが今後の課題だと感じた。ファストファッション以外の生産の裏側についても自ら学習していき、生徒に伝えられるようにしていきたい。
備 考	〔参考資料〕 伊藤和子（2016）『ファストファッションはなぜ安い？』（コモンズ）、アンドリュー・モーガン(2015)「ザ・トゥルー・コスト ～ファストファッション 真の代償～」（DVD）

おもちゃランドで SDGs！

15

所 属	大治町立大治南小学校	実践者	近藤　可菜
対 象	小学校２年生（３２名）	実践日	2021 年 11 月～12 月
実践教科	生活科	時間数	９時間
ねらい	・世界で起きている問題について興味をもつ。 ・環境問題に対して、自分たちにできることは何か考え、行動する。 ・学んだことを発表し、世界で起きている問題について知らせる。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	**①自己紹介「すきな海の生き物」【アイスブレーキング】** ・校外学習で行った名古屋港水族館を思い出し、すきな海の生き物を発表する。 **②動画視聴** ・砂浜に違法投棄されているゴミが、海の生き物に影響を及ぼしていることを知る。	
2	**③「ごみがふえ続けたら・・・？」【派生図】** ・班ごとにこのままゴミが増え続けたらどうなるか考え、派生図を作成する。 ・違う班の派生図を見て、よい意見に〇をつける。 →海の生き物が被害を受けることが、空気汚染などの環境問題や、食べ物がなくなることに繋がり、私たちの命にも影響をうけるということに気付く。	
3～8	**④「わたしたちにできること」【リストアップ】** ・今のわたしたちにできることを考える。 **⑤「ゴミを使って、おもちゃランドをつくろう！」** ・空き箱や、ラップの芯などの廃材を活かしておもちゃを作る。	
9	**⑥「おもちゃランドに１年生を招待しよう！」** ・1 年生に、ごみを減らす取組が海の生き物の命を守ることに繋がることを伝える。	

成 果	・SDGsについて知り、世界で起きている問題について興味をもつことができた。 ・自分たちにできることがあるということに気付き、行動意欲を高めることができた。
課 題	児童にとって、おもちゃづくりが、ごみを減らすことに繋がっているということを感じにくいと思った。おもちゃづくりの時間にも、アクティビティを取り入れて、海の生き物を守ることを意識するようにできたらと思った。
備 考	

世界はひとつ ～世界をひろげる SDGs～

16

所 属	愛知県東浦町立石浜西小学校	実践者	近藤　幸実
対 象	小学校６年生（67 名）	実践日	2021 年 ９月～１１月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	１８時間

ねらい

・同世代の世界の子どもたちには、さまざまな「ちがい」があることに気付き、「ないほうがよいちがい」に着目することから、世界で起きている問題や負の連鎖について知る。
・「ないほうがよいちがい」をなくすために自分ができることを SDGsに関連させて考える。
・SDGsについて、校内や家族に知らせる。

実践内容

回	プログラム	備 考
１－３	**世界の小学6年生** 1 前学期に調べた世界の建物や祭りを紹介し合い、世界の魅力を想起する。 2 同年代の子どもの暮らしが書かれているカードをロールプレイで紹介し合う。【ロールプレイ】 3 ロールプレイから、自分と世界の子どもの「ちがい」を探す。【ブレーンストーミング】 4 「ないほうがよいちがい」がそのままだとどんなことが起こるか、どんな世界になっていくか想像する。【派生図】 5 各グループの考えを共有する。【ギャラリー方式】 6 教育が受けられないことで起こる「負の連鎖」が実際に起きていることを知る。 7 自分たちにできることがあるか考えてみる。	○カード参考 ・「ワールド・ビジョン・ジャパン」ホームページ ・開発教育協会『気候変動－開発教育アクティビティ集3』
４－６	**自分たちにできることは？** 1 ペアで共通点と相違点をなるべく多く探し、「ちがい」はあって当然だということに気付く。 2 「ないほうがよいちがい」はなぜ生じるのか考える。【因果関係図】 3 各グループを共有し、自分も無関係でないことに気付く。【ギャラリー方式】 4 前学期に学んだ SDGsを想起し、SDGsを達成することが、「ないほうがよいちがい」をなくすことにつながると気付く。 5 自分たちにできることを調べたり考えたりする。【ブレーンストーミング】 6 自分にできることを考える。【できることビンゴ】	・JICA 教材「教育が受けられないことで起こる“負の連鎖”を考える」
７－18	**SDGsを広げよう** ・ 学校行事「多文化共生フェスタ」の舞台発表を通して、SDGsについて、校内や家族に広げる。	・NHK「SDGsのうた」

成 果	参加型学習の手法を通して、少しずつ自分事にしていくことで、世界で起こっている問題には自分も関わっているという思いを多くの児童にもたせることができた。また、本校では、これまで SDGsに関する取り組みを行っていなかった。今回、舞台発表にすることで、全校に少し意識を広げられたことは成果といえる。
課 題	自分にできることを考えさせる時間や手立てを十分にとることができず、「関わっている」というところで、とまってしまった児童もいた。また、実際に行動するまで至らなかった児童が多い。実践期間だけでなく継続的に意識をもたせる工夫が必要であった。
備 考	前学期に、世界の魅力を知るために、各自で決めた国の観光地・祭りなどを調べている。また、出前授業（SDGs design SDGsカードゲーム）などで、SDGsの内容や達成のためにできることを学んでいる。

伝えよう！私たちのSDGs

17

所 属	愛知県　弥富市立　弥富北中学校	実践者	坂口　ひとみ
対 象	中学校３年生（７３名）	実践日	2021 年 12 月
実践教科	国語科	時間数	５時間

ねらい

・中学3年間のSDGsについての学習のまとめとして、「発信する側」としての自覚をもつ。
・周りの人にSDGs に関心をもってもらうための工夫を考える。

実践内容

回	プログラム	備 考
1	**◆“伝える”ための工夫を知ろう** ～実際の広告を分析する～ 【ブレーンストーミング】 ・ACジャパンの広告例を見て、“伝える”ためにどんな工夫がされているか考える ・それぞれ気付いたことを、観点ごとに整理する ・その工夫がどのような効果を生んでいるか考える	ACジャパン　広告 「ねぇ、ボクのぶんは…？
2	**◆工夫をするとどう“伝わる？”**～批評文を書こう～ 【回し読み】 ・1時間目の分析をもとに、批評文として文章にまとめる。 《批評文とは》対象とする事柄の特性や価値などについて、根拠をもって論じたり評価したりした文章のこと。》 ・互いに文章を読み合い、広告の工夫点とその効果について共有する.	
3 4	**◆3年間のまとめをしよう** ～“伝える”工夫を意識して～ ・3年間総合的な学習の時間などを通して学んできたSDGsに関することのなかから、特に自分が関心のある事柄を選ぶ ・それについて、特に伝えたいことの焦点を具体的にし、取り上げる内容を絞り込む ・自分が周りに伝えないことを「ポスター」形式で作成する	・3、4時は、タブレットを使用した調べ学習を行い、これまで学んだことの振り返りや整理を行った。 ・ポスターは、A4サイズ、色鉛筆やマーカーのみ使用してよいこととした。
5	**◆クラスメイトに発信しよう** 【ギャラリー方式】 ・できあがったポスターを並べ、互いに見て回ることで、“伝える”ための工夫をシェアする ・これまで、SDGSについて学んできたことや考えてきたことを、自分たちがどう「発信」していくかについて考える	

成 果

SDGsについて、学び、知り、考えるだけではなく、これからは自分たちが「発信する側」として、「どう発信するかが大切だ」ということに、意識を向けさせることができた。また、3年間のSDGsの学びを、国語科の授業の一環としてまとめたことも、新鮮に感じた生徒が多かったようだった。

課 題

今回はポスター形式での発信方法をとったが、他の発信方法までじっくり考えさせることができると、さらに目標にせまれたのではないかと思う。教科の特性も踏まえ、スピーチ・作文などの学習と国際理解教育の学びを結び付け、さらに「発信」することを意識させる方法を模索していきたい。

備 考

ACジャパン「広告」、光村図書「国語3」(教科書)「多角的に分析して書こう」

Live Together

18

所 属	愛知県一宮市立大和西小学校	実践者	柴田 英子
対 象	小学校５年生（７８名）	実践日	2021 年 11 月～1 月
実践教科	（例：総合的な学習の時間・学級活動）	時間数	６時間

ねらい

・日本の中にある世界との繋がりを知り、多様性、国際化に気づく。
・共生していくのに今の課題と必要なことを考える。
・みんなが過ごしやすいクラス（社会）を考え、クラス（社会）のためにできることを考え実行する。

実践内容

回	プログラム	備 考
1回	◇アイスブレイク「あいさつゲーム」 ・人それぞれあいさつの仕方を示したカードを取り、その通りに互いにあいさつをする。 ◇日本！？世界！？どっちだクイズ ・世界（パラグアイなど）の日系社会の写真と愛知、三重、静岡など研修で撮ったお店の写真を見て、日本か世界の写真かを考える。	資料1 あいさつカード 資料2 写真
2回	◇自分の中にある偏見発見！！【本時】 ・親の気持ち、この気持ちを考える。【ロールプレイ】 例1子ども：お母さん、学校来ないで 母：何でそんなこと言うの？ 子ども：だって金髪だし、日本語じゃないし。目立つ・・・・・。 母：そう言われても日本語分からないし、見た目は変えられない・・。 ・感じたことを共有 ◇「来ないで」となってしまった原因はどこに？【ブレスト】	資料3 ロールプレイの台詞
3回	◇女の子の今の状態が続いたらどうなる？【派生図】	
4回	◇解決策を考えよう！ ・女の子の現状を解決するために何ができるかをできるだけ多く書き出す。【ブレスト】 ・ギャラリー方式で他のグループの意見を見て回り「なるほど」と思った意見に☆をつける。 ◇「COLORS」などの団体の活動を紹介する。	
5回	◇パラグアイに住む日本人の方にインタビューをする。【zoom】 実際にパラグアイに暮らす日本人の気持ちを知ることで、少数派の気持ちをより身近なものとして感じさせる。	資料4 団体の活動内容
6回	◇理想のクラスってなぁに？ ・何ができていると理想のクラスかを共有する。【ブレスト】 ・自分がクラスのためにできることをカードに書き、実行する。 ・一か月後の自分に向けて手紙を書く。	

成 果

自分がクラスのためにできることを考える際にどの児童も自分の意見を出すことができていた。また、普段の児童の様子を前と後で比較すると、相手を思いやる行動がどのようなものか具体的に理解し、助け合う様子が多く見られるようになった。

課 題

今回実践直後に書かせた手紙を3学期に入ってから児童に返却をした。手紙には、人に優しくできていますか、笑顔にできていますかなどが書かれており、相手を思う気持ちが感じられたが、一部の児童は、何を書いてよいか分からず困っていたので時間を十分確保するべきだった。

備 考

「違い」―思いがけないメッセージ

19

所 属	愛知淑徳大学　初年次教育部門	実践者	鈴木　崇夫
対 象	大学生（15 名）	実践日	2021 年 10 月～2022 年 1 月
実践教科	（探究・違いを共に生きる）	時間数	１８時間
ねらい	・大学理念である「違いを共に生きる」を当事者として主体的に理解する ・この世界における“違い”とは何かを自己経験に照らして内省し、それを言葉にして可視化する ・他者の意見（経験）に触れ、自分と照らし合わせながら、“共に生きる”を考える		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	✧　理念とは何か ・理論と理念は似ているが、どう違うのか。導入としての説明。 ・大学理念「違いを共に生きる」の基本のキを知る ✧　「違い」とは何か。【派生図】 ・参加型活動に慣れ「主体的に学ぶ」の基礎づくり ・この世界における“違い”とは何かを経験に照らして内省し言葉にする。	・大学ホームページ ・大学案内（受験生向け冊子）
2	✧　6つの社会課題と SDGs【因果関係図】 ・SDGs の基礎を学び合う ・「公共哲学」「多文化共生」「地域づくり」「子育て支援」「労働教育」「防災」の6つテーマ背景にある社会課題と SDGs を重ねて考える。	・SDGs 資料（NPO 法人 JANIC）
3	✧　日常生活に潜むステレオタイプ	
4	✧　病院を通して考える社会権	
5	✧　災害（避難所）を想定して考える合意形成	
6	✧　ルーツを見つめて考えるアイデンティティ	
7～10	✧　グループプロジェクトワーク ・グループごとに関心事のあるテーマを調べまとめる	
11	✧　ポスター発表（4グループ） （1）多文化共生　（2）最強避難所 （3）キラキラネームとシワシワネーム　（4）SDGs	
12	✧　「違いを共に生きる」とは？ ・わたしたちの定義「違いを共に生きる」 ・「違いを共に生きる」社会に向かうために【力の分析】	

成 果	・毎回の参加型ワークを通して「違いを共に生きる」の理解や解釈に変化があった（15 人中 14 人） ・“違い”には大きいものだけでなく小さいものがある、“違い”は絶対に認めなければならないものではない、“違い”はみんな一つ以上持っている、など自分事として深く考えることができた様子が窺える
課 題	・「知る→気づく→考える」については、毎回のワークをとおして学びを創出することができたように感じるが、「気づく→考える→行動する」の“行動する”まではほとんど到達できていない。今後は、この授業を通して学んだことを自分事として常に意識し、さらなる学びや日常行動につながっていくことを期待する。
備 考	本実践は、実施内容欄に下線を付した1回、2回、12回を中心に位置づけて行った。

テーマ ： 平和、共生

Beautiful World ～ちがいが美しくあるために～

20

所 属	三重県津市立朝陽中学校	実践者	寺田 早希
対 象	中学校２年生（１８２名）	実践日	2022 年 1 月
実践教科	英語	時間数	４時間
ねらい	・世界の国々について知り、ちがいがあることのすばらしさに気づく。 ・ちがいがあることを楽しみながら、各々の良さを見付けられる人になる。 ・世界にあってはいけないちがいについて考え、今の私たちができることを確認する。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	＜広い世界と出逢おう＞ ①アイスブレイク 「国旗 クイズ」 ②今日の注目する国、3ヶ国を紹介 バングラデシュ、ブラジル、ガーナ ③グローバルボックスを通し、文化理解を深める。 興味をもったものについて調べ、英文をつくり提出する。	＜インタビュー＞ ・JICA 三重県デスク 国際協力推進員 アモア 万里奈 さん
2	＜ちがいに気づこう＞ ①英文で、3人のガーナにいる子どもの1日を読む。 日本語で、写真とともにガーナにいる子どもの1日を確認する。 ②学習用アプリ上で、「あってもいいちがい」と「あってはいけないちがい」を班ごとに書き出す。 【対比表】 ③他のグループと、成果物を共有する。	・JICA 協力隊 （青年海外協力隊） 平成 25-1 次隊 ガーナ （獣医・衛生） 杉野 吉治 さん
3	＜今の私たちができることを考えよう＞ ①ガーナにとっての「あってはいけないちがい」の原因を書き出す。 【因果関係図】 ②SDGsの観点を交え、今の私たちにできることを考え、調べる。	・ガーナ ブラジル バングラデシュの グローバルボックス （JICA 中部さん より貸与）
4	＜今の自分たちができることを考え、行動につなげよう＞ ①SDGsの観点を交え、今の私たちにできることを考え、調べる。 ②JICA（青年）海外協力隊としてガーナに2年間滞在経験をもち、獣医師・開発コンサルタント(JICA 専門家）である杉野 吉治さんのお話を聴く。 （寺田によるインタビュービデオを視聴） ③今の自分たちができることを言葉にまとめる。	・タブレット端末 （学習用アプリ・ ロイロノート）

成 果	3ヶ国のグローバルボックスを利用することで、今までとは少しちがった視点で世界に関心をもたせることができた。世界を“正しく知る”こと、SDGsについて学ぶこと、JICA 専門家の方と出逢うことを通じ、生徒が世界への興味を深めるきっかけづくりができた。授業時間外でも、関心をもった生徒が世界の国々について調べていたり、家族と話をすることで、考えを深めたりしている様子があり、今回の学習によって子どもたちの視野を広げることができた。
課 題	今回の授業では、今の自分たちができることを言葉にまとめること（行動宣言）はできたが、それを継続させるための手立ては具体性に欠けた。今後折りを見て、世界で起きていることへの興味を持ち続けること、具体策にも触れていきたいと思う。
備 考	第3時以降、三重県まん延防止等重点措置適用のため、グループワークが原則禁止となった。そのため、学習用アプリを使用し、できる限り、班やクラスでの交流をオンライン上で行った。

私たちの未来を守るお買い物を提案しよう

21

所 属	愛知県立東海商業高等学校	実践者	戸田　和佳代
対 象	高校生 10 名	実践日	2021 年 10 月
実践教科	課題研究	時間数	15 時間
ねらい	・SDGs を通して、現在私たちが抱えている問題について知り、自分たちの普段の行動（買い物）とも関りがあることに気づく ・自分たちの望む未来を達成するために、売場づくりを通してできることを考え、提案する		

実践内容

回	プログラム	備 考
1～7	◆SDGs って何？ 気になる GOAL カードを選び、分担して読み取る GOAL カードを分類しよう【分類】 日本と途上国の優先課題ランキング【ランキング】個人→グループ ランキング上位課題について、現在なされている取り組みを調べる【リストアップ】 自分たちの普段の生活に関係ありそうなものに印をつける	GOAL カード 模造紙、ペン タブレット端末 ユニセフ HP Save the children HP
8	◆おいしいコーヒーはどこからくるの？	
9	◆気候変動クイズ	パワーポイント
10	◆理想の 10 年後 10 年後社会がどうなっていたらいいか付箋に書き出し、分類する【KJ 法】	付箋、ペン 模造紙
11, 12	◆私たちにできること 理想の未来を実現するため、何が必要か、何ができるか考える【因果関係図】 その中から、売り場づくりをとおして実践できそうなものに印をつける	模造紙 ペン
13～15	◆未来を守る売り場を提案しよう 売り場テーマを決める【リストアップ】 どんな商品があるのか、どのように売るか、SDGs の GOAL では何にあてはまるか考える 売り場提案準備	コピー用紙 ペン

成 果	今、自分たちが置かれている環境、これからの環境について知り、危機感をもつことができた。遠い国で起こっていると思っていたことでも身近な問題であると捉えなおすことができた。
課 題	最終的な目的が、「お客様に提案すること」にあったので、商品を通して自分の考えをアウトプットするところに難しさを感じた。また、イオン様の商材との兼ね合いもあり、思い通りにいかないところもあった。
備 考	愛知県が実施している「地域協働ビジネススキルアップ事業」の一環として、イオンコンパス様、イオンスタイル常滑様の協力を得て生徒が売り場展開を考案する講座です。

日本の常識は、フィジーの非常識

22

所 属	オルタナティブ・スクールあいち惟の森	実践者	長瀬　智寛
対 象	小学校 1 年生～小学校 3 年生（8 名）	実践日	2021 年 11 月 18 日
実践教科	テーマスキル（異文化理解）	時間数	3 時間
ねらい	・地図に触れ、世界の国の名前や文化を楽しみながら知る ・日本の文化とフィジーの文化を比べて、差異に触れる		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	①ねらい共有 ②チームで協力　国名探しゲーム【アイスブレイク】 ４人１グループに分かれる。世界地図を各グループに配り、地図の中からいくつかの国を探す。 ③フィジーってどんな国？【導入】 オセアニア地域に関するディズニー映画「モアナと伝説の海」を観ながら、フィジーを紹介する。 ④日本と海外（フィジー）の違いって何だろう？ 【ブレインストーミング・カード式整理法】 日本と海外の違いを付箋に出来るだけ多く書き出す。付箋を前に貼り、多様な意見を整理整頓する。	・世界地図（2枚） ・映画「モアナと伝説の海」DVD ・付箋 ・ペン（1人１本）
2	①フィジーのあるあるクイズ【対比】 書き出した付箋の中から選んだ違いを選び、関連するクイズに挑戦する。また写真・動画を見ながら解説する。同時に日本と比較する。 ②口笛チャレンジ フィジーの常識である口笛に挑戦する。	・自作クイズ ・写真 ・動画
3	①国旗選挙をしてみよう【シミュレーション】 フィジーであった新しい国旗を選ぶ選挙を紹介する ②新しい国旗を考えてみよう 新しいフィジー国旗をデザインしよう ③全体共有 ④振り返り	・A4用紙（人数分） ・ペン（1人１本）

成 果	アニメーションや写真、動画を見てイメージする。クイズで考える。口笛や国旗創作の体験活動で実感する。全体を通して対象の子どもたちが、楽しみながら実感、納得することを重視した。今生活している日本が全てではなく、フィジーにはフィジーの当たり前があることを楽しみながら知ることができた。授業で取り扱ったことを受けて、家庭で映画を鑑賞したとの声も聞かれた。
課 題	多様な当たり前を知らないと、自分の当たり前に気づくことが難しい。対象者にどのように多様さをインプットする方法に改善の余地がある。国旗のデザインをするときに、描くことに夢中になってしまい、お絵描きの要素が強くなりすぎてしまう。
備 考	テーマへの導入したディズニー映画が子どもたちに認知されていたため、スムーズに内容に入っていけた。アニメーションと現実世界を見比べることで、画のイメージがしやすい。日本とフィジーの違いで最も興味を惹いたのは、移動式遊園地。

Beyond SDGs for YOUR Olympic in 2036

23

所 属	静岡県立 吉原 高等学校	実践者	中田 貴之
対 象	高校１年生（26 名）	実践日	2021 年 ９月～2022 年１月
実践教科	国際科専門科目「異文化理解」（１単位）	時間数	９時間
ねらい	・東京オリパラを知り（現在未来の課題）未来のオリンピックを創造する（未知なる課題） ・「当たり前」が「当たり前じゃない」こと、「当たり前」の有難さを考える（感謝の気持ち） ・自分の興味関心に気づく（自分理解）		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	東京オリパラやオリンピック自体の理解を確認 動画や画像を通して、東京オリンピックについて背景知識の共有	フォトランゲージ ギャラリー方式
2･3	東京オリパラの取り組みの紹介とブレインストーミングの練習、世界が直面している問題について背景知識の共有、現実問題の理解 地元が抱える課題をテーマにブレストの練習 ※参考スライド：東京オリパラ競技大会組織委	ブレスト･KJ 法･ギャラリー方式･
4	前回のブレストの練習から世界が抱える問題についてブレスト 東京オリパラの取り組みから SDGsの導入	ブレスト･KJ 法･ギャラリー方式
5	SDGsについての背景知識の確認、東京オリパラの取り組みスライドから SDGsと東京オリパラの関係について意見の共有 ※参考スライド：東京オリパラ競技大会組織委　　資料：WFP Hunger Map	
6	SDGsの動画（jicaHP より）視聴後、SDGs17 の目標の分類･理解 SDGsカードを 1 セットずつ配布し、動画から考えられる SDGs目標を考えた 参考資料：SDGs目標カード（jicaHP より）	ギャラリー方式 グループ発表
7	SDGs目標について各自の興味ある目標を共有 ブレストやランキングは個人で行い、グループで共有後、ギャラリー方式で共有した　参考資料：『共につくる私たちの未来』	ブレスト･ランキング･ギャラリー方式
8	2030 年以降（SDGs後）の「理想の世界」を共有（グループ→個人） グループでブレスト･力の分析を行い、定期テストで自由に論じさせた	ブレスト･ギャラリー方式･力の分析
9	1 回～8回までの活動を踏まえて、『2036 年のオリパラ』について発表 大学の教授や県外からの参観者もおり、まとめの発表としては形が作れた。	ポスターセッション

成 果	構想から実践、振り返りを通してこの一年で指導の引き出しが大いに増え、学年部の先生方にも共有し広められたことは私自身の成果だった。参加型学習を通じて、生徒たちは自分たちで考え、頭の中で人の意見を融合させる作業は「疲れた」と言っていた。頭を使い、他者理解･自己理解へと一歩前進できたと思う。
課 題	参加型学習を毎時間取り入れたが、想像以上に時間がかかり、やりたかったことの半分もできなかった。やってみないと分からない生徒の実態に合わせることの難しさがあった。実践する時間を効率よく使い、あまり考えすぎず、その日のメインは絞って考えることが自分には必要だと感じた。
備 考	私は国際科長という役職だが、学校の看板である国際科の継続した特殊性をだした課題研究を目指して試行錯誤していた。今回の研修や自身の実践を学校の科として継続性をもたせていきたい。他の教員にどのように繋げていくかが別の意味での課題である。

テーマ ： 多様性理解、福祉

居心地のよい学級づくり

24

所 属	名古屋市立名東小学校	実践者	中谷　あゆみ
対 象	小学校 3 年生（33 名）	実践日	2021 年 9 月～12 月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	１７時間
ねらい	・異なる人同士が共存するために大切なことは何かを考える。 ・居心地のよい学級づくりのために自分ができることを考える。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1～2	◆ **当たり前って何？** ① 4つの項目を自己紹介する。 ② 難聴の児童、手足が不自由な児童、目が不自由な児童の紹介文を読み、その児童になりきり紹介する。【ロールプレイ】 ③ 学級での一日（授業、休み時間、給食等）を難聴、手足が不自由、弱視の児童になり困難・困難でない・分からないの3つの視点で考えることで、自分にとっての当たり前と他の人にとっての当たり前を考える。【対比表】	・ A4用紙 ・ 教材1:「難聴、手足が不自由、目が不自由な児童の紹介文」 ・ 教材2:「学級での一日カード」
3～5	◆ **自分にとって、みんなにとっての居心地のよさとは？** ① 自分たちにとって居心地のよい学級とはどんな学級かを考える。【ブレーンストーミング】 ② ハード面（施設環境面）とソフト面（人との関係面）に分けて考える。【カード式整理法】 ③ 難聴、手足が不自由、目が不自由な人のインタビュー映像を見ながら①、②と同じことを行う。【ブレーンストーミング・カード式整理法】 ④ ①と③を比べ、みんなにとって居心地のよい学級にするために大切なことは何かを考える。	・ 模造紙 ・ 付箋 ・ マジックセット
6～15	◆ **身近な人々について知ろう！** ① 難聴、手足の不自由、目の不自由な人のインタビュー映像を見て、日常生活の送り方や思いを知る。 ② 難聴、手足が不自由、目が不自由な状況を体験する。 ③ 難聴、手足が不自由、目が不自由な児童がいるグループで学級での日常生活の一コマを劇にして発表する。【ロールプレイ】 ④ 難聴、手足の不自由な人と実際に触れ合う。	・ アイマスク ・ ティッシュ ・ ヘッドフォン ・ 車いす ・ A4用紙
16～17	◆ **自分にできることを考えよう！** ① みんなが居心地がよいと感じる学級づくりのために、自分ができることを書き出す。【ブレーンストーミング】 ② 「居心地のよい学級づくりすごろく」を個人でつくる。	・ マジックセット ・ 模造紙 ・ すごろく用紙

成 果	3学期、自分たちで作った「すごろく」を使い、居心地のよい学級づくりに取り組んでいる。その成果として、身近な人々に興味をもち、友達との違いを理解したり、友達のよいとこころを探したりしている様子が見られるようになった。また、対立が起きたとき、自分たちで話し合いを行って解決しようとする姿も見られるようになってきた。
課 題	新型コロナ感染症の影響で難聴、手足の不自由、目の不自由な人との触れ合いやインタビュー、体験が延期されたことで児童の意欲を持続させることが困難な場面があった。意欲を持続させ、継続的に実践が行えるように考える必要があった。
備 考	難聴の人との触れ合いは、体育館で3年生（165名）と行い、手足の不自由な人との触れ合いは、体育館で2学級（66名）と行った。

テーマ ：多文化共生、環境、SDGs

みんなで創るHappy Town～持続可能な多文化共生のまち～

25

所 属	愛知県東郷町立高嶺小学校	**実践者**	**野々山　尚志**
対 象	小学校６年生（７９名）	**実践日**	2022 年 1 月～2 月
実践教科	総合的な学習の時間・理科	**時間数**	６時間
ねらい	・日本と外国とのつながりを知り、課題に気付くことを通して、多文化共生の意識を育む。 ・SDGs取組事例から課題解決のヒントを学び、持続可能な社会への参画意識を育む。 ・誰もが幸せに暮らせる私たちのまちを創るために、自分にできることを実行する力を育む。		

実践内容

回	プログラム	備 考
0 （理科等）	**SDGsについて知る** ◯年度当初に理科でSDGsについて学習し、年間を通して総合的な学習の時間・社会科・特別活動でSDGsに関わる学習や活動を行った。	
1 （総合）	**「日本と外国のつながりを知ろう」** ◯グループで日本（愛知県知立市・刈谷市・三重県津市）とパラグアイの写真を見て何が映っているかを自由に話し合った後に発問し、写真を日本と外国のものに分ける。【フォトランゲージ・クイズ】 ◯数名の児童にそれぞれの写真の解説書を読んでもらい、日本人の多くが外国に住んでいること、外国人の多くが日本に住んでいることを知る。 ◯ゴマを通して、日本とパラグアイのつながりについて知る。	・2021 教師国内研修、2017 教師海外研修で撮影した写真 ・写真解説書 ・パラグアイ紹介スライド
2 （総合）	**「外国人が日本で暮らす上での課題に気付く」** ◯外国人が日本で暮らす時にどんなことが困るかをグループで考え、箇条書きでたくさん書き出す。【ブレーンストーミング】 ◯各グループが書いた成果物を見て回る。【ギャラリー方式】 ◯インタビューのスライドと動画を見る。 ◯外国人が日本で暮らす際、安心できる・助かるためにできることをグループで書き出す。【ブレーンストーミング・回し読み】	・日本に住む外国人と外国に帰国した元同級生のインタビュースライド・動画
3・4 （理科）	**「持続可能なまちづくりのヒントを学ぼう」** ◯多文化共生に関わる現場で活動する人たちの取組、SDGs に取り組む企業の事例資料をグループで分担して読む。 ◯各自が読んだ資料から気になったこと、考えたことを伝え合う。【】 ◯持続可能なまちのアイデアを考えて、言葉やイラストで書く。 ◯タブレット端末でシェアする 【ギャラリー方式】	・2021 教師国内研修「ハッレ倭」の資料 ・SDGs スタートブック 2021 年度版 https://sdgs.edutown.jp/ の SDGs 取組事例の動画・資料
5・6 （理）	**「みんなが幸せに暮らせる持続可能なまちを描く」** ◯外国人も高齢者も障がいのある人も、みんなが幸せに暮らせる持続可能な私たちのまちをグループで話し合い、模造紙に描く。例：駅、役場、店、学校、畑や工場等、発電所、下水処理場等 【イメージ図・ギャラリー方式】 ◯各グループの成果物について発表する。【プレゼンテーション】 ◯学習をふり返り、自分にできることを考え、行動宣言をする。	

成 果	・SDGs について普段の生活から意識して行動できる児童が増えた。 ・自分が暮らすまちの未来の姿を描くことができ、自分にできることを家族と話し合う児童が増えた。 ・教科横断型の国際理解教育・開発教育のモデルを示すことができた。
課 題	・元々外国籍の児童が多い学校であり、言葉が通じなくても友達になったり、困っていることがあると助け合ったりできる優しい児童が多かった。そこで、周りのことだけでなく、社会的な課題についても考える機会をつくりたかったが、そのような機会をもつことができていないため、卒業までに行いたいと考えている。
備 考	・この他、総合的な学習の時間では、東郷町のことを調べたり、町の特色であるボート体験をしたり、役場の人と会議を開いたりして、自分たちのまちのことを知り、まちの未来について考えたりしている。

SDGs 未来のために、私たちができること

26

所 属	愛知県日進市立日進中学校	実践者	橋爪　綾香
対 象	中学校１年生（273 人）	実践日	2021 年 11 月～12 月
実践教科	道徳・総合的な学習の時間	時間数	４時間

ねらい

- 参加型学習を通して、自分の考えを発信したり、仲間とより良い意見を考えたりする力を養うことができる。
- 様々な角度から世界の様子を振り返り、それぞれの因果関係について考えることができる。
- SDGsについて学び、自分たちにできることを考えることができる。

実践内容

回	プログラム	備 考
1	**『難民問題について知る』** ・道徳教材『歴史を変えた決断』を通して、難民問題と緒方貞子さんの功績について知る。	・道徳の教科書
2	**『どうなる地球！？地球の未来を考える』** ＊ 授業のルール作り ・ 人の意見は受け入れよう ・ 誰かが発言をしたら、反応をしよう　など ① アイスブレーク 「身の回りの“海外との繋がり”を見つけよう」 ・ 班ごとに、ホワイトボードに思いついたものを書いていく。 ② 地球上にある問題を書き出す。【KJ 法】 ③ このままだと地球はどうなるのかを書き出す。【派生図】	・ホワイトボード ・模造紙（半分×２） ・ペン ・付箋
3	**『知ってる？SDGs』** ① アイスブレーク「グローバルビンゴ」 ② 地球上にある問題を、SDGsの17の目標に当てはめる。 （資料：日本ユニセフ協会「SDGs Club」） ③ SDGsに関する、企業の取り組みを学ぶ。（資料：Edu Town SDGs）	・ビンゴ用紙 ・タブレット ・日本ユニセフ協会「SDGs Club」 ・Edu Town SDGs
4	**『どうする君たち！自分にできることを考えよう』** ① アイスブレーク「3つのホント、1つのウソ」 ② SDGs達成に向けた「行動宣言」を作る。【できることビンゴ】 ・ SDGsの中で特に大切にしたい目標を一つ決め、それを達成するための手立てを「一人でできること」「学級・学校のみんなでできること」に分けて考える。	・「行動宣言」用紙

成 果

- 授業のはじめにルールを作ったことで、自分の意見を言いやすい雰囲気ができ、積極的に学習することができた。
- 他教科の学習内容と SDGsを結び付けて考えることができた。
- 身近な「もったいない」をなくそうという気持ちを高めることができた。

課 題

- 時間配分がうまくいかず、子どもの「もっと知りたい・考えたい」に答えることができなかった。
- 生徒の関心が一時的であり、継続させることが難しかった。
- 来年・再来年度は現地の青年海外協力隊員と繋ぎ、交流授業を行えると良い。

備 考

- 8クラスそれぞれで担任がアレンジしながら授業を行った。模造紙ではなくタブレットを使用した学級もあったが、タブレットに書き込む際は個人作業になってしまうため、話し合いが活発にならなかったとのこと。

テーマ ： SDGs、ICT、主体性

いつも ちょっと 使って I C T × S D G s

27

所 属	愛知県愛西市立佐屋中学校	実践者	濱田　蒼太
対 象	中学校１年生（３５名）	実践日	２０２１年 ４月～１０月
実践教科	総合的な学習の時間・学校行事	時間数	１０時間

ねらい

・SDGsを知り、自分の行動や社会の動きがSDGsにつながっていることに気付く
・SDGsをテーマに、自分たちにできることを考え、文化祭の出し物をデザインする
・SDGs～スペシャルダーツゲームズ～を通して、自分にできることを宣言する

実践内容

回	プログラム	備 考
	SDGsとの出会い　01	
1 2 3	○ 15年前の世界と未来（2030年）の世界を考えよう ○ SDGsクイズを通して17の目標を詳しく知ろう ○ フードロスとSDGsのつながりを考えよう	先生・ファシリテーターのためのSDGsアクティビティ集
	ニュース×SDGs　02	
4 5	○ 読売新聞教育ネットワークの読売ワークシート通信に取り組もう ○ 気になるニュースを選び、SDGsとのつながりを考えよう ① 学習用タブレットを使用して、ネットニュース記事をスクリーンショット ② アプリ「ロイロノート」を使用して、スクリーンショット画像の上に、つながっていると思うSDGsアイコンをドラッグ＆ドロップ（何個でもよい） ③ SDGsアイコンの大きさを調整して重みづけ	読売ワークシート通信
	文化祭×SDGs　03	
6～8 9～10	○ SDGsをテーマとした出し物をデザインしよう ○ ダーツに思いをのせて！SDGs～スペシャルダーツゲームズ～！ ① 17の目標を的にして、ダーツを投げる ② 当たった番号について、自分の宣言をカードに書き、パネルに掲示 ※ アプリ「ロイロノート」のシンキングツール（クラゲチャート）にまとめたヒントを教室に展示	

成 果

「フードロス」「ジェンダー」「持続可能」のようなキーワードを生徒が使うようになってきた。生活の中に17の目標を達成するための意識が浸透してきていることを実感している。SDGsのためにアクションを起こした文化祭「SDGs～スペシャルダーツゲームズ～」では、他クラスの人が宣言を書きづらいのではないかという話があがった。仲間とともに課題に気付き、考え、ICTを用いてヒントの作成に取り組むことができた。

適切なタイミングと手法でICTを利用したことが、生徒の主体性を引き出し、「知る・考える・気づく」を「気付く・考える・行動する」へとつなげた。また、自分にできることの宣言は、身近な生活の中から書くことができていた。

課 題

今後の展望は、世界に目を向けていくこと。世界で起こっていることが自分とは関係ないと思うのではなく、遠い国で起きた出来事に思いを馳せられる人になるためのプログラムづくりが必要だと感じている。世界と自分たちにどんなつながりがあるのかを学び、自分の行動が世界に与える良い影響や悪い影響に気付く。そして、世界とより良いつながりを築き、SDGs を達成するぞという心構えをもち、アクションを起こすスキルを身に付けさせたいと考えている。

備 考

行事、特別活動と連携して、よりグローバルな広い視野をもち、SDGsのために行動していく開発教育・国際理解教育を進めていきたい。

「SDGs」って何だろう？

28

所 属	愛知県名古屋市立城西小学校	実践者	平手　良樹
対 象	小学校 3 年生（33 名）	実践日	2021 年 11 月～2022 年 2 月
実践教科	（総合的な学習の時間・社会科）	時間数	7 時間

ねらい

・世界の国の食や文化を知る。
・SDGsについて知り、身近なところにもSDGsの目標があることに気付く。
・学校や家でできることがないかを考え、具体的な行動を考える。

実践内容

回	プログラム	備 考
1	● スーパーマーケットについて調べよう 【フィールドワーク】→【動画視聴】 スーパーマーケットには外国から輸入している食材がたくさんあることを知る。輸入に頼る一方で、たくさんの食べ物が捨てられている現実を知る。	スーパーマーケット見学→中止
2	● 他の国の食や文化を知ろう（南米・ボリビア）【クイズ】 ・ボリビアクイズを行い、食や文化について、知る。 	元青年海外協力隊員の話
3～6	● SDGsについて知ろう【グループワーク】 ・「なごやSDGs街」を見て、SDGsの 17 個の目標を知る。 ・SDGsすごろくやSDGsかるたを使って、目標に近づくための取り組みについて具体的に知る。 ・SDGsかるたに書いてある取り組みの中で、特に大事だと思うこと、自分たちにできそうなこと整理する。【カード式整理法】【ランキング】	Web「なごやSDGs街」 SDGsすごろく SDGsかるた タブレット
7	● わたしの行動宣言【行動計画作り】 ・SDGs達成のために、これから自分が取り組むことをまとめる。	タブレット

成 果

SDGsという言葉さえよく知らなかった子どもたちが、クイズやすごろく、かるたなどの遊びを通して楽しく学ぶことができた。また、今まで意識しなかったSDGsのマークや、図書室にあるSDGsの本を手に取るようになった。これらのことからも、SDGsへの興味や感心をもたせることができたと考える。

課 題

行動計画を立てるだけでなく、それが実行できたかどうかの振り返りをする場が必要だと感じた。今回は、SDGsの 17 個の目標を、表層的に学習したが、1 つ 1 つの目標を深掘りし、深層を探究することで、年間を通して継続的に学ぶことができると思う。

備 考

なごやSDGs街　https://www.n-kd.net/sdgs/

テーマ ： 環境、共生

世界を知ろう！～これって当たり前？～

29

所 属	愛知県名古屋市立鳥羽見小学校	実践者	堀 葉月
対 象	小学校２年生（２４名）	実践日	2021 年 ６月～１２月
実践教科	（特別活動）	時間数	９時間
ねらい	・世界の国について知り、興味をもつ。 ・水の大切さに気が付くことを通して、自分たちの暮らしが当たり前ではないことを知る。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	〈世界を知ろう〉 世界について知り、相違点もあるが、共通点もあり、遠く自分には関係ないと思っていた世界の国が、意外と身近であることを捉える。 ① 日本と世界の繋がりを知る。 身近な物（野菜、フルーツ、衣類等）の原産国を調べ、白地図に分類し外国から来ている物が多いことに気が付き、世界と日本には繋がりがあることを知る。	世界地図 野菜やフルーツ等のイラスト
2～4	② 世界の国（ベトナム、韓国、アメリカ）と日本の共通点、相違点を見つける。 ・日本と世界の国の学校、給食、道路などの写真を見比べる。 ・共通点（日本と一緒）は赤い丸、相違点（日本と違う）は青い丸を付ける。	GoogleEarth
5 6	〈世界を知ろう！～これって当たり前？～〉 世界の子どもたちの暮らしを詳しく知って、水問題について考える。 ① 世界の子どもの一日の生活を知る。（アメリカ、韓国、ベトナム） ② ルワンダのダニエリくんの一日を詳しく知る。 （1） 水汲みをしている写真を見て、何をしているか想像する。 【フォトランゲージ】 （2） 水運び体験をする。 ・ペットボトルを手提げにいれ、教室を一周する。【体験的活動】 （3） ルワンダのダニエリくんの動画を見て、生活を知る。 ・水を大切にしていることに気が付き、きれいな水が使えることは当たり前ではないことに気が付く。	「世界のともだち」（韓国・アメリカ・ベトナム編）偕成社 J「ICA-Net ライブラリ４．ルワンダ村落部の子どもの一日」
7・8	③ 「もしも水がなくなったら・・・」どうなるか考える。 【派生図】【ギャラリー方式】 ④日頃の手洗い場の様子を動画に撮り、見て水の使い方を振り返る。 行動宣言を作り、1週間実行する。	
9	④ 振り返りをする。	

成 果	オリンピックやパラリンピックの影響もあり、世界の国について興味をもって学んでいる児童が多く、低学年らしい着眼点で日本と世界の繋がりを見つけることができていた。また、様々な暮らしを学び、国によって「当たり前」が異なることを肯定的に受け入れられていた。
課 題	水問題を考えることで世界にはいろいろな当たり前があることに繋げたかったが、展開が強引だった。自分たちの暮らし以外にも様々な暮らしがあることを学んだ後、どのような流れで自分事に置き換えればいいのかが難しかった。
備 考	

YES WE CAN～今日から私は～

30

所 属	愛知県名古屋市立御器所小学校	実践者	松田　翔伍
対 象	小学校５年生（９３名）	実践日	2022 年　１月～２月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	９時間

ねらい

・ ボリビアの文化のよさや課題、また、課題解決に関わる日本人の思いを考えることを通して、国際協力の意義を理解する。
・ 日本と世界のつながりに気付き、自分にできる身近なことを見付け、行動につなげる。

実践内容

回	プログラム	備 考
1	**ボリビアについて知ろう** ・ボリビアクイズを行い、関心を高める。	『世界の国を知る世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来ボリビア共和国』
2	**ボリビアの課題を知ろう** ・3枚の写真を見て、カメラマンは何を伝えたかったのか考える。【フォトランゲージ】	
3	・もしも課題がそのままだったらと、課題が及ぼす影響を考える。【派生図】 ・課題解決の方法を自分なりに想像する。	
4	**課題を解決しようとしている人々がいることを知ろう** ・課題解決に関する写真を見て、どんな人のどんな思いが読み取れるか考える。【ストーリーづくり】	NPO 法人 DIFAR の活動報告書から得た資料
5	**NPO 法人 DIFAR の活動や関わる人々の思いを知ろう** ・ボリビアの環境問題の解決に関わる NPO 法人 DIFAR の Web ページをもとに、どのようにして課題解決に取り組んでいるか調べる。 ・代表の瀧本里子さんに質問したいことを考える。	
6 7	**地球の裏側にいる瀧本さんに質問してみよう** ・Web 会議アプリ「Zoom」を使用し、ボリビアに住む瀧本さんたちと繋がって、これまでの活動内容とこれからの活動内容「掃除プロジェクト」についてのお話を聴く。代表者が質問をする。	
8	**掃除プロジェクトに自分たちも関わってみよう** ・日本の掃除の文化をボリビアに広めるために、「自分たちにできること」を考えて付せん紙に書こう。	
9	・「自分たちにできること」を整理しよう。【二次元軸】	

成 果

・児童はボリビアという国を通して、世界や日本とのつながりや文化の違いに関心をもつことができた。
・課題解決の当事者に Zoom を使って直接話を聞くことができたため、ボリビアの課題を自分事として捉えることができ、実際に日本の掃除の紹介ビデオを作成して国際協力に参加することができた。

課 題

・ボリビアの町にはゴミがポイ捨てされているというマイナスイメージが強く印象に残っている児童もいた。ボリビアが自然豊かな国であるというよさに気付かせて、肯定的にボリビアと出合わせたけれど、それだけでは不十分だと感じた。プログラムの終盤に、もう一度日本にある課題に着目させるとよいと思う。

備 考

・本実践は、JICA 中部 2021 年度教師国内研修（多文化共生）のフィールドワークで出会った人々を教材化して実現することができた。

発見！体験！地球市民キャンパス「水」から世界を覗いてみよう！

31

所 属	名古屋国際センター　交流協力課	実践者	松田　レイナ
対 象	中・高・大学生、教育関係者、一般　17 名　6 グループ	実践日	2021 年 12 月 19 日（日）
実践教科	NIC 地球市民教室「チャレンジコース」	時間数	3 時間 30 分
ねらい	・水という1つの事象が様々な問題とつながっていることに気付く ・参加者が自分の水の使い方や、水に対する意識に気付く ・参加者が水を通して地球の現状/課題を知り、持続可能な社会のためにできる行動を考える		

実践内容	時間	プログラム	備 考
		1. 「昨日1日を振り返ってみよう！」 ★参加者が自分の「水」の使い方や使用量に気付く ・昨日1日の行動を時間軸で書き出し、水にまつわることを〇で囲う ・昨日1日の水使用量を回数×使用量で算出する ・気付いたことをグループ内でシェアする	※NIC 地球市民教室外国人講師（講師1名、見学者 25 名）との協働で実施。 ワークシート
		2. 「世界と日本の水事情」 ★世界で使える水の量や、水がどこからきてどこへ向かうのかを知る ・水の循環、使える水の割合、バーチャルウォーター等	ワークシート
		3. 「水から世界を覗いてみよう」 ★水から派生する地域ごとの様々な現状や課題に気付く フランス→ブルキナファソ【フォトランゲージ】→フィリピン→ブラジル ・話を聞きながら①そこに住む人の心配事②その要因 を書き取る	ワークシート
		4. 「学んでつなげる世界の課題」【派生図】 ★「水」という１つの事象と地球の様々な課題とのつながりに気付き、何ができるかを考える ・「水に関する問題」をテーマに、関連することを B 紙に書き出す ・課題解決に向けて必要なことを考える ・各グループの作成物の鑑賞後、グループごとに気付きを発表する	B 紙、付箋、ペン NIC 地球市民教室の外国人講師（見学者 25 名）への質問可
		5. 「地球の課題と SDGs」 ★日常と SDGs のつながりに気付く ・SDGs 基礎情報 ・派生図の内容と SDGs とのつながりを考え、気づきをシェアする	
		6. まとめ ★インプットした学びや気付きをアウトプットする ・他クラス（多文化共生クラス）との意見交換	

成 果	＜参加者アンケートより抜粋＞「水によって世界がどのように変化していたり何が発生しているかが知れた」「一つの事から発展して考えることができた」「身近なことから SDGs へつながる考え方を体感できた」
課 題	地球の課題という大きなテーマに対し、“自分１人の力ではどうしようもないのでは”という空気が流れた。課題解決を自分の行動に落とし込められるような工夫が必要である。ワークショップで挙がった「まずは知ること/伝えること」「教育を受ける重要性を子どもから大人に伝える」という意見をファシリテーションに組み込めるとよかったと感じる。
備 考	＜使用教材＞・「SDGs の目標が一覧できるリーフレット」 Save the Children ・「水の循環図」 公益財団法人 日本下水道協会

テーマ ： 食、環境

食べ物と世界のつながりについて考えよう！

32

所 属	愛知県弥富市立弥生小学校	実践者	道越　彩花
対 象	弥富北中学校　ＰＴＡ（１１名）	実践日	２０２１年１１月
実践教科	学校保健委員会	時間数	１時間
ねらい	・　生徒の健康課題を協議し、健康つくりを推進する。 ・　身近な「食」と世界のつながりに気付く。 ・　「食」に関する世界の課題を知り、自分にできることを考える。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	1　自己紹介 ・ 名前　・ 思い出の給食 2　給食について 給食ができるまでの流れや、給食を安全に提供するために、食中毒や食物アレルギー、異物混入の事故を防ぐ手立てを伝える。 3　食べ物と世界とのつながりについて考える。 ・ SDGsとはなにか知る。 ・ 日本の食料自給率は約40%であり、半分以上の食べ物が外国から輸入されたものであると気付かせる。 ・ 付せんに、食べ物を選ぶときの基準を書き、項目の順位をつけ、その順位にした理由をグループ内で発表する。 4　資料を読み、グループ内で情報交換 食べ物の生産工程の実態についての資料を読む。（環境破壊、児童労働、不平等な貿易） 5　エシカル消費の動画(消費者庁より)を見せ、企業の取組事例を知る。 人・社会・地域・環境に配慮した消費行動（エシカル消費）が進むことにより、持続可能な社会が作られていくことを知る。 6　グループ協議 3で使った付せんを用い、食べ物を選ぶときの基準の優先順位をグループでもう一度考え直す。 7　まとめ 個人や家庭でできることを考える。	【ブレスト】 【ダイヤモンドランキング】 動画 【ダイヤモンドランキング】

成 果	研修を通して、様々な立場の先生方と意見交換し、指導の引き出しが増えたことを実感している。今回の実践の他に、毎月発行する食育だよりや学校の食育掲示板に「給食から考えるSDGs」というコーナーを設け、身近な「食」と世界のつながりについて興味関心をもたせることができた。
課 題	現在3か所の学校を兼務しているため、単発的な指導が多く、指導後の習得状況が確認できる体制でないことや、継続的な指導が行えないことが課題として挙げられる。今後は栄養教諭だけではなく、学級担任が給食の時間に啓発を行えるよう、パワーポイントを作成するなど指導体制を整えていく。
備 考	日常の業務の中で完璧な指導を計画的に行うことを目指すと、他の業務にも支障が出てしまう。今回の実践を通して、考えすぎず「まずはやってみる」ことの大切さを実感した。

お悩み解決します！ ～その時、相談員は動いた～

33

所 属	愛知県立刈谷北高等学校	実践者	山本　孝次
対 象	多文化共生に関心のある中高教員（８名）	実践日	2022 年 1 月 23 日
実践教科	総合的な探究の時間、国際理解（想定）	時間数	２時間（50 分×2）

ねらい

・1. 在住外国人がいることの楽しさと課題を知る。
・2. 在住外国人の課題の解決法を考えることで、外国人のコミュニティ参加を促すことを考える。
・3. 多文化共生社会の実現へ向けて、自分たちがこれからできることを考え（行動す）る。

実践内容

時間	プログラム	備 考
10 分	**0. アイスブレーク** 「わたしの行きたい国はどこ？」: 自分が行きたい国の3ヒントクイズを作り、他のグループメンバーに当ててもらいながら自己紹介する。	
15 分	**1. 海外生活で楽しみな事・不安なこと** ＊あなたは 2 週間後から少なくとも 3 年間（あなたの行ってみたかった）海外で暮らすことになりました。①楽しみなことは何ですか。②不安なことは何ですか。【対比表】	愛知県外国人人口推移（国籍別）等（愛知県 HP より） 刈谷市の外国人住民数（刈谷市 HP より）
25 分	**2. 在住外国人の現状と課題** ①数字、グラフなどのデータから在住外国人が増加している現状を知る。コミュニティに在住外国人がいることによってもたらされるであろうメリットとデメリット（課題）を想像する。【対比表】	
25 分	**3. 外国人のお悩み解決します！～その時、相談員は動いた～** ①「外国人ヘルプライン東海」の活動を紹介する。 ＊3つの壁、困りごとの解決には社会資源とつなぐ ②4 人1グループの外国人相談所の相談員チームとなる。そこへ届けられる外国人の相談に対して、チームで解決方法を考え、相談者へ提示する。【ロールプレイ】	外国人ヘルプライン東海 HP　対応事例
20 分	**4. 多文化共生へ向けた行動宣言** ①日本国内で多文化共生社会の実現に向かって活動している人たちの想いを知る。（インタビュー動画視聴） ②自分たちがこれから多文化共生社会の実現に向けて取るべき行動を考え発表する。（グループ/個人）【行動宣言】	COLORS　宮城ユキミさんのインタビュー動画
5 分	**5. ふりかえり** ＊今回の多文化共生授業から、①一番印象に残っている学びはどんなことですか。また、②さらに知りたくなったことはどんなことですか。	

成 果

・愛知県在住外国人の現状と課題について考えてみる機会をもつことができた。
・海外に行かなくても、国内に目を向けて多文化共生を学ぶことができることがわかった。
・自分でも多文化共生の授業をやってみたいと思った。

課 題

・外国にルーツを持つ子供たちがどんなことで実際困っているのか、数字とか動画とかあるともっとリアルに感じられる。/・お悩み解決のワークの状況設定をもう少し絞ると具体的な案が出やすくて良かった。/・実際に在日外国人の世話をしている NPO の紹介がたくさんあるとよい。

備 考

今回は諸事情により、学校内で授業実践を行うことができなかった。代わりに、開発教育に関心をもつ中学・高校の先生方を対象にオンラインでワークショップを行った。参加者の皆様に改めて感謝いたします。

テーマ ： 防災

Bosai　自分たちは何ができるか

34

所 属	愛知県名古屋市立北高等学校	実践者	吉村　典子
対 象	高校１年生（２５名）	実践日	2021 年 5 月～11 月
実践教科	プラクティカルイングリッシュ、課外活動	時間数	９時間
ねらい	・防災について知り、自分たちにできることがあることに気づく。 ・実際に自分たちができることを考え、行動に移すことができる。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	「私のまちの防災自慢」 自分の住んでいる地域、自治体の防災対策を各自事前に宿題として調べ、6、7人のグループで発表。	ワークシート
2	「防災対策ゲーム」 4人グループに分かれ、グループを1つの町と見立て、それぞれ防災対策として何が必要か考える。AET が順番に災害を言い、その災害に対して自分たちの町がどれだけ対策できているか競う。【シミュレーション】	付箋・マーカー パワーポイント
3・4	「HUG ゲーム」 避難所で起こりうる出来事をゲームを通して体感する。【シミュレーション】	HUG ゲーム 付箋
5	「防災プロジェクト」 1学期に学んだことを通して、更に知りたいと思ったことを1つ選び、夏期休業中に調べたものをグループごとに発表。	ワークシート
	授業外で次の活動を実施	
6	「校内の備蓄物資移動の手伝い」	区役所の担当者 自治会役員・教頭
7	「名古屋大学減災館見学」	
8	「防災散歩」	カメラ・地図・ペン A3 用紙
9	「防災マップ作成」	マーカー

成 果	1 学期に学んだことを通して、2 学期は自分たちができることを考えることができた。備蓄物資の移動を手伝ったり、学校周辺の施設や店舗にインタビューしたりするなど、積極的に行動することができた。今回の活動を校内外で発表することによって、周囲にも発信することができた。
課 題	自分たちに何ができるか考えるときに、教員が中心になってしまっていたところがあるので、もっと参加型手法を使って行うべきであった。
備 考	実践内容を「名古屋市立大学サステナビリティシンポジウム 2021 防災×SDGs～いま、私たちが備えることとは～」と校内の 2 学期終業式で発表した。

Ⅶ　開発教育指導者研修（実践編）第4回

■ 開催概要

◆ 日 時：2022 年 2 月 26 日（土）10:00～17:00
◆ 場 所：JICA 中部なごや地球ひろば 2 階 セミナールームA
◆ 参加者数：一般受講者32名（3名は ZOOM）、NIED スタッフ 6 名、JICA スタッフ 2 名 合計 40 名
◆ ファシリテーター：（特活）NIED・国際理解教育センター 伊沢令子

■ 第４回のねらい

① 第 1 回～第 3 回の研修をふりかえり、各自が学んだことや変化したことを意識化し共有する。
② 仲間の実践の成果と課題から学びあい、開発教育の意義と可能性を確認共有する。
③ 開発教育を通して学んだことを一般に向けて発表し、学びの好循環を作る「はじめの一歩」を踏み出す準備を行う。

■ プログラムの内容

● セッション1 「研修のふりかえり」 2/26 10:00–10:55

1. 主催者挨拶／第4回のねらいの確認 10:00–[15]

◇ JICA 中部 江口職員が、感染症対策について案内し、開会を宣言した。

◇ ファシリテーターが、本研修全体の流れとねらい、第4回のねらいについて説明した。

2. アイスブレーキング ジェスチャーゲーム 10:15–[10]

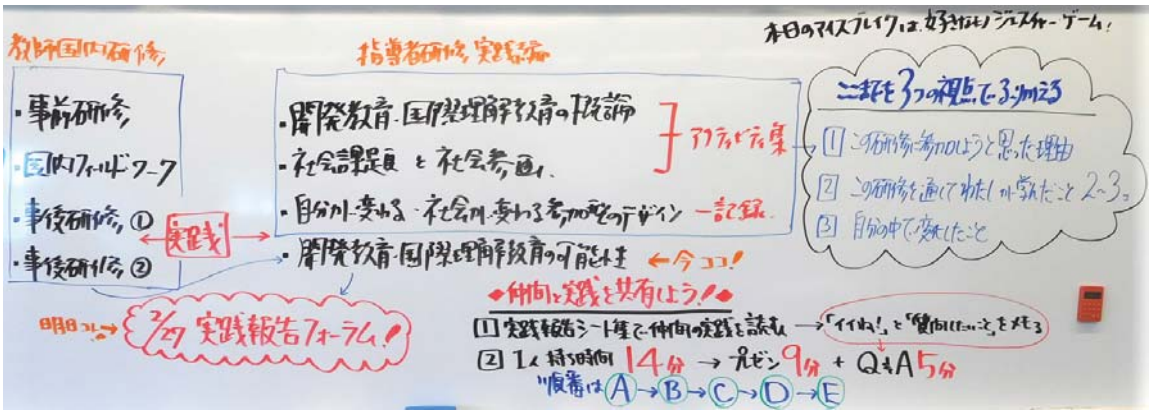
◇ グループで、言葉を使わずに「自分の好きなもの」をジェスチャーで紹介し合った。

3. 第1回～第3回のふりかえり 10:25–[30]

◇ 個人で、第3回の記録と資料「第1回研修、第2回研修で取り組んだアクティビティ」（第3回で配付）を読み、3つの視点でのふりかえりを A4用紙に書き出した。

①この研修に参加しようと思った理由、②研修を通してわたしが学んだこと、③自分の中で変化したこと

◇ グループで、3つの視点でのふりかえりを紹介し合った。



● セッション2 「実践の共有」 10:55–12:25

1. 実践の共有 10:55–[20]

◇「実践報告フォーラム 2022」の全体の流れをファシリテーターが説明した。

◇ ファシリテーターが指定したテーブルに移動し、グループ替えを行った。

◇ 個人で、グループメンバーの実践（「実践報告シート集」）を読み、メンバーの実践について「いいね!」と「聞きたいこと」をメモしながら、実践の概要を確認した。

2. 実践報告 11:15–[70]

◇ 翌日の実践報告フォーラム 2022 の準備も兼ね、本番と同様の流れで、グループ内で順に報告を行った。質疑応答では、実践して分かったことや、よりよくするための提案も話し合った。

- **休 憩** - 12:25–[55]

● セッション３ 「実践の成果とネクストステップの共有」 13:20–15:05

1. 開発教育・国際理解教育の可能性～実践を通した成果・よい影響（自分／学習者／周囲） 13:20–[40]

◇ 自由に移動してグループを替え、「自分を季節で例えると」をお題に一言自己紹介をした。

◇ 研修参加と実践を通して、①自分自身、②学習者・参加者、③周囲（同僚・保護者・地域など）の3つの視点で開発教育・国際理解教育の可能性として得られた成果・よい影響を、グループで模造紙にまとめた。

◇ グループごとに移動して、他のグループの成果物を確認し、個人で自分のグループでは出なかったが良いと思うアイデアに★印を付けた。

◇ ファシリテーターコメント…参加型は万能ではなく、時間がかかるというようなデメリットもある。それでも、実践を続けていくために、メリットを意識していることが大切で、中核的な指導者として、このメリットを共有できる仲間を増やしていってもらいたい。

【「開発教育・国際理解教育の実践で得られた成果・よい影響（自分／学習者／周囲）」の成果例】

①自分にとって

・自分もテーマについて学び深めることができた ・楽しい!! ・1つのことも広い視野で見られるようになった
・もっと知りたいと思えるようになった ・知ったことを伝えたくなった ・主体性が身についた ・情報が更新された
・自己肯定感が高まった ・幅広い年齢の仲間が増えた ・教える→共に学ぶという意識の変化

②学習者にとって

・情報や報道に敏感→知識と世界がつながるおもしろさに気づいた ・自分の可能性に気がついた
・答えがないことを考えるおもしろさに気づいた ・学習意欲の向上 ・コミュニケーションができるようになった
・仲の悪かった仲間がつながるきっかけになった ・自分事として捉えられるようになった ・夢をもつことができた
・人や世界に関心をもつようになった ・年齢や学力に関係なく、1つのことを共に考えることができた

③周囲（自分／学習者／周囲）にとって

・共感できる仲間を増やせた ・実践を見たほかの教師にも広がっていった ・こんな教え方もあると気づけた
・子どもと保護者の共通の話題ができた ・家庭で SDGs アクションを起こし始めた ・刺激になった
・継続的に取り組める ・意識が変わった ・子どもが変化して、保護者も関心をもつようになる

2.「持続可能なよりよい未来をつくる人を育む教育者」の使命　14:00–[40]

◇ じゃんけんをしてグループ替えをし、「今の気分は何色?」をお題に一言自己紹介をした。

◇ ファシリテーターが、SDGsの日本の達成状況について説明した。

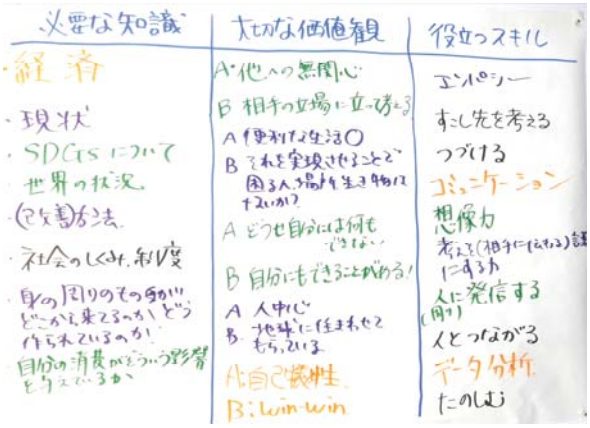
◇ グループで、持続可能なよりよい社会をつくるために、①必要な知識・情報、②大切な価値観、③育てたいスキルを考え、模造紙に書き出した。②についてはＡいまの価値観→Ｂどう変わるといいかを書き出した。

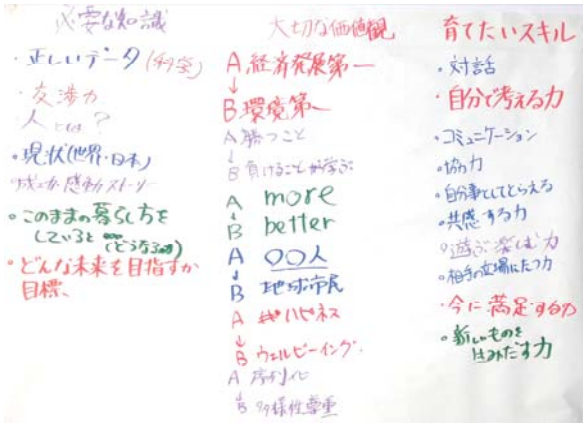
◇ 自由に動き回って、良いと思うアイデアをメモしながら他のグループの成果物を見て回った。

◇ 個人で、持続可能でよりよい社会をつくるために、教育者の使命は何か考え、「私たち教育者は〇〇する!」という文章を5～7つ書き出した。

◇ グループで、書き出したことを読み上げて共有した。他のメンバーの書いたもので、良いと思ったものを1つ自分の文章に追加した。

【「持続可能なよりよい社会をつくるために、必要な知識・情報／大切な価値観／育てたいスキル」の成果例】





【「持続可能なよりよい未来をつくる人を育む教育者の使命」の成果例】

・過去をふりかえり、現在を見つめ、未来を考える ・「目に見えない部分」を考える ・楽しい学びを目指す
・人との関りを大切にする ・自分たちをとりまく社会について知る／知る機会をつくる ・「共感」を大切にする
・少し先の未来、さらに先の未来を考えることができるようにする ・子どもと楽しみながら成長する
・人とのコミュニケーションを大切にする ・ほかの人の意見も大切に思う ・児童生徒の共感力を育む
・毎日を、そして未来を楽しむことができるように考える ・世界の課題、現状とともに希望を伝える
・便利な社会ではなく、誰もが幸せな社会を目指す ・子どもも教師も本気で取り組む機会をつくる
・すぐに判断するのではなく、正しいデータをもとに判断できる人を育てる ・みんなで考えて最適解をつくる
・「自分にもできる」と思えるように、行動できる人を育てる ・結果ではなくプロセスをみる

4. JICA 東京研修参加者報告　14:40–[25]

◇ 過年度 JICA 中部教師海外研修および開発教育指導者研修（実践編）受講者である児玉やこさんが、JICA 地球ひろば@東京で受講した「国際理解教育／開発教育指導者研修」と実践の報告を行った。

◇ 実践の紹介ページ（JICA ウェブサイト）

https://www.jica.go.jp/hiroba/news/notice/2021/211202_10.html

- **休 憩** - 15:05–[10]

● **セッション4 「実践報告フォーラムの準備（全体）」** 15:15–16:00

1. 実践報告フォーラムの進め方と各自の動きの説明 15:15–[35]

◇ 配付資料「実践報告フォーラム 2022 の進め方」を基に、当日のプログラム、受講者の動き、ポスターセッションの場所と方法、申込者の状況について事務局が説明した。

◇ 質疑応答を行った。

2. フォーラム参加者に持ち帰ってほしいこと、期待すること、自分が貢献できること 15:50–[10]

◇ 実践報告フォーラム 2022 を通して、「参加者に持ち帰ってほしいこと」「自分が明日に期待すること」「自分が明日貢献できること」を、グループ内で発表し共有した。

◇ 実践報告フォーラム 2022 の最後に挨拶をする受講者代表者を決めた。

● **セッション5 「実践報告フォーラムの準備（個別）」** 16:00–17:00

1. 有志ワークショップ／教師国内研修報告／個人の実践報告の準備及び相談 16:00–[52]

◇ 実践体験ワークショップの有志4チームは別の会場に移動し、それぞれの打合せを行った。

◇ 実践報告の準備と会場設営を行った。

2. 事務連絡 16:52–[08]

◇ 実践報告フォーラム2022に向け、事務連絡を行った。

★ 17:00 **終了**

Ⅷ　開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2022

■ 開催概要

◆ 日 時:2022 年 2 月 27 日 (日) 10:00~17:30
◆ 場 所:JICA 中部 なごや地球ひろば2階 セミナールームA・B・C
　　オンラインミーティングツール Zoom
◆ 参加者数:
　一般参加者 38 名、受講者 32 名（3 名は Zoom）、JICA 2 名、NIED 6 名、合計 78 名
（一般参加者内訳:教員 26 名、学生 4 名、JICA・NPO 関係者 4 名、その他 4 名）
◆ ファシリテーター:（特活）NIED・国際理解教育センター　伊沢令子、研修受講者

■ ねらい

①【受講者】実践報告、モデルプログラムのファシリテートと参加者との意見交換を通して、実践の自己確認、総括を行い、ネクストステップへの意欲を高める。
②【参加者】実践者の成果と課題を共有し、自らの実践のヒントとネットワークを得てもらう。
③【主催者】開発教育・国際理解教育を推進し、研修事業の次の参加者を広げる。

■ プログラムの内容

1. あいさつ・概要説明 10:00 - [15]

◇ 主催者（JICA 中部　江口職員）が主催者挨拶を行った。
◇ 開発教育指導者研修（実践編）および教師国内研修プログラムの概要をパワーポイントで JICA 中部　秋山職員が説明した。
◇ 実践報告フォーラム 2022 のねらいとプログラムについてファシリテーターが説明した。

2. 教師国内研修報告 10:15 - [20]

◇ 同行ファシリテーター挨拶の後、フィールドワークの写真や動画等と共に研修報告を行った。

3. 実践事例ポスターセッション（実践報告） 10:35 - [120]

◇ 5つの会場／ブレイクアウトに分け、実践報告シートや参考教材等を使いポスターセッションを行った。
1人14分間で報告と質疑応答を行い、一般参加者はブレイクアウトを移動して合計7人の報告を聞いた。

4. 午後の部の説明 12:35 - [5]

◇ ポスターセッション終了後、「午後のプログラム」「実践体験ワークショップのテーマと会場」について説明した。

- **休 憩** - 12:40 - [50]

5. 実践体験ワークショップ 13:30 - [210]

◇ 2つの会場／ブレイクアウトに分かれ、以下の4チームが100分間のワークショップを実演した。

◇ 受講者は対面、一般参加者はオンラインで参加した。詳細は次ページ以降参照。

● ワークショップ①

A 会場…「どうなる地球!?どうする君たち!?」
（SDGs 全般）

B 会場…「買い物は投票することだ」
（食糧問題）

- **移動・休憩** - 15:10 - [10]

● ワークショップ②

A 会場…「Live Together」（多文化共生）

B 会場…「ステキなシェアハウス～みんなが
生きやすい社会をつくろう～」（福祉）

6. ふりかえり・閉会 17:00 - [30]

◇ 一般参加者はオンラインシートに記入、受講者は小グループになってふりかえりを行った。

◇ 一般参加者、受講者それぞれ 3～4 名から、本日の感想を全体へ発表した。

◇ 受講者を代表して柴田英子さん、野々山尚志さんが、閉会のあいさつを行った。

◇ JICA 中部 秋山職員と事務局より、事務連絡を行い、閉会した。

★ **17:30 終了**

■ 実践体験ワークショップの内容

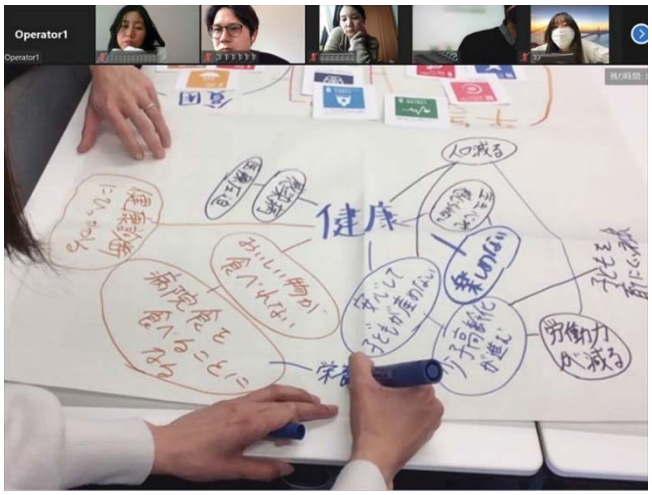
回・場所	第1回 A会場	メンバー	加藤里、菊地、中田、橋爪、近藤幸
タイトル	どうなる地球!?どうする私たち!?（テーマ:SDGs）		
ねらい	1. SDGsについて知り、世界が抱える課題に気付く。 2. SDGs達成に向けた取り組みを知り、自分ができることを考える		
対 象	受講者７名（うちオンライン１名）、一般参加者12名	所要時間	100分間
展開 (四行詩)	起:SDGsという世界共通の目標について知り、世界が抱える問題を共有しよう 承:もしもSDGsが達成されないとしたら未来はどうなるのか想像してみよう 転:目標達成のために、今社会ではどのような取り組みがされているのか知ろう 結:SDGsを達成するために自分たちにできることを考えよう		
教材	教材1:SDGsのカード（3セット） 教材2:フォトランゲージ用写真（4枚×3セット、A3カラー） 教材3:フォトランゲージ写真の解説（両面人数分） 教材4:SDGsシール（4セット×3グループ） 教材5:「未来を変える目標SDGsと未来を変えたアイディア」（人数分） 教材6:日本のSDGs達成度など 2021 年の情報（人数分） 教材7:できることビンゴ（人数分）		

時間	プログラムの流れ	準備物／担当 ★オンライン配慮 ◆チャット配信
20 分	**1. アイスブレーキング ～知ってる!?SDGs～** ・SDGsのカードから１人１枚選んで、グループの人に選んだ理由とゴールの内容を紹介する。 ・左前の人からはじめ時計回りに紹介する。 ・時間まで何周か繰り返す。	【タカさん】 <教材1>SDGsカード （◆）
30 分	**2. SDGsが達成されない未来を予想しよう** ① SDGsのゴールを似たものや関連の強いもので分けながら模造紙の上に並べる。【分類】 ② 分類したものにタイトルをつける。 ③ SDGsの達成度などについて現状ではまずいことを知る。 ④ ②でつけたタイトルを中心に、そのゴールが達成されない未来を予想し、派生図に書く。【派生図】 ⑤ 想像した未来を共有する。新たな気づきや共感したものに☆を書いて回る。【ギャラリー方式】	【こみ】 ・半模造紙 ・マジック プロジェクター投影 ★投影しているものをよく見えるように撮影する

30 分	**3.　社会で行われている取り組みを知ろう** ① 写真に写っているSDGs達成への取り組みを探し，関連するSDGsゴールのシールを貼る。シールの余白にどのような関連や効果があるのか書く。 ② 各グループ1枚の写真について想像したことを全体へ発表する。 ③ 写真の解説、達成に向けた取り組みのアイディアを知る。	【きくりん】 <教材2>写真（◆） <教材4>SDGsシール（◆教材1：SDGs一覧） <教材5>解説，取り組み（◆）
20 分	**4.　自分にできることを考えよう** ① 日本の達成度を知る。資料をグループで分担して読み、要約したことをグループに伝える。 ② 日本の達成度などを踏まえ、さまざまな場面においてSDGs達成のために自分ができることを考え、ビンゴシートに書く。 ③ 他の人の意見を聞く。	【ちゃんりえ】 <教材6>日本の達成度（◆） <教材7>ビンゴ（◆）

ワークショップの様子

▲ 1. アイスブレーキング～知ってる!?SDGs～（カード紹介）



▲ 2. SDGsが達成されない未来を予想しよう（派生図）

▲ 3. 社会で行われている取り組みを知ろう（シール貼り）

▲ 4. 自分にできることを考えよう（ビンゴ）

回・場所	第1回 B会場	メンバー	加藤奏、久米、濱田、松田翔、道越
タイトル	買い物は投票することだ！（テーマ：食料問題）		
ねらい	1. 身近な食と世界とのつながりに気付く。 2. 世界の課題を自分事として捉え、課題解決のための行動が分かるようになる。		
対 象	受講者８名（うちオンライン２名）、一般参加者９名	所要時間	100分間
展開 （四行詩）	起：何を食べるか選ぶ時、自分は何を基準にして選んでいるか振り返ってみよう。 承：私たちが選んでいる食べ物にはどんな真実（背景や問題）がかくされているか知っている？ 転：「持続可能なよりよい社会」という視点から、自分たちが選択しているものの判断基準を見直してみよう。 結：持続可能な社会の実現のためには、何を大切にするとよいかを考え、具体的な行動につなげよう。		
教材	教材1：食べ物カード（肉4人、魚4人、野菜4人、お菓子4人） 教材2：買い物9つの視点カードA4とランキングシートA3 教材3：晩ご飯カード（表：メニューと値段 裏：食べ物の真実が読み取れるシンボル） 教材4：おいしい食べ物の真実A3 教材5：「エシカル」「LOHAS」についての資料		

時間	プログラムの流れ	準備物／担当 ★オンライン配慮、◆チャット配信
15 分	**1 アイスブレーク「わたしは〇〇？」** ・ 参加者の背中に、食べ物（肉4人、魚4人、野菜4人、お菓子4人）が書かれたシールを本人に見えないように貼る。フロアを移動し、「私は、カレーに入っていますか」など間接的な質問をし合って、自分の背中に書かれた食材を当てる。	<教材1>食べ物シール16枚 ★食べ物カードを端末の裏に貼る。タブレット端末を持って、番号が若い順に、一人ずつ参加する。（2人）
10 分	**2 あなたの買い物 優先することは？** ・ 9つの視点の優先順位をグループで決めよう。 【ダイヤモンドランキング】	<教材2>買い物9つの視点カード（◆）3セット、ランキングシート3枚
10 分	**3 今日の夜ご飯を決めてみよう！** ・ お買い物シミュレーションをして、主食・メイン1・メイン2・デザートを決めよう。 【ロールプレイ】	<教材3>晩ご飯カード多数（◆カード表）

30 分	**4 おいしい食べ物の真実** ・食材カードの裏に書かれたマークや絵から真実を読み取りシェアする。【フォトランゲージ】 ・資料を読んで真実について詳しく知り、シェアする。 ・他のグループが選んだ食べ物の真実をシェアする。	（◆カード裏） <教材4>おいしい食べ物の真実（◆）
15 分	**5 持続可能で健康的な買い物のポイントとなることは何だろう？** ・「持続可能で健康的な買い物をするために必要なことは何？」と問い掛け、思い浮かぶものをどんどんリストアップしていく。【ブレーンストーミング】 ・ 全体で、ポップコーン方式で共有する。 ・「エシカル」「LOHAS」について紹介する。	・半模造紙3枚 ★ポップコーン聞きとり代弁（2人） <教材5>エシカル、LOHAS についての資料（◆）
10 分	**6 消費者にも責任がある！買い物は投票だ！判断基準を見直そう！** ・9つの視点の優先順位を個人で決めよう。【ダイヤモンドランキング】	<教材2>買い物9つの視点カード、ランキングシート 12 セット（◆）
10 分	**7 できることは何だろう？** ・「自分たちにできること」を付せん紙に書いてみよう。 ・「自分たちにできること」を整理して、行動計画を立てよう。【個人ーみんな、今すぐー2030 年までのマトリックス】	・付せん紙160枚 ・A3用紙3枚 ★聞きとり、付せん紙代筆（2人）

ワークショップの様子

▲ 1.アイスブレーク「わたしは〇〇？」

▲ 4.持続可能で健康的な買い物のポイントとなること

▲ 6.買い物は投票だ！判断基準を見直そう！

▲ 7.できることは何だろう？（成果発表）

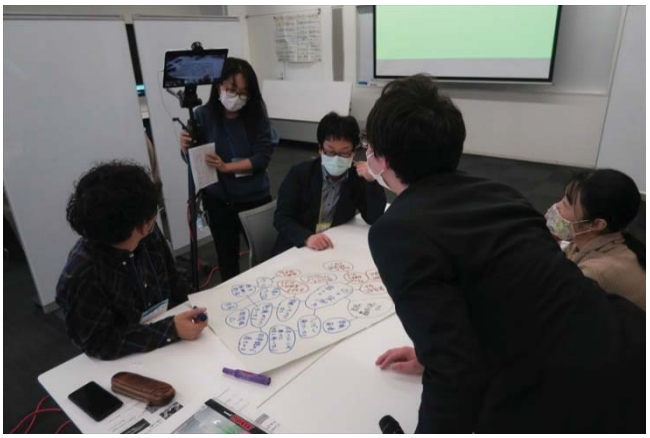
回・場所	第2回 A会場	メンバー	稲垣、沖、神谷、柴田、山本
タイトル	Live Together （テーマ：多文化共生）		
ねらい	1. 日本の中にある世界とのつながりに気付く。 2. ルーツの違いによって起きている問題と解決に役立つことを考える。 3. 誰もがすごしやすい社会について考え、行動に移す。		
対 象	受講者 12 名（うちオンライン 2 名）、一般参加者 10 名	所要時間	100分間
展開 （四行詩）	起：日本と世界はつながっていることと、日本の中にも世界とつながるものがあることに気づこう。 承：ルーツが違うことによって日本で起きている問題にはどんなものがあるか知ってる？ 転：どうしてそのような問題が起きているのか原因を探り、何が解決に役立つのか考えよう。 結：ルーツに関わらず誰もが気持ちよく暮らせる社会にするために、役立つことやできることを考えよう。		
教材	教材1：あいさつゲーム用カード 教材3：ロールプレイ用事例シート（2種類）	教材2：日本？世界？どっちだQ 写真 教材4：3つの壁・活動事例の説明（パワーポイント）	

時間	プログラムの流れ	準備物／担当 ★オンライン配慮 ◆チャット配信
10 分	**1. あいさつゲーム（アイスブレイク）** ①世界の人口と世界で使われている言葉の割合を考えて、各国の言葉のカードを、参加者に1枚ずつ配る。 ②「会場内で自由にペアを作り、同じ国の言葉であれば挨拶できるが、違う国であれば挨拶ができない。」ルールを参加者に伝えてゲームを始める。 ③自分の持つ言葉のカードが、少数派であれば、ほとんど話すことができない、との異文化体験ができる。	担当：ひろっぴ <教材1>あいさつゲーム用カード（◆） ★タブレットを持って、参加してもらう。
10 分	**2. 日本と世界はつながっていることと、日本の中にも世界とつながるものがあることに気づこう。** ①日本？世界？どっちだQ ②この地域に暮らす外国人の現状	担当：ECO <教材2>クイズに使用する写真（◆）
30 分	**3. ルーツの違いによって日本で起きている問題にはどんなものがあるか知ってる？** 「どうしよう、こんな時・・・」 ①3つのグループにわかれ、それぞれのグループに2つの事例シートを渡す。 ・2つの事例から1つを選んで、ロールプレイを行う。 ②この状態がつづくとどうなるか、派生図で考える。	担当：神谷さん <教材3>事例シート2種類（◆）

40 分	**4. どうしてそのような問題が起きているのか原因を探り、何が解決に役立つか考えよう。** ①原因はどこにあるかグループで考える。 ・因果関係図を描く。 ②出てきた原因を言葉の壁、心の壁、制度の壁の3つに色分けする。 ・言葉の壁、心の壁、制度の壁について説明する。 ・言葉の壁は緑、心の壁は赤、制度の壁は水色のペンでかこむ。 ③原因を3つの壁にわけて書き、解決に役立つことを考えて対比表にする。 ④活動事例から解決に役立つことの例を示す。 ⑤意見を共有する（ギャラリー方式） ⑥グループでいちばん心に残ったことを　共有する。	担当：おきさん ・模造紙（半分） ・マジックセット <教材4>3つの壁・活動事例の説明（パワーポイント） ★投影しているものをよく見えるように撮影 ・模造紙 担当：ひろっぴ ★タブレットを持って、ギャラリー方式で撮影。
10 分	**5. ルーツにかかわらず誰もが気持ちよく暮らせる社会にするために、役立つことや自分にできることを考えよう！** ①今日からできる、自分にできる具体例を決めて、書く。 ②発表する。	担当：KOJI

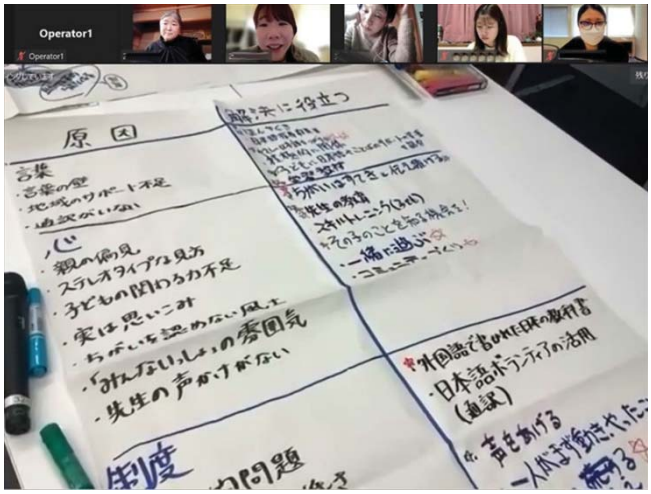
ワークショップの様子

▲3―①. ルーツの違いによって起きている問題（ロールプレ



▲3―②. 問題の状態がつづくとどうなるか（派生図）

▲ 4―②. 問題の原因（3つの壁のレクチャー）



▲ 4―③. 3つの壁の解決に役立つことを考える（対比表）

回・場所	第2回 B会場	メンバー	大島、狩山、長瀬、中谷
タイトル	ステキなシェアハウス～みんなが生きやすい社会をつくろう～ （テーマ：福祉）		
ねらい	1. ステレオタイプが差別につながることに気付く。 2. 生きやすい社会はどんな社会かを考える。		
対 象	受講者 12 名（うちオンライン 1 名）、一般参加者 9 名	所要時間	100分間
展開 （四行詩）	起：障がいとは何かを知ろう！ 承：視覚障がいのある人々の日常を疑似体験してみよう。 転：誰にとっても生きやすい社会とは、どんな社会なのかを考えよう。 結：誰もが生きやすい社会をつくるために、自分にできることを考えよう。		
教材	教材1：「じんけんビンゴ」カード（問題） 教材3：参考資料「障がいのある当事者からのメッセージ」	教材2：「じんけんビンゴカード（解答+解説） 教材4：「新入居者カード」4枚	

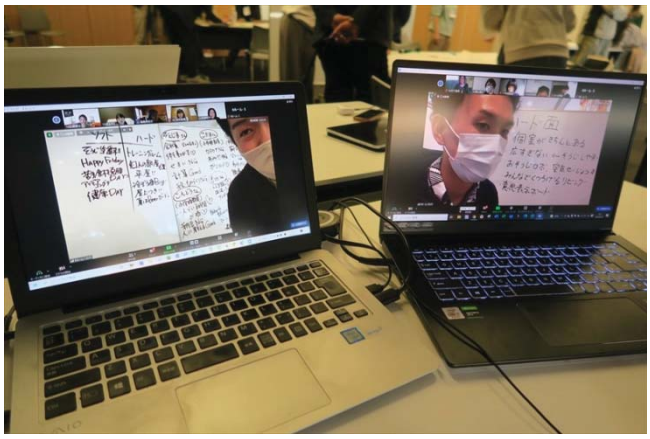
時間	プログラムの流れ	準備物／担当 ★オンライン配慮 ◆チャット配信
15 分	**1. 障がいとは何かを知ろう！〈クイズ〉** ① 「じんけんビンゴ」 ※ 参加者には、ビンゴカードを持ってカードに書かれたクイズの答えを聞きに行ってもらい、答えてくれた人の名前をカードに記入してもらう。（最大9人に聞くことができる。） ② 「じんけんビンゴ」の答え合わせ ※ ビンゴの解答を参加者に配布し、解答と資料について説明することで、障がいとは何かを知ってもらう。	担当：トム <教材1>カード（◆） ★タブレット端末を持って、一人ずつ参加する。 <教材2>カード解答+解説（◆） <教材3>参考資料（◆）
25 分	**2. 視覚障がいのある人々の日常を疑似体験してみよう。〈ブラインドウォーク〉** ① 2人1組にする（スタッフで人数調整） ② 片方がアイマスクをして、吹き抜けを1周するコース ③ コースの前半・・・声掛けなしでサポート コースの後半・・・声掛けありでサポート ※ コースの途中には、踏み台昇降やおままごとセットを用意し、各組様々なことに挑戦してもらう。障がいのある人やサポートする人がどのようなことを感じるのか体験してもらい、感想を聞く。 ④ 自分の特性を考える ※ 視覚障がいという例だけでなく、人にはそれぞれ特性があることを知り、自分の特性を考えてもらう。	担当：あゆみ ・ アイマスク6枚 ・ ティッシュ24枚 ・ ビニル手袋24枚 ・ 踏み台昇降 ・ おままごとセット ★タブレット端末を持ち、疑似体験の様子を撮影する（2人） 担当：もすけ ・ A4用紙12枚 ・ マジックセット

50 分	**3. 誰にとっても生きやすい社会とは、どんな社会なのかを考えよう。** ・ ステキなシェアハウスをつくろう！ ① 4人一組にして、一緒に住むメンバーに自己紹介をする ※ 2.④で作った自分の特性を書いた用紙を使用してもらう。 ② みんなが生きやすい家にするにはどうするとよいか考える<ブレスト> ※ ハード面、ソフト面の両面から考え、半紙に書き出してもらう。 ③ ステキなシェアハウスを考える〈イメージ図〉 ※「新入居者カード」を各組1枚渡し、新入居者の特性も含めシェアハウスを考えてもらう。 ④ 組ごとに発表	担当：ともみ ・ 模造紙半形3枚 ・ マジックセット ・ 模造紙全形3枚 <教材4>新入居者カード（◆） ★オンライン参加者を2グループに分けて、それぞれでシェアハウスを考えるファシリテート
10 分	**4. 誰もが生きやすい社会をつくるために、自分にできることを考えよう。** ・ 行動宣言・・・自分にできることを考えよう〈リスト〉	担当：もすけ ・ A4 用紙12枚 ・ マジックセット

ワークショップの様子

▲1. 障がいとは何かを知ろう！（じんけんビンゴ）

▲2. 視覚障がいのある人々の日常を疑似体験



▲3ー②. 誰にとっても生きやすい社会とは、どんな社会？

▲ 3ー③. ステキなシェアハウス（イメージ図）

●ふりかえりシートの回答　※「ふりかえりシート」を一部整理して掲載した。

1. 発見したこと、嬉しかったこと

- コロナ禍でもJICA 中部国際理解教育・開発教育や教師国内研修が開催され、オンラインでの実践報告会も（現地での学びには及ばずとも）新たな気づきや学びがあったこと。
- 色々な人と意見を交換することで様々な視点からものを見ることが出来た。
- 教師国内研修の報告を聞いたり、聞いたり、ワークショップに参加して、多文化共生の重要性やさまざまな課題と解決策を考えられてよかった。
- 様々な現場で、多くの先生方がよりよい未来のために教育していて、大変励みになった。
- 困り感のある児童へ救いの手を差し伸べるヒントを得られた。
- 対面とオンラインのハイブリッド型のワークショップでしたが、リアルにつながって共有できたことが嬉しかった。
- みなさんの顔・姿が見られたこと。
- 午後からのワーク（食糧問題）で、小学生でも大人でも出る意見が変わらなかった。ということは子供の時からできることは沢山あるということ。
- 久々にいろいろな参加型を体験して、勘が少し戻ってきた。オンラインでも声をかけていただいて参加できた。
- 皆で話をし、一緒に考えることができたこと。
- 生徒のことをこんなに想ってくれている先生方がいることに研修中ずっと感動していた。ワークショップはやっぱりやっている側も楽しいが１番！
- 参加型のワークショップやっぱり楽しい！国際理解教育の授業で使える絵本や情報をたくさんゲットできた！
- 久しぶりにこれまでの研修でお会いした方々に会えたことが嬉しかった。
- SDGs を含む世界や社会の課題って、私の中ではいい事ではあるものの言葉だけが一人歩きをしている感覚があった。でも、皆様のご報告やワークショップを体験して、もちろんこれから自分ごととして取組む必要があることもあるが、実は知らない間に日常の生活の一部になってたりしていたという発見もあった。2030 年までなんて解決できるわけないと思っていたことが、自分、そして未来の子どもたちの当たり前になればいけるのかもしれないと思った。
- 午前の部では、沢山の方が熱心に開発教育に取り組まれ、実践を積み重ねていることが分かって嬉しかった。教材等も大変参考になったし、それぞれの教科からアプローチができることを知れたのが発見だった。英語科としても引き続き頑張っていきたい。午後の部では自分が参加者としてワークショップを体験することで、受講者がどう感じるかという視点を再発見した。活動の最初と最後で自分の考えが変わったり、新しく行動したい意欲が湧いたことが嬉しかった。
- 多文化共生について今まで考える機会があまりなかったが、今回ワークショップで考えてみて、改めて相手の立場に立って考えることや違いを認め合う心を育むことの大切さに気付いた。いろんなサポート機関があることも知れて、興味をもつことができた。実践発表もたくさんのアイデアをもらえたので、来年度以降の実践に生かしていきたい。
- 他の教科や総合学習の中での実践。
- こんなに、国際理解などについて真剣に考えて実践している人がいることを知ることができて嬉しかった。もっともっと、勉強したいと思った。また、子どもたちに還元できるようにしていきたいと思った。
- 対面でもオンラインでも楽しみながら学ぶことのできるワークショップ、様々な視点からのプログラム作成方法、ともに国際理解教育を実践する仲間との出会いやつながり。
- 同じ志をもった方の集まりだったので、非常に前向きに学ぶことができた。また、授業アイデアももらうことができたので、実践に対してもより一層意欲的になれた。

2．これから行動しようと思ったこと

- 2004年からここで学んでいるが、まだまだ学ぶこと、気づきの築きを重ねること、新たな課題を見つけてそれを子どもたちに楽しく伝えられる大人であり続けることが必要だと思っている。
- 自分が受け持つクラスにも外国にルーツがある児童がいる。その児童のバックボーンにもしっかり目を向けながら、必要な支援や配慮を心がけて具体的に行動し、自分の姿を他の児童に見せることで児童同士、認め合える仲間をつくっていきたいと思った。
- 便利さや安さだけで物を購入するのではなく、生産の裏側まで想像して購入していきたいと思う。また、最終的には、商品の消費だけに依存しない生活を模索して、実践していきたい。
- 今日的な課題について、考え共有するのみならず、身近なことから個人レベルではじめるだけでなく、周りの仲間と行動の輪を広げていきたいと思う。
- 無理なく、自然に、自分にできることを、押しつけることなく、否定することなく、誰かのために行動していきたい。
- 理解を深め、角度を変えた見方をするための知識をつけたい。
- 4月からまた教員に復職したら、また子どもたちとさまざまな課題について楽しみながらともに考えたいと思った。
- 自分との違いを理解し、否定しないようにしたい。
- 様々なサポート体制があっても、周知の力が足りていない。もっと多くの方に知っていただき活用してもらうために横のつながりを増やしていきたい。
- 多くの子どもたち、多くの教員に、国際理解教育や参加型の良さを伝え、やり続ける。発信力を磨きたい。
- 今日再びあらためてワークショップの楽しさ、開発教育の重要性を感じたので、今年度の残り少ない授業の中でもなにか生徒の心に残るものを実践したいと思った。
- 身近なことから行動（得意にワークで行った「食」の時に宣言したこと）したい。
- 来年度の教育実践に向け、JICAの各県のデスクの方と連絡をとってみる、学級経営に「シェアハウス」の考えを生かす、エシカル消費を自分から、このような機会に今後も積極的に参加する。
- 外国籍の児童が勤務する学校にもいるので、その子の気持ちに寄り添って、みんなで一緒に楽しんだり、その子から外国について教えてもらう機会を作ったりして、学級全体が違いを受け入れる雰囲気になるようにしていきたい。
- 自分の授業でもやってみたい。
- たくさんの人に伝えることが大切だと思った。
- 「買い物は投票することだ」に参加した。日々の食事・買い物が日本や世界に影響を受けている・及ぼしていることを改めて実感した。少しでも、食品ロスや児童労働などに関わらないように行動していきたいと思った。
- 受講者の方々のポスターセッションや2つの実体験ワークショップを目の前の子どもたちに実践していきたいとともに、職場の仲間にも伝えていきたい。
- たくさんの学びがあったので、学んだことを当日参加できなかった先生方に伝えていきたい。

3．その他（より良くするための提案など）

- オンライン用のカメラを持っている方が常に話かけてくださって安心して参加できた。
- 実際に顔を合わせることができない状況でも物理的な距離を超えてつながれて、とても充実した時間だった。
- オンラインと現地とハイブリッドの開催が大変ありがたかった。準備は大変と思うが、遠方からも参加できてよい。
- 午後からのオンラインの時に同室だったため、他のグループ方の声と混ざってしまい聞き取りにくいところがあった。午前中のようにリアル会場では別室で実施できるとよりよい。
- モデル実践集や実践例は多くあるが、年間通したモデルカリキュラムのようなものを作成して発行してもらえたら、もっといろいろな形で広がっていくのではないかなと思う。

IX 研修全体のふりかえり・評価

※受講者に対し、全ての研修終了後に実施したアンケート結果を取りまとめた。32 名中 27 名が回答。

■ 研修への期待と満足度について

受講者の開発教育指導者研修（実践編）（以下、「指導者研修」という）に対する期待や目的は、「開発教育・国際理解教育の内容・手法・事例を知る」（81％）、「自らの視野や能力を研鑽する」（78％）、「参加型学習・ファシリテーターの能力を高める」（74％）が上位３つとなっている【設問１】。

それらの期待や目標を持った受講者は、研修に対して「とても満足できた」（63％）、「満足できた」（33％）と回答しており、満足度の高い研修であったといえる【設問 2】。

設問 1；指導者研修に期待したこと・目標としたことは何ですか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	開発教育・国際理解教育の内容・手法・事例を知る	22	81%
2	自らの視野や能力を研鑽する	21	78%
3	参加型学習・ファシリテーターの能力を高める	20	74%
4	実践者同士で交流し、ネットワークを作る	14	52%
5	世界の現状や日本とのつながりを知る	12	44%
	全体	27	100%

設問２；指導者研修は、あなたの期待（あるいは目標達成の支援）を満足させるものでしたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても満足できた	17	63%
2	満足できた	9	33%
3	ある程度満足できた	1	4%
4	あまり満足できなかった＋満足できなかった	0	0%
	全体	27	100%

■研修を受けた自分自身の意識の変化について

● 受講者の関心の高まり

受講者の 96％が、受講後「より関心が高まった」（85％）、「関心が高まった」（11％）と回答しており、本研修が受講者の人権、環境、貧困、開発、共生、平和などに関する情報への関心の高まりに寄与しているといえる【設問３】。

設問３；研修を通じて、人権、環境、貧困、開発、共生、平和などに関する情報に関心を持つようになりましか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	受講前から関心があったが、受講後より関心が高まった	23	85%
2	受講前はあまり関心がなかったが、受講後関心が高まった	3	11%
3	受講前から関心があり、受講後も変わりない	1	4%
4	受講前はあまり関心がなかったし、受講後も変わりない	0	0%
	全体	27	100%

研修を通して、受講者自身が「地球上で起きている環境や貧困問題と自分とのつながりについての意識化」をしたり、「国際協力について自分にできることの意識化」をしたりできたかについてみると、前者は「よく意識するようになった」と「意識するようになった」を合わせて 96％、後者は「よく考えるようになった」と「考えるようになった」を合わせて 100％となっており、本研修は受講者自身の学びや行動に繋がったといえる【設問 4,5】。

設問４；研修を通じて、地球上で起きている環境や貧困の問題と自分たちの生活とのつながりを意識するようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	よく意識するようになった	16	59%
2	意識するようになった	10	37%
3	ある程度意識するようになった	1	4%
4	あまり意識するようにならなかった＋意識するようにならなかった	0	0%
	全体	27	100%

設問５；国際協力（身近な買い物から直接支援まで）について自分にできることを考えるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	よく考えるようになった	17	63%
2	考えるようになった	10	37%
3	ある程度は考えるようになった	0	0%
4	あまり考えるようにならなかった＋考えるようにならなかった	0	0%
	全体	27	100%

■ 開発教育・国際理解教育の実践について

● 実践時間

受講者の当該教育の実践時間は、「5～9 時間」が 47%と最も多く、次いで、「1～4 時間」が 33%、「15 時間以上」が 13%となっている。平均では 7.6 時間と比較的多くの時間取り組んでいるといえる【設問 6】。

本研修受講前との対比では、「前年度より増加した」が 89%であり、大半の受講者が受講前よりも多い時間の実践をしている【設問 7】。増加した主な理由としては、本研修の学びや契機が要因になっていることがわかる【設問 8】。一方、実践時間が減少した理由は「コロナ」であった。

設問６；開発教育・国際理解教育の実践時間

No.	選択肢	回答者数	割合
1	1～4時間	10	33%
2	5～9時間	14	47%
3	10～14時間	2	7%
4	15時間以上	4	13%
	合計実践時間数	228	時間
	1人当たり平均実践時間	7.6	時間／人

←各受講者の実践報告シートに基づく。

設問７；本研修受講前と比べた実践時間の変化

No.	選択肢	回答者数	割合
1	増えた	24	89%
2	変わらない	2	7%
3	減った	1	4%
	全体	27	100%

設問８；実践時間が増加した理由は何ですか。（主な内容）

◇様々な手法を学ぶことで、どこでどのような手法を取り入れると、児童の学習により有効か分かるようになってきたので実践しやすくなったから。
◇この研修を通して、国際理解教育について学び、それを生かそうと思い、実践をする機会が増えたから。
◇本校では今まで開発教育の時間はなかったが、実践報告のために時間が欲しいと無理にお願いをしたから。
◇研修の効果　◇研修からさらに自分なりに学んだから。　◇特別なものではなくなったから。
◇今までにやったことのない参加型の手法を知ることができた。◇自分の知識の引き出しが増えた。
◇授業の中で参加型の手法を意識するようになったから。　◇研修前は殆ど実践できていなかったため。
◇コロナ禍だったが今年は昨年より実践ができた。　◇SDGs を取り上げたい依頼先が増えた。
◇参加型の手法を知ったことで、実践しやすくなったから。　◇研修の効果・受講者からの刺激を受けた。
◇研修での学びを、学校で波及させることができたから。　◇協力隊経験について発信する機会が増えた

● **実践内容**

開発教育・国際理解教育の実践の内容は深まったかどうかについては、「とても深まった」52%、「深まった」44%、合わせて 96%の受講者が、実践内容が深まったとしている【設問 9】。

深まった具体的内容としては、開発教育・国際理解教育の教材や参加型の手法との出会いや考え方の理解、実践力の向上などが深まった要因としてあげられている【設問 10】。

設問 9；開発教育・国際理解教育の実践の内容は深まりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても深まった	14	52%
2	深まった	12	44%
3	ある程度深まった	0	0%
4	あまり深まらなかった	1	4%
5	深まらなかった	0	0%
	全体	27	100%

設問 10；どのようなことが深まりましたか。

（「とても深まった」と回答した受講者）

◇自分のねらいに合った資料や教材と出会うことができた。

◇学んだ参加型手法を用いて実践をすることで、子どもたちの反応が良くなったから。

◇その時間に考えさせたいことが明確になり、参加型の手法をうまく取り入れられる場面が増えた。

◇SDGs すら知らなかった子どもたちが、国外のことに関心を持つようになった。教室内で「もったいない」という言葉を聞くことが増えた。グループワークが活発になった。

◇SDGs について様々なアプローチで授業ができることを知った。

◇学習者に対して、手法や目的の先に伝えたいものが明確になった。

◇対立がどのようにして激化していくか、そうならない為にはどうしたらよいかについての考えが深まった。

◇なにから始められるのか、自分にできることは何なのか、考えるきっかけになったり、行動しようという思いにつなげたりすることができた。

◇沢山の手法を体験したことによる手法の理解が深まった。　◇一つ一つの活動に根拠をもてるようになった。

（「深まった」と回答した受講者）

◇国際理解教育の柱を意識してプログラム形成を行った。　◇主体性をより大切にできた。

◇開発教育と国際理解教育の視点の違い、国際理解教育における多文化共生の考え方。

◇全員が自然と参加するようになり個々の学びが深まった。　◇さまざまな問題提起の仕方。

◇流れを持たせることで自分ごととして捉え学びを深められる児童が増えた。

◇開発教育について発信、実践する事で、自分もやってみたいという人との繋がりができた。

◇授業準備や振り返りのときに、その事柄について自分で調べる時間が増えたから。

◇課題に対して、自分たちで考え、答えを導き出したことで、知識だけでなく実践力がついた。

◇協力隊経験について話すとき、身近な話題から関心を惹きつけることを意識するようになった。

● **参加型のスキル**

指導者研修は、行動変容を支え関係性を育む「参加型」と参加型で学び合う場を提供するファシリテーターの役割を理解し、自ら習熟することをねらいに定めて実施した。これらのねらいに対し、受講者がどの程度理解し習熟したかを 2 つの指標で評価した結果は以下のとおりである。

1 つ目の指標「気づきから行動へつながるプログラムの作成」については、「とても作れるようになった」4%「作れるようになった」30%、「ある程度作れるようになった」56%であり、多くの受講者がプログラムの作成スキルがある程度向上したと認識している【設問 11】。

2 つ目の指標「学習者主体の手法の活用」については、「とても使えるようになった」15%「使えるようになった」22%、「ある程度作れるようになった」63%であり、プログラムの作成スキルよりも多くの受講者が学習者主体の手法の活用力が向上したといえる【設問 12】。

設問 11；研修や実践を通じて、流れに沿って気づきから行動へとつながるプログラムを作れるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても作れるようになった	1	4%
2	作れるようになった	8	30%
3	ある程度作れるようになった	15	56%
4	あまり作れるようにはならなかった	3	11%
5	作れるようにならなかった	0	0%
	全体	27	100%

設問 12；研修や実践を通じて、学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや参加型の手法を使えるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても使えるようになった	4	15%
2	使えるようになった	6	22%
3	ある程度使えるようになった	17	63%
4	あまり使えるようにはならなかった	0	0%
5	使えるようにならなかった	0	0%
	全体	27	100%

プログラム作成や参加型手法の活用については、「ある程度」作れる、使えるようになったという回答が多いことから、より作れるようになる、より使えるようになるために、研修でどのようなことを提供したらよいと思うか聞いた結果が以下のとおりである【設問 13】。

設問 13；より作れるようになる、より使えるようになるために、研修でどのようなことを提供したらよいと思いますか。

（より多くのプログラム、手法の体験）

◇より多くの手法やプログラムを体験したい。自分が体験して、理解が深まったから。

◇教える方が参加型の手法やプログラムを体験する。　◇受講者自身が参加型手法を体験する回数を増やす。

◇今は、同じプログラムをもう一度受けたいと感じている。どんな言葉がけを研修ファシリテーターがされていたか、どんな言葉がけで受講者に気づきがより促されているのか、より深く細かく学べたらと思う。

（学習者主体のプログラムの作成と実践経験）

◇学習者主体のプログラムを考え、お互いに実践すること。　◇短い時間でもよいので実践（練習）の機会。

（プログラムや実践へのフィードバック）

◇体験した手法の体験後の紹介だけではなく、そのリフレクション。

◇個々の実践をグループなどで考えてブラッシュアップする時間を取れると、色々な方法を検討しながら作れるようになるかと感じる。

◇プログラム作成中に行き詰まったとき、アドバイスを頂けることで、より良いものが作れたので、今度もそういった時間があると嬉しい。

◇自分で短いプログラムまたは、プログラムの一部を作り実践し指導していただける研修。

◇実践について他の参加者と共有する機会がより多くなればと思う。

（その他）

◇子どもたちにすぐ還元できるような難易度が高くない実践内容がよい。　◇さまざまな学習者への対応。

◇我々教員は特別活動や総合学習以外の教科指導の時間の方が圧倒的に多いので、教科書の指導の中でどのように参加型学習を入れ込めるか、教科書から参加型学習の手法を考えても良いかもしれない。

■ 学習者の変化や周りへの波及効果ついて

● 学習者の変化

開発教育・国際理解教育の実践により学習者のより良い変化があったかについては、「とても変化があった」「変化があった」「ある程度変化があった」と合わせて受講者の 100％が学習者のより良い変化を実感することができている【設問 14】。

設問 14；開発教育・国際理解教育の実践により学習者により良い変化がありましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても変化があった	6	22%
2	変化があった	18	67%
3	ある程度は変化があった	3	11%
4	あまり変化はなかった＋変化はなかった	0	0%
	全体	27	100%

より良い変化の中身については、「開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった」63％、「自分の生活を振り返り、世界の人権や環境を大切にする意識が高まった」56％、「自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった」52％が約半数以上の回答率となっており、開発教育・国際理解教育の本筋のねらいの達成が実感されている。

また、「学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った」44％、「自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った」44％、「話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった」30％、「自らの生き方や共生について考えるようになった」30％といった参加型学習の導入に伴う副次的な変化の実感があった受講者も一定以上いた。

これらのことから、受講者の実践により、「様々な課題の解決に向かおうとする意識の育成」や「自己肯定感・コミュニケーション・参加協力に関わるスキルトレーニング」に関し、学習者のより良い変化が現れているといえる【設問 15】。

設問 15；学習者にどのようなより良い変化がありましたか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった	17	63%
2	自分の生活を振り返り、世界の人権や環境を大切にする意識が高まった	15	56%
3	自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった	14	52%
4	学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った	12	44%
5	自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った	12	44%
6	自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった	10	37%
7	話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった	8	30%
8	自らの生き方や共生について考えるようになった	8	30%
9	その他（話し合いが活発になった）	1	4%
	全体	27	100%

● 学校や団体内の他の職員への波及

所属する学校や団体内の他の教職員に対して、研修で学んだ開発教育・国際理解教育や参加型の手法などを伝えた受講者は94%であり、その具体的な方法は、「日常のやりとりの中で伝えた」が 70%と一番多く、次いで「共同で教材を作成する際に伝えた」37%、「研究発表（公開授業など）で伝えた」26%、「校内・団体内での報告会・研修会で伝えた」11%などとなっている【設問 16】。

設問 16；所属している学校や団体内において、研修で学んだ開発教育・国際理解教育や参加型の手法などを他の教職員等に伝えましたか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	日常のやりとりの中で伝えた	19	70%
2	共同で教材を作成する際に伝えた	10	37%
3	研究発表（授業公開など）で伝えた	7	26%
4	校内・団体内での報告会・研修会で伝えた	3	11%
5	その他（他クラスでも実施、報告書供覧、教材の見える化）	3	11%
6	どこにも伝えていない	1	4%
	全体	27	100%

周りへの波及の環境として、実践活動への所属する学校や団体の上司や同僚の理解については、「とても理解している」、「理解している」、「ある程度は理解している」を合わせて 96%と、多くの受講者は周りの理解のもと実践活動ができている【設問 17】。

設問 17；所属する学校や団体の上司や同僚は、あなたが行う開発教育・国際理解教育や参加型の実践活動を理解してくれていますか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても理解している	6	22%
2	理解している	11	41%
3	ある程度は理解している	9	33%
4	あまり理解していない	1	4%
5	理解していない	0	0%
	全体	27	100%

● 直接提供事業と比較した本研修による学習者への還元効果

開発教育支援の一つとして行っている「JICA が直接学習者に対して教授する国際協力出前講座、JICA 施設訪問プログラム等（直接提供事業）」に対し、本研修は、養成された開発教育を進める中核的な指導者が研修で得た知識や能力を生かして、自らの現場で多くの学習者に対して継続的に還元することが期待されている。

研修受講者の実践実績から、直接提供事業の場合と比較した本研修による還元効果を計算すると、コロナ禍で対話活動が制限されがちな中において約 11 倍となった。また、研修受講者は、研修で得た知識や能力、自らの実践などを他の指導者に伝達しており、継続年数による効果と合わせて、さらなる還元効果も見込むことができるといえる。

◇研修受講者による延べ還元量＝9,976.5 人・時間／年（受講者 30 人分の学習者数×実践時間）
◇研修投入量＝研修受講者数 30 人×研修時間数 32 時間（第１回～第４回）＝900 人・時間／年
◇還元効果（倍）＝9,976.5 人・時間／年÷900 人・時間／年＝**11.1 倍**

● 開発教育・国際理解教育ネットワークづくりへの波及

１年間の研修や実践を通した開発教育・国際理解教育ネットワークは、93%受講者ができたとしている。具体的内容は、「受講者同士」70%、「学校や団体内」48%となっている【設問 18】。

設問 18；１年間の研修を通じて、開発教育・国際理解教育のネットワークができましたか。(複数回答)

No.	選択肢	回答者数	割合
1	受講者同士でできた	19	70%
2	学校や団体内でできた	13	48%
3	できなかった	2	7%
	全体	27	100%

■ 全体を通して

● 最も大きな学びや変化

「受講者の１年間の研修を通した最も大きな学びや変化」についての回答は、以下のとおりである【設問 19】。

設問 19；１年間の研修を通して、あなたの最も大きな学びや変化は何でしたか？

◇若い先生方が頑張る姿に刺激をもらえた。自分の生活も見直し姿勢で示せる教師になりたいと思えた。
◇SDGs への関心をより高めることができた。
◇参加型手法の取り入れ方や、取り入れることでより深い学びにつながることを学んだ。
◇参加型の手法を取り入れたい、自分ももっと国際理解教育に携わりたいと思えるようになった。
◇一年通して実験や発表ができるか不安だったが最後までやり遂げることができ、自分の自信につながった。
◇学ぶことの楽しさを知ったこと。もっと学びたいと思うようになった。
◇自分の実践を広げるだけではなくて、実践する人を増やすことを意識するようになった。
◇小中高校の先生が国際理解教育について本当に頑張っていることを知った。学校の外から NPO としてどのように支援できるかを考える大切な経験を得た。
◇教えるより気づく、知識の上に発想、それらを引き出すのが開発教育かと思った。
◇多文化共生についての理解が深まり、それをテーマに実践できた。
◇今までは、国際問題や SDGs に興味があるというと、周りから『意識が高い人』と思われてしまうのではないかという気持ちがありうまく実践出来なかった。しかし、今回の研修を通して、仲間がたくさんいること、私が出来ることはまたまだたくさんあることを知り、実践を恥じることなく周りに発信できるようになった。
◇ファシリテーションの手法、ファシリテーターであるとはどういうことかを学んだ。
◇自分の興味をもった分野（環境）について、積極的に調べて行動に移した。
◇自分の目指すところが少し見えてきた。自分の無知をより実感できたことで、知識を得るために努力するようになった。開発教育・国際理解教育を行うには何より自分自身の幅広い知識も大切だと学んだ。
◇たくさんの方に出逢えた。JICA スタッフの紹介からつながった大きな出逢いであり、ありがたかった。また、一人では小さなことしかできなくても、こうして話したり周りの人や子どもたち伝え続けていくことで、きっと変わる未来があることを感じることができた。
◇実践したことない手法を体験できたこと、教員の方と対話できたことで教員の雰囲気を知れたこと
◇プログラム作りに自信がもてるようになった。自分自身が今まで以上に学ぶ意欲が高まった。
◇開発教育をより深く知ることができた。
◇具体的な手法をさまざまな教科で使えるようになった。
◇研修で学んだことを、校内に広げたいと思うようになった。
◇開発教育、国際理解教育に挑戦した。
◇意識を保つ。
◇思い込みを避けようとする姿勢。

● 開発教育指導者研修（実践編）をより良くするための提案

（良かった＝引き続き提供を希望する内容）

◇さまざまなプログラムを自分自身が体験することでより理解が深まり、実際に実践に移すことができた。

◇様々なアクティビティを実際に体験できたところが、とても勉強になった。

◇いろんな分野についての知識をつけながら、プログラムを体験できるのがとてもよかった。

◇様々なテーマを扱って頂くことで、新たな学びがいつもあるのでとても勉強になる。

◇参加型の手法を、実際に体験しながら学べること

◇実践を一緒につくることができて、とても勉強になった。

◇対面式でやれたことがとてもありがたかった。今後もぜひ対面式でお願いしたい。

◇教員以外の参加者が混じっていたこと。異なる教育機関からの参加者の考え方や教育システムの話を聞くことが面白かった。

◇コロナ禍でも、対面で研修を行えたのが本当に良かった。また、頻繁に席替えと自己紹介をすることで、全員と関わることができた。

◇相手がいてそこの開発教育だと思うので、可能な限り対面で行い続けてほしいなと思う。

◇オンラインであっても、素晴らしいバックアップをしてもらった。

◇このままの形を続けてほしい。土曜日は午後からスタートの研修は、静岡県から参加する自分にとってはありがたかったです。

（より良くするための提案や希望）

◇低学年に向けた開発教育・国際理解教育の実践についても、より詳しく知りたいと思った。

◇コロナ禍で懇親会などができなかったため、受講者間の関係構築が難しかったところがある。コロナの状況がまだ続くようであれば、受講者間で少しゆっくり自由に話せるような時間があるとよい。ただし、ランチタイムサロンなどではなくマスクをつけた状態でできるとどの受講者にも安心で参加しやすいと思う。

◇研修の回数がもう少し増えるといい。土日連続の講習はきつかった。（学びが多すぎて、処理しきれなかった）

● 実践報告フォーラムをより良くするための提案

（良かった＝引き続き提供を希望する内容）

◇オンラインで参加してくださった方との繋がりが出来た。その結果、私の実践を行いたいとの要望があり、教材を提供した。人との繋がりができ、このフォーラムは本当に意味のあるものだと実感した。

◇ハイブリッドでの発表は初めてだったがスタッフの方のフォローのおかげで無事発表することができた。

◇オンラインの形もあったので、より多くの人が参加できてよかった。

◇オンライン参加をこのまま続けて欲しい。また、オンライン参加が可能な場合、他都道府県の方も参加可能にしていただけたらよりありがたいと感じた。

◇多くの実践報告を聞けたことがとてもよかった。

◇いろんな方の実践報告を詳しく聞けたのは、とても貴重な時間だった。

◇同じ部屋の受講者の発表しか聞けないのは残念だったが、静かなところでじっくり聞けたのはよかった。

◇自分が発表するのはプレッシャーだったが、他の方の発表を聞けてよかった。

◇教師国内研修と合同で行ったのは良かった。同じところが主催している研修でも、内容が全く異なるので、気づきがたくさんあった。

◇SDGs へのアプローチ。
◇ハイブリッド型の際オンラインで参加したが、他の受講者の方がとても配慮してくれた。ネット環境や音声が聞こえないなどワークショップへの参加という面では困難が多くあり、申し訳ない気持ちが大きかった。しかし、みなさんの優しさ・配慮を実感できたのはオンライン参加者だと思う。

（より良くするための提案や希望）
◇できれば一人でも多くの発表が見たかった。
◇もっとたくさんの発表を聞きたかった。
◇受講者の実践発表をもっと聞きたかった。
◇他の方の実践報告をもっと聞きたかったです。
◇オンラインやハイブリット開催の場合、発表者は資料を PC で画面共有する形で行うほうが、オンライン参加者に親切だと思います。発表の中で、ICT を活用した実践事例もあるからこそ、フォーラムの時に機器をうまく活用した発表を試みないのは不自然に感じた。
◇オンライン参加の方（iPad）をケアしながらグループワークをすると、話し合いが中途半端になる感は否めなかった。だから嫌だという意味ではないが、効果の点で少しもったいない感じもした。
◇最終日 2 日間は体力的にかなりきつかった。翌日月曜日から仕事だと体調を崩しかねないハードさがあったように感じる（若い方は大丈夫かもしれません…）。日程を凝縮しているので仕方がないとは思うが、時間効率を高めて、翌日が月曜日であれば、最終日は 15 時から 16 時には終われるとよいかなと感じた。

● その他の自由意見・感想

◇大変勉強になった。この研修で学んだことを来年度以降も生かしていきたいと思う。
◇今回参加して本当によかった。もっと勉強したい気持ちになった。それと同時に、他の先生にも国際理解教育のことを伝えたいと思うようになった。まだまだ学年や学校の中心になってやれるほどの力はないが、少しずつ輪を広げて行きたい。
◇初めての参加で、みなさんすごい方ばかりで正直気後れすることもあったが、本当に多くの学びがあり、最後までやり通せたことで自分の自信にもなった。今は来年この実践をやるぞ！というやる気でいっぱい。
◇コロナで協力隊派遣が延期になり、気分が下がっていましたが、この研修を通して、国内でも出来ることがあると知った。また、研修を通して知った世界の現状や出会った仲間たちのおかげで、2 年遅れでも協力隊に行くという大きな決断が出来た。もともと新しい人と関係を築くのが苦手で、部活動もある中で、参加するか迷っていたが、勇気を出して参加して良かったと心から思う。ここで得た知識と仲間は、これからも大切にしたい。帰国したら、絶対にまた参加する！！
◇学ぶこと考えること、教えることの考え方の再確認、気付きが多くあり、実りのある一年だった。
◇いつも貴重な学び、楽しく学べる、仲間と出会える研修に参加できてとても嬉しい。
◇この研修を通して、私自身が人として成長できたと実感している。これは自己満足ではなく、行動が変わっているので、客観的にみてもそうだと思う。最後の最後まで本当に学びの多い研修だった。
◇約 1 年間という長丁場の研修で、大変だなと思うこともあったが、最終的には、楽しくやり終えることができた。毎研修、様々な学びがあり、また他の参加者の方々からもいい刺激をもらっていた。開発教育、国際理解教育という名前だけなんとなく知っていた教育が、形あるものとして自分の実？身？になっていく感覚があり、それもおもしろかった。また、研修で自分が興味をもった分野について調べたり、行動したり、授業をしたり、とにかく楽しみながらできたことが継続して行えた理由の一つかなと思っている。

◇すてきな研修で、みなさんがたくさん助けてくれ、学ぶことが多くあった。研修で出逢った方々はとてもキラキラしていて、すてきで尊敬する方ばかりだった。私もそんなみなさんのキラキラなところを、自分の中で生かしていけたらと思う。
◇コロナ禍での開催でしたが、対面で出来たことが大変良かった。
◇心配なこと、不安なことが沢山あったが、研修後は達成感と、ともに学んだ仲間たち、NIED、JICA の皆様への感謝でいっぱいである。かけがえのない経験になった。

以上

2021 年度 開発教育指導者研修（実践編） 報告書

発　　行　　2022 年 3 月

発 行 者　　独立行政法人国際協力機構 中部センター（ JICA 中部 ）

〒453-0872　名古屋市中村区平池町 4 丁目 60-7

Tel：052-533-0220（代表）　Fax：052-564-3751

http://www.jica.go.jp/chubu/

ジャイカ
JICA